



# 霧雨の魔女を恋ふ

*Resolution of the General Witch*

**His mother was a witch, and one so strong  
That could control the moon, make flows and ebbs,  
And deal in her command without her power.**

**William Shakespeare  
"The Tempest" Act 5, Scene 1**

## 【一】

耶蘇の聖地よりも、釈尊が横たわる菩提樹の陰よりも、遙か東の果て。

大陸の東端のさらに先ちつぽけな島国の、どことも知れぬ場所に、私達の住むこの樂園はあるという。大結界の守護の元、流れ着く幻想を受け入れ、妖怪と人間が共に暮らす、幻想郷。

その人里にある霧雨家と言えば、知らない人はまずいない名家の一つだ。歴史の重鎮たる稗田や瑞獣を奉じる白澤筋の上白沢には家の格で及ばないものの、幻想郷の物流の要所を押さえ、商家の本店として成長した。里の成立以降には多くの名士も輩出している。

その影響は人里に留まらず、妖怪の山や冥界にも伝手をもつという。

自分の生まれた家がそんな謂われをもつなんて、こ

のころの私はまるで知らなかったし、礼儀にうるさい多津ばあやにあれこれと口うるさく言われても、ほとんど右から左に聞き流していたからだ。

「——なあ、真理沙、本気で行く気かよ。やめといった方がいいんじゃないか？」

いつになく及び腰の寅吉が繰り返し引き留めようとするのに、私は少々うんざりしていた。

やっぱり人間、いざという時に本性が出る。いつも自分を従えてあれやこれやと命令して威張り散らしてゐるくせに、本当は臆病な奴なのだ。私はくすりと口元を尖らせて挑発する。

「なによ、びびってるの？ 弱虫」

「そ、そんなことねえぞっ！」

かあつと顔を紅くして叫びかえしてくる。分かりやすい奴だ。

けれどいきがってみせながらも、寅吉の膝はまだちよつと震えていた。まったくだらしがないやつだ。

寅吉は私より二つ年上のくせにがりがりに痩せていて、私と張り合えるくらいに背も小さかった。それで

も他の男の子達が後を付いて回るのは、大人相手でもはきはきとして物怖じしない態度と、ここ一番で度胸があるからだ。

けれどこいつはお化けや妖怪みたいなものには人一倍敏感だった。なんでも寺子屋で先生にされた怖い話のせいで嫌いになってしまっているかららしい。男のくせに怪談噺くらいで脅えるなんて情けない。寺子屋には一度行ってみたいと思っていたけど、この分じやあまり大したことは無いのかもしれない。

私はいつも通いの家庭教師の先生に、おやつ時間を過ぎてまであれこれとうるさくお稽古をさせられているので、お昼御飯の前になればおしまいの寺子屋と言うのはちよつとすらやましかつたけれど。

「嫌なら付いてこなくつたつていいのよ。私一人だけで行っちゃうから。……あーあ、勝六森の八角蜂の蜜つて、きつととっても美味しいんでしょね。もったいないなあ。私のとつておきの秘密の場所なのに」

もったいぶって独りごとのように呟いてみせる。八角形の巣をつくる蜂の蜜は、普通の蜂蜜の何倍も甘く

て濃厚だと評判である。

ウチのお店に並べてもちよつとした値段で取引されるくらいのものだ。六人で分けてもお小遣い稼ぎにも丁度いい。

私は一昨日、店に出入りしている勝六森の狩人が巣を見つけたという話をしていたので聞いたのである。

ちらりと窺えば、寅吉の後ろで子分たちが顔をくっつけて相談している。臆病な親分と私の顔を交互に見て、どっちが正しいのかを決めかねているのだろう。

私の話を聞いているうち、寅吉自身もいつのまにかごくりと喉を鳴らしていた。

「……まあ一つくらいなら、どうしてもつて、頭を下げてお願いするなら分けてあげても良いかもしれないわね。ぼくは臆病でした、どうかお許しください、真理沙さま、子分にしてください、つて」

「だ、だれがそんな事するかよつ！」

「へえ、じゃあ諦めるの？ それとも、真理沙の奴が悪いことしてんですよおーつて、大人たちに言いつけるのかしら？ お利口さんでちゅねー、寅吉？ えら

いえらーい」

「ぐっ……」

言葉に詰まる寅吉。おおよそ、口げんかでこいつは私に叶うはずがない。私達のやり取りで子分達はだいぶ浮き足立っていた。そもそも、大人たちの言う事を素直に聞く、お利口になりたいやつなんかここにはいないのだ。みんなを裏切つて大人たちに告げ口するような、臆病ものにもひきよう者にもなりたくないに決まっている。

「じゃ、行つてこようかなー」

皆に背中を向け、もつたいぶるようにゆつくりと間を取つて、一歩、二歩。

「ま、待てよ！ 真理沙！」

三歩目で後ろから声がかかった。戸惑う子分達を引き連れ、だつと寅吉が駆け寄つてくる。

「あら、どうしたの？」

「誰も行かねえなんていつてねえだろ！ 危ないかもしれないから気を引き締めろつてことだよ。なあ？」  
 そうだそうだと繰り返す子分たち。一番小さな渚垂

れの一郎太までいかめしい顔をして頷くものだから、私はちよつとおかしくなつて吹き出してしまった。

「な、なんだよ、まだ馬鹿にするのかよ」

「違うわよ」

口を尖らせる寅吉に、くすりと笑みが浮かぶ。なんだかんだいって、こいつはいい奴だと思ふ。

「——真理沙様！ 真理沙お嬢様！」

「やばっ、多津だ！」

家を抜け出したことがばれたみたいだった。

肩を怒らせて通りを向こうから駆けてくる喧しい声から隠れるように、身を伏せて里の路地へと走り込む。曲がつた腰をもものともせず、皺くちやの目を吊り上げて怒る多津ばあやは、私が苦手な古株の使用人である。

「お、おい、真理沙!? いいのか!?」

「いいのいいの！ 急ぐわよっ！ 捕まったらまたお説教されちゃう！」

寅吉の手を取つて、私は駆け出す。子分達も次々にその後が続いた。

小さな人里を抜けだして、不思議の一杯に満ちた広い世界へ。



——霧雨真理沙。

今年で八歳。里の子達より白い肌と、母さま譲りの豊かな金髪は、ちよつとくせつ毛だけ私の自慢だ。着物に似合わないといわれたり、森遊びの時には邪魔になつたりはするけれど、切つたりはしない。使用人の妙は髪は女の子の命だとか、手入れをするのが大変だからお控えくださいとか言つて、しきりに私に外遊びを止めるように言ってくるけど、別に私がどこで遊んでいたつて関係ないじゃない？

鏡を見ても、我ながらなかなか可愛いと思うのだけれど、ほつぺたの雀斑が少し不満ではある。女の子にとつて魅力的なもののだと、母さまも教えてくれたのに、虫の好かない明澄と取り巻きたちは揃つてこのことで私を馬鹿にした。今思い出してもむかむかする

けど——全員一発は引つ叩いてやったから、多分私の勝ちだ。

霧雨、真理沙。里一番の商家、霧雨のお嬢様といえ  
ば私のことだ。

父様には私一人しか娘がいなくて、母さまはずっと昔に死んでしまつたから、いちおう私が霧雨の家の跡取りと言うことになる。そのせいか父様はお稽古にお作法にと、私に沢山の習い事を押しつけ、危ないことはするなという。

けれど、そんなのはとつても窮屈でごめんだった。

お華にお琴に踊りにお謡に——習い事もたまにならいいけど、毎日なんて退屈で息が詰まつてしまう。

だから私は良くお稽古の時間に家を抜けだして、悪友の寅吉達を誘つて里の外に探検に出かけた。

大人たちは、里の外には怖い妖怪が居て、悪い子供がいれば頭からばりばりと齧つてしまうなんて脅かすけれど、そんな訳ないのは私もよく知つている。だって、父様はもともと、里と妖怪の御山を行き来する商人だつたからだ。

それに、大人たちはよく里の外に商売や、狩りや、農作業の為に掛けていくのだ。大人が外を歩いて平気なのに、子供だけ妖怪にさらわれて食べられちゃうことなんか、常識的に考えてある訳がない。頓知話じやあるまいし、子供には毒だなんて騙されるもんか。

それに、私達が狭い里の中でじっとしているのなんて馬鹿馬鹿しくなるくらいに、幻想郷のいろんな場所の、たくさん不思議な話が、私を魅了していた。

里の東、双子岩の橋のかかった河をさかのぼっていけば、河童たちの住むという碧が淵を始めとした、五つの淵と七つの沢が並ぶ。

そこを超えた先には天よりも高い九天の滝がどうどうと音を立てて溢れ落ち、妖怪の御山に繋がっている。今も煙を噴くあの大きな山には天狗達が住んでいて、人が近づけば攫って頭からバリバリと食われてしまうとか。

お地蔵様の四つ辻を曲がり、南東に広がる深い深い魔法の森には、昼なお暗き瘴気が立ち込め、恐ろしい悪霊が住んでいて、やってきた相手を言葉巧みに墮落

を囁いて殺し、その亡骸を自分のコレクションにしているのだとか。

西の竹林には一晩で何十メートルも伸びる光る竹が生えていて、毎日その姿を変えて人を惑わし、その奥には燃える炎を纏う紅い化け物が棲んでいるとか。

北の湖には大人でもぺろりと飲み込んでしまう大きなヌシが潜み、その畔には、遠く西欧からやってきた妖精やばけものたちがたくさん棲み付いた古いお屋敷があるとか。

里を出て、ずっとまっすぐに東の東——深い森の向こう、四つ辻を抜けた先の、長い階段の向こうに、博麗神社と言う大きな神社があつて。そこには、この里を守る巫女様がいる、とか。

里に広まるたくさん噂話は、私達を怖がらせるために大人たちが聞かせたものなのだろうけど、むしろ私達はそんなもので脅かされたりすることはなかった。ほとんどは作り話に決まってるし、もしそんなのが本当に居たとしても、私達にとっては冒険の種にこそなれ、妖怪を恐れて二の足を踏む弱虫なんていなかった。

のだから。

実際、里を抜けだしてのこれまでの冒険でもそんなのに出くわすことも一度もなかったのだし。——ずつとこれから先も、そうなのだと信じていた。

今日の目的地は、玄武の沢。

腕のいい石工が測量し、綿密な設計図に基づいて切り出し磨き上げたように精確な六角形の石柱がつらなる川底には、翡翠に瑪瑙に銀水晶に、見たこともないきらきらした宝石が沢山沈んでいるんだという。

それを拾いに行こうと思いついたのは、昨日、お風呂に入っている時。久しぶりに胸がドキドキするような思い付きに、興奮で夜はなかなか眠れなかった。朝もご飯を食べている時からうずうずしていて、お稽古の時間になるのが待ち遠しかったくらいだ。

先生が中座した瞬間を見計らって、部屋を飛び出す。すぐに後ろからは多津の怒声が聞こえたけれど——気にしない気にしない。

すでに広場に集まっていた寅吉達を捕まえて、里の外へと駆け出したのである。

運が良ければ、沢のヌシである大亀とか、ひよっとしたら河童とかにも会えるかもしれない。こっそり胡瓜も持ち出してきたし、準備は万端。まさに実にすばらしい思い付きだったのだ。

というのに、里を出てしばらくしても寅吉達は尻込みするばかり。一郎太までなんだか私を非難するように見上げてくるので、その軟弱な態度に腹が立った。

「なによ、行きたくないの？ 弱虫ねえ、寅は」

「……けどなあ」

いつものように挑発してみるが、一向に怒るでもなく顔を見合わせる悪戯鬼達の煮え切らなさに、私はふんつと憤慨して腕を組んだ男だつてのに揃いも揃って情けない連中だ。

「いいわよ、勝手にすれば？ でも、宝物を見つけても弱虫のあんたたちには分けてあげないんだからね。いいのかなー。あとで寅吉達は臆病ものだって噂になっちゃうわよ？」

いつもならここで、なんだと！ と怒鳴り返してくるのだが——今日の寅吉はどういう訳か、困惑の表情



を見せるばかり。いくらなんでも様子がおかしいと、私は眉を潜める。

「なによ……。拍子抜けね」

「……………」

「……………」

子分たちが寅吉の服の裾を引っ張り、小声で何かを囁き合う。その様子が妙にむかついて、私はほんと脚を踏みならした。

「んもう！ なんなの！！ 言いたいことがあるならはつきり言いなさいよ！」

「あのな」

言いづらそうに、寅吉はごしごしと手の甲を、帯の後ろに擦りつける。

「この前、八角蜂の蜂蜜取りに行ったじゃんか。あの時皆、蜂とか百足とかに刺されて……十蔵とか、しばらく起きられなかったろ？ 真理沙もたくさん刺されてさ。平気だつていったけどさ……」

「あそこ、蟲の妖怪の縄張りなんだって、爺ちゃんが言ってた」

「なあに、そんな事気にしてたの？」

確かにちよつと痛かったけど、すぐに治った。あれくらのことで怖気づくなんて、どいつもこいつも男らしくないなあ。呆れる私に、けれど寅吉は真剣な顔で。

「……それだな、お前んとこの親父さんに迷惑かけるなつて、母ちゃんが言うんだよ」

まさか父様の名前が出てくるなんて思いもよらず、私はぽかんと口を開けてしまった。

「その、お前、女の子じゃんか。あんまり危ないことさせるなつて。……違つて言つただけどさ、いいから謝れつて……聞いちやくれなくてさ」

「俺もさ、爺ちゃんにすっぱー叱られたから」

「うん。僕も……」

次々に皆が言い始める。もごもごと言ひ訳をするこいつらの言葉を総合すると、こうだ。

どうやら、霧雨のお嬢様である私を唆して、里の外へと連れ出しているのは、みんな寅吉達のせいだという事になっているらしい。これまでは大目に見ていたけれど、八角蜂の騒動は流石に目に余ったようで、そ

の事を気にした大人達が、金輪際そんな事はするなど寅吉達に言い聞かせた、ということのようだった。

「……………なによ、そんなでびびっちゃって」

あんな人の言う事なんて、聞かなくなつたつていいのに。真相を聞き出したからつて、私の心は全然すつきりしなかった。

なによりも、私がその事をまるで聞かされていなくなつたというのが、一番の衝撃だった。

「蜂くらいで済むならいいけど、本当に妖怪に出くわしてからじゃ遅いんだぞつて……」

「妖怪なんて、ばつかみたい。河童も天狗も、こんな所にいるわけないじゃない。あいつらはもつともつとずつと北の方に住んでるんだから」

母さまの読んでくれた本で、私は天狗達が妖怪の御山にいることを知っていた。私はこの本が好きで、小さい頃から何度も母さまに読んで読んでとせがんで、すつかり内容を覚えてしまつていた。

「それに、人食いの妖怪なんて大人たちが勝手に作つた嘘の話よ。あんなにたくさん大人の大人たちが里の外に

出てるのに、誰かが妖怪に食べられたなんて聞いたことある？ 弥七のお爺さんだつて、狩りの時に遭つたのは猪でしょ？ 妖怪が襲つてくるなんて、そんな事なにに決まつてるじゃない」

「でも、巫女様は本当にいるんだろ？ 妖怪退治をしてるつて言う……」

博麗の巫女と呼ばれる人を、私も一度だけ里で見たことがある。里に鎮護祭かなにかの打ち合わせで来たときに後ろ姿をちらつと見たくらいだけど、紅白の衣装に身を包んだ、綺麗な女の人だった。

……きつと、母さまと同じくらいの歳。里の皆は妙にかしこまつて巫女様を出迎えていた。

あんな綺麗な人が、恐ろしい妖怪を倒して回るなんて、やつぱり想像できない。巫女様は居るのは確かだけど、巫女様の祀る神様が地面を揺らす大ナマズを押さえつけたとか、そんなたぐいの昔話みたいなものじゃないだろうか。

「それに、父様が何を言ったのか知らないけど、そんなの関係ないじゃない。私が誰と遊んだつて、私の勝

手よ。気にすることなんてないわ！ 第一、父様だつてほとんど家に居ないんだから、おあいこよ！」

「……いや、そうなのかも、しれないけどよ」

「……………」

寅吉達は、相変わらず戸惑っているみたいだった。そりやそうだろう。いまのは私が霧雨のお嬢様だつてことを、はっきり宣言するようなものだから。

「……なによ」

父様は勝手なひとだ。

母さまはとても優しい人だった。私も随分小さかったからあまり詳しくは覚えていないけど、いつも私を膝の上に乗せて、色々なお話をしてくれた。綺麗でつややかな、絹みたいな金色の髪と、透けるような白い肌、吸いこまれそうに碧の焰が燃える青い瞳——私は残念ながら、その半分も受け継いでいないけれど。そんな母さまの美しさに惚れ込んで婿入りしたのが、店をもたず旅から旅への行商人だった父様だ。

けれど——母さまが私を産んですぐ死んでしまうと、父様は家にいることは少なくなつた。

だから、私の礼儀とかに五月蠅くいうのは、やかましい使用人頭の多津とか、歳の近い使用人の妙とか、いい歳をしてまだ見習いのリンノスケくらいだ。誰も彼もが腫れものに障るみたいに私から距離をとっていた。あの大きな家の中で、私が口を利く相手なんてほとんどいない。

今でも父様は滅多に店には顔を見せない。七つある店子はそれぞれの番頭にまかせて、いつも忙しそうにどこかに出かけてゆく。夜遅くになっても戻ってこないことも毎日のことだ。

父様は、里のために仕事をしている立派な人だと良く言われた。

でも、私は知っている。遊郭とか、里の外に仲の良い女の人をもつていて、そこに掛けは居座っているのだと。私がないと思つて、使用人達がこっそりそんな噂をしているのを、何度も聞いたことがある。本当なら酷い話だ。いくら母さまが死んでしまったからつて、それは無いと思う。

もし、父様があたらしい女の人と結婚したいという

んだつたら、正直に私に言えればいいんだ。新しい母さまなんてちよつとピンとこないけれど、相手によつては考へてあげてもよかつた。それなのに、私が何も知らないと思つて、自分はちゃんとした父親であることも放棄しているくせに、私にはちゃんと女の子らしくしろと迫るなんて、理不尽だ。

考へているとだんだんむかむかしてきて、私は地面をばんばんと踏み付ける。玄武の沢での冒険は折角の素敵な思い付きだつたのに、こんな事を思い出してしまふなんて腹立たしかつた。

「いいわよもう。あんたたちのことなんか知らない！怒られるのが怖いなら、好きにすればいいんだわ！」

怒りのままに寅吉達を押しつけて、ずかずかと歩きます。どうせ、あいつらの付き合いが悪かつたら、一人で行くつもりだつたのだ。翡翠も水晶もぜんぶ独り占めできるんだから、丁度いい。

しばらくして、寅吉が私に追い付いてきた。

「ま、待てよ！行かねえなんて言つてないだろ！」  
「あら、強がらなくつたつていいのに」

「だから強がつてねえっ！」

最初はためらつていたみたいだつたけど、すぐにそのぎこちなさも消えてゆく。追い抜き、追い越し、競争みたいに歩きながら言い合いを始める私たちに、やがて他の子たちも追い付いてきた。

一緒に歩き出す皆の中、いつもの調子で弥七が笑いを取り、十蔵がのんびりと呟き、一郎太がおいらもう子供じやないやいと背伸びを始める。

ほどなく、沢に響く笑い声。

そうだ。ちよつと嫌なことがあつたくらいでも、すぐに元通り。そうしていつも通り、私の、霧雨真理沙の日常が始まる。

……その頃私は、自分が里で一番勇敢であると思つていた。男の子たちと張り合い、大人達が尻込みするような事でも、いの一番にできるくらいに。だから、こうして皆も私に付いてきてくれる。それが私の価値なのだ、霧雨の家のお嬢様なんかでなくても、私はちゃんとやつていけるのだと、信じていた。

彼らこそ、窮屈なものを抜きにして、本音で付き合

える親友たちなのだ。なんだかんだいって、私達の友情は固く結びついているのだと。

少なくとも、このころの私はそう信じていた。

ちよつと周りを落ち着いて見回してみれば、違和感には気付けたはずなのだ。私の遊び相手に、同年代の里の女の子が一人もいなかったことや、寅吉がいろいろ不満そうなことを言つても、どんな時もちゃんと私の後をついてきたこととか。

寅吉の家が、私の家と取引をしている、片親だけのちいさな小売店であることとか。

霧雨のお嬢様に、万が一にも危ないことがないように、しっかり様子を見て付いていかなければいけないという事を、言い含められていたこととかに。

私は、気付けないくらい、子供であつたのだ。



「——それで、この様か」

厳めしい顔をして、父様が十数度目かのためいきを

つく。霧雨の御屋敷と呼ばれる、お店の裏手にある私の住む家。そこで一番広い部屋の主が、私の父様だ。

息苦しくなるほどに空気が重い。そのまま、ずぶずぶと畳の中に沈みこんでしまうんじゃないかと思えるくらいに。

広い部屋の中で正座をさせられた私に、父様がじつと視線を向ける。いたたまれなくなつて、逃げ出してしまうたくなる。私がなにか騒ぎを起こすと、父様は決まってこの目を私に向ける。

どうして私が言うことを聞かないのかと、その理由を八割がた理解しているような、諦めの混じつた視線。勝手に期待して、勝手に失望して、私の価値を、ここにはいない誰かに比べて値踏みするような。

——この目が、私はとても嫌いだつた。

「私が悪いんじゃないわ。皆で行くつて決めたのよ」

言い返す私の後ろで、平伏する多津と妙が、済みません申し訳ありませんと繰り返し返す。リンノスケは私がお屋敷を抜けだしたとき、ちようどお店に居なかつたので、この場には呼ばれていない。

「それに、父様だつていけないのよ！ 寅吉のお母さんや弥七のお爺ちゃんに、余計なことを言うから——」

「人の所為にするな」

岩を擦るような重苦しい声で言われ、私は思わず口を噤んでしまう。

「お前を助けるために、人が一人、死にかけたんだぞ。それを悪びれもせずに」

「申し訳ありません、旦那様。……私が目を離しておりましたのが全て悪いんでございますっ」

「多津のせいじゃないわ、私が——」

「煩い！」

びりびりと、障子が震えるような怒鳴り声。締め切った部屋の中で、小さな行燈の明かりに照らされる父様は、まるで人じゃないようにも見えてしまう。この場から動くことを許されず、もう半刻もずつとこうしていた。

玄武の沢は、九天の滝から続く溪流がとうとうと流れをつくる場所だ。

寅吉は、脚を踏み外して沢から落ちそうになった私

を庇って、代わりに流れに落ち——御山のとつぺんの雪解けの混じる冷たい激しい流れを、百メートル以上も流されたのだ。

一昨日の雨が沢の水を増水させていたのも悪かった。溺れかけた寅吉を前に、動揺してパニックになる悪戯鬼達。私には、どうすることもできなかった。

多分、そのままなら溺れ死んでしまっていただろう寅吉を助けてくれたのは、たまたま沢の下流で釣りをしていたお爺さんだった。顔に傷のある、ちよつと怖い顔の白い髭をしたお爺さんは、濡れるのも構わず沢に飛び込んで、激流をすいすいと泳ぎきって寅吉を抱えあげ、水を吐かせて手当てをしてくれた。

動けない寅吉を皆で代わりばんこに背負い、お爺さんと一緒に里まで戻る頃には。とつくに日も暮れていた。私達を待ちうけていたのは、篝火まで焚いて顔を蒼白にした里の大人たち。

一緒にいた子達は皆、待っていた親やお爺ちゃん、年かきの兄弟たちに迎えられ、ぶたれたり、叱られたりした。

私を迎えたのは——蒼白になった店の番頭と、相変わらず何を考えているのかよく分からないリンノスケと、うろたえる妙。私は怒られるでも、ぶたれるでもなく、そのままお屋敷に戻された。

父様が帰つて来たのは、その次の日の朝。事情を聞いて父様は、店の使用人たちに里の皆に不始末のお詫びをして回らせ、私を部屋へと呼び出したのだ。

「お前の我がままで、怪我人が出た。……一歩間違えれば死ぬところだった。真理沙、わかつているのか。お前が殺しかけたようなものだぞ。それでその態度か」

「……わかつてるわ。だからお見舞いに行こうって思つて——」

「真理沙」

苛立ちを押さえつけるように、父様が唸る。何がそんなに不満なのか分からなかった。悪いことをしてしまつたのは私だつて分かつてる。だから、今すぐにでも寅吉や、皆の所に謝りに行かなきゃいけないのに。「なんなの!? さつきからずうつと、わけわかん

い! お説教ならもう十分聞いたわよ! 私にどうしろつて言うのよ!」

「反省しろと言つてゐるんだ!」

「だから、みんなに謝りに行きたいって言つてるでしょ!? それなのに父様がこうやって、ずっと部屋から出してくれないんじゃない!」

「……………っ!」

売り言葉に買い言葉。分かつてくれない父様に、私も声を大きくして怒鳴りかえす。父様は逆らう私が気に入らないようで、脇息を思い切り叩いた。

「なんなの、このわからずや!」

「真理沙!」

「だ、旦那様、どうか、どうかご容赦くださいませ。

真理沙様も、昨晩は床で泣いておられました」。全て私の不徳の致すところだ——」

「あ、あたしがちゃんとしてなかったのが悪いんです。だんな様、申し訳ありません——」

「妙、やめて! あなた何にも悪くないじゃない! 多津もそんな事言わなくなつたつていいわ!」

ひれ伏す二人を置き上がらせようと、私は二人の身体を引つ張る。そんなこと、安っぽく宣伝されるのは嫌だった。本物のお嬢様みたいに、何もできずにただめそめそ泣いてるなんて、みっともないんだ。

けれど――畳の上に顔を伏せて、二人は石のように動かない。歯噛みする私は、憤りをどうすることもできずに、畳をだんだんと踏み鳴らす。

深く、深く。額に出来た皺を押さえて、父様が大きく、息を吐いた。

「真理沙、おまえはいくつになった？」

……慚然として、無言を貫く。ふいと顔もそむけて口を噤んでやった。

もちろん分かつてるけど、答えてやるような気分になれなかったのだ。

「ただでさえ、霧雨の一人娘が犬のように外で泥にまみれて遊ぶなど言語道断だというのに……。外に出てはならないというのは里で決められたことだ。それを、里の子どもたちまで巻き込んで、率先して決まりを破ったのはお前だろう。しかも怪我人まで出た。どれだ

けの迷惑をかけたのか、本当にわかってるのか」

「……………」

わかつてる。私が悪いんだ。そんな事とつくにわかつてるけど、そんなこと何度言われたって、私にどうしろって言うんだ。ここでごめんなさいごめんなさいと泣き喚けば満足なのか。そんなことで誰が許してくれるんだ。私が謝るのは父様じゃなくて、寅吉や、みんなや、そのお父さんお母さんじゃないのか。

それなのに、私がそれを口にする、父様はそんなことは関係ないと怒るのだ。わけがわからなかった。

「も、申し訳ありませんっ、あたしが――」

「だから、妙のせいじゃないわ！ そんなことしなくたっていいの！」

「真理沙」

冷たい父様の声。思えば、私は一度も、父様から優しい言葉なんて掛けて貰えなかったような気がする。

こうして名前を呼ばれるのは、叱られる時だけだ。

「あれに先立たれて以来、片親の引け目もあって自由にさせてきたが――もう捨ておけん。いい加減に弁え



ろ、真理沙。そんな有様で、貰い手がいなくても良いのか」

「……………別に」

精一杯の反抗を、顔をそむけてることで示す。

父様の決めた、顔も知らない誰かのお嫁さんなんてごめんだった。父様も皆も、事あるごとに私にそれを押し付けようとするけれど、そんなお仕着せの幸せなんか、私は欲しくない。

父様はもう一度、深く溜息をついて——しばしの無言の後。

「しばらく、外に出ることを禁じる」

私への処罰をそう締めくくった。



確かに、玄武の沢での事はちよつと大騒ぎになつてしまつたけれど、寅吉も少し水を飲みすぎたくらいで、なんてことは無かつたのだし、あいつも自分で平氣だと言つていた。

どうせ、いつものように怒られておしまい——と思つていたけれど、それはあまりにも甘い考えだった。

私はその日から、本当に一步もお屋敷の外へと出して貰えなくなつた。それまで与えられていた部屋から、お屋敷の奥にある母さまの部屋に移されて、朝も昼も夜も、ご飯のときもお風呂の時も、眠つてるときだつて使用人が見張りに付いた。彼女たちはみんな偏屈で、妙や多津のように私がからかつて誤魔化しても、まるで相手にしてくれず、淡々と私の脱出を阻止した。これまでとは比べ物にならないくらい、私の生活は管理され、習い事の間も逃げ出すどころかちよつと気を抜くことも許されなくらいにびしびしとしごかれた。最初のうちは、それですつかりくたくたになつて、夕御飯が終るともう動く気もなくなるくらいに疲れきつてしまうほど。

外出はと言えば、たまに中庭に出してもらえらるくらいのこと。ヘンな匂いのするお香を焚きこめた窮屈な着物を着せられ、帯をぎゅうぎゅうと巻かれて、寝る前も着崩すことも許されない。もともと白い肌はあつ

という間に日焼けが抜けて、なんだか不健康な白い色になってしまった。

寅吉には、一度だけ会う機会があった。

お客様が来るというのでお店の方に呼ばれた時、たまたまおばさんに付き添われて、寅吉がやってきていたのだ。板の間に正座して、畏まった顔で番頭さんとか話している。

あれから少し寝込んでいたと聞いていたとおり、あまり顔色が良くなかった。きっと怒られるか何かして酷い目にあったのだろう。

私は寅吉に会ってはいけなさと何度も言い含められていたけれど、あれからずっと会えずにいたのだし、せめて声だけでも掛けてやらなきゃと思った。

「寅！」

ちようど近くにいたリンノスケに見張りを命じて、こっそりと襖の隙間から、手を振る。

——けれど。

寅吉はちらりとこちら見て——それだけで、なにもみなかったみたいに顔を反らして、番頭さんに深く頭

を下げた。最初、私が無視されたなんて思いもよらず、気付いていないのだとばかり思っていた。

けれど、何度も何度も襖の向こうで手を振ってみても、同じ。

結局寅吉は、私に返事するどころか、気付く素振りも見せずに、そのまま帰って行ってしまった。なんともなんども、おばさんと一緒に頭を下げながら。

私のことなんて、どうでもいいみたいに見向きもせず、そのままいなくなってしまった。

「なんで寅、どうしてよ……？」

話をしたかったのに。

謝りたかったのに。

助けてくれてありがとうって、ちゃんとお礼を言いたかったのに。

「あんたが謝ることなんか、ないのに……」

鼻の奥がつんとする。

寅吉の不可解な態度に納得がいかず、近くにあった本を掴んで投げつけた。襖にぼしんとぶつかり、穴をあけて落っこちた本が、ばさばさとページを広げる。

二冊、三冊、同じことをして——むなしい癪癪に私はその場に座り込む。

「なんなのよ……」

広いお屋敷の中で、私に答えてくれる声は、なかった。

それからしばらく、気が抜けてしまった私は呆けたようにして——諾々とお作法や習い事の先生に従った。私の事情など頓着せず、つきつき押し寄せるお稽古事。仮病も使ってみたりしたけどあっさり見抜かれ、嘘をついた罰として宿題が増えた。

私もなんだか、寅吉に無視されたことがきつかけに、面倒なことを考えるのが嫌になってしまい、逆らう事もなく、まるで人形みたいに、言われるままに言われた通りのことをしていたのだ。

唄に踊りに、お茶にお琴……退屈でしかたがなかったし、もちろん身も入っていなかったから、先生には真面目にやりなさいと何度も怒られたけど、結局私の立場を考えればそこまで強く出ることもできなかったらしい。

新しく始まった修身の勉強も詰まらなかった。せめ

て皆と同じ寺子屋に通えば、また皆と会えるし、噂の慧音先生って人にも会えると思っただけ——父様にそうしてもらえないか、多津に頼んでみても、返事はなしのつぶて。

代わりに道徳の暗唱をさせるうるさい家庭教師が一人増えただけだった。

どこへお嫁に出しても恥ずかしいような、教養と立ち振る舞いを身につけなければならぬのだというのが、私の礼儀作法の先生になった咲の口癖だった。

咲は、あれこれと私の考えにまで口を出し、こういうものは霧雨の一人娘には相応しくないと行って、買ってもらったばかりのズボンを取り上げたりもした。

昔、母さまの世話をしていたという咲はすごく物腰も丁寧で、決して声を荒げたりはしないけれど——私に、霧雨真理沙という個人よりも、霧雨家の跡取りのご令嬢という記号だけを要求しているようだった。

逃げようにも逃げる場所はなく、使用人たちはごく一部を除いて皆、私の味方をしてくれなかった。

妙だけは、それまでと同じように接してはくれたも

の——これまでみたいに、私の言う事には何でも従う事は無くなっていた。それだけは、ご勘弁くださいと、何遍も頭を下げては、私に許しを請う。

それがむかついて、私は妙に手を上げてしまったこともある。もちろん後でしこたま怒られた。

多津はあれからすっかり寝込んでしまつて、滅多に顔も見せなくなつた。会つたたびに口を酸っぱくしてお行儀よくなされませと繰り返す多津ばあやは、うるさくて好きじゃなかつたんだけど、こうして会えなくなるとひどく寂しく思えてしまう。

私を楽しませるつもりなのか、お洒落や櫛、着物などはたくさん贈り付けられてきた。父様を取り寄せたものも、咲が集めさせたものもあつたのだろうと思う。私はそんなもの、興味もなかつたけれど——使用人たちはそれで私を着飾らせるのが好きだった。

庭に出て遊ぶこともさせてもらえなかつたから、みるみる手足も細くなり、肌からは日焼けの後も抜けていった。私は、日毎貧相になる自分の顔が嫌でたまらなかつたのに。

咲を始めとした新しい使用人たちは私を取り囲み、鏡台に映る、日に日になまつ白くなる顔に、さらに白粉を塗りたくり、紅を引いて、くせつ毛の金髪に椿油をべたべたと付けて櫛を通す。

仕立てたばかりの着物を着せて、まあお綺麗ですわ可愛いですわと褒めそやす使用人たちの言葉は、まったく本当に心に響かなかつた。

「……ねえ、これ、そんなに綺麗なの？」

「ええ。当たり前じゃありませんか、お嬢様。奥様も私がお世話しておりましたもの。間違いありませんわ」  
甘ったるい猫なで声。ご機嫌取りをされているみたいでむかむかする。けれど、鏡に映る自分の姿は、なんだか霧雨のお嬢様の鋳型の中に詰め込まれて焼かれた鯛焼きと同じで、外見ばかりを繕つた、お仕着せのお嬢様でしかない。

「本当にねえ、奥様にそっくりで……」

「ねえ」

「はい？　なんです、お嬢様」

「本当なの？　……母さまにそっくりつて」

「ええ、ええ。勿論で御座いますとも」

使用人たちはお綺麗ですよと口々に言う。けれど、いくら着飾つても、私はがりがりの手足、もじやもじやくせつ毛の金髪、雀斑の目立つ低い鼻。いくらお化粧で誤魔化しても、記憶の中にある母さまとはまるで似ても似つかない。だから、皆の言つてゐることは信じられない。

私の周りにいる者たちは、私と話をしているんじゃない。『霧雨のお嬢様』を持って嘸してゐるだけだ。ここにいるのが私でなくつたつて、こいつらは同じお世辞を言うんだろう。

「大旦那様も、奥様をそれはそれは大切になさつておいででした。もつと、お稽古に精を出されれば、ますますお綺麗になりますよ。お化粧もお洒落も、もつと興味をお持ちいただければなお良いですよ。ええ。ええ、本當にお綺麗です、お嬢様」

「ええ、まつたく奥様に生き写しで——これならきつと良い旦那様が、お迎えに来てくださいますよ」

何の気なしに漏らしたのである。気の緩みか、ある

いはもうとつくに私も理解していると勘違いしてゐたか。使用人の一人が迂闊にも口にしたその言葉が、私に父様の真意を気付かせた。

要するにこれは、私の嫁入りのための躰なのだ、と。

私の価値を少しでも引き出すために欠かすことのできない、商品の手入れなのだ。

(きつと、母さまもこうだったんだわ)

才覚も賢い智慧も要らない。馬鹿みたいに穏やかな笑顔を浮かべて、どこかの馬の骨と番いにされることとが、霧雨のお嬢様に求められる商品価値なのだ。

少し前なら、癩癩を起して暴れていたかもしれない。

でも、どこか他人事のように——私は、その事実を受け入れていた。どうせ私の運命はもう決まつてゐるんだと、自棄になつてゐたからかもしれない。

その日も私は朝から着付けにお唄に、お作法にと非引つ張りまわされ、午後からは咲に人形みたいに着せ替へをさせられ、すっかりくたびれて床に就いた。

「——」

けれど、夜になつてもどうにも寝付けない。

何度も寝がえりを打って、結局まどろむこともできなかった私は、ついに諦めて床を抜け出した。

部屋の隅までゆき、きい、と真鍮の蝶つがい小さく軋ませて鏡台を開き、その奥を覗き込む。

百合を象った三面鏡の奥に、見飽きるくらい見たことのあるぼさぼさの金髪をした、雀斑だらけの顔があった。

母さまの顔は、もうはつきり覚えていない。おぼろげにどこか温かな声と、そっと抱きしめられた時の感触だけが記憶にある。

ぺたりと鏡に指が触れる。冷たい感触の向こう、鏡を覗き込むこの顔に——使用人たちが言うように、母さまの面影が、本当にあるんだろうか。

母さまは、生まれ付き身体が弱く、病弱な人だったのだという。咲の言う大旦那様——私のおじい様にあたる人が、随分歳をとってからできた娘で、一年を通じて長く床を離れることはできず、滅多に外に出る事もなかったらしい。

当時、いつか自分の店をもつことを夢に見て、行商

を営んでいた父様は、妖怪の山や溪流沿いの集落、中有の道を行き来していた。ふとしたきっかけで霧雨の家に出入りするようになり、母さまと知り合った父様は、見事おじい様の眼鏡にかなって母さまを娶り、霧雨の家に婿入りしたのだ。

私を産んでから、母さまはますます身体を悪くした。もともと、子どもを産めるほど丈夫な身体ではなかったから、私が元気に産まれてきたのは結構な一大事であつたらしい。

確かに私と母さまが遊ぶのもいつもお屋敷の奥の部屋だったし、母さまはいつも部屋で寝ていて、調子がいい時にも上掛けを羽織って、陽だまりでじっと佇んでいるような、柔らかくて儂げな印象がある。中庭ではしゃぐ私を、母さまは床の上からニコニコと見守ってくれていることがほとんどだったかもしれない。

それでも、私が遊びに行けばいつでも、母さまは私にいろんなものを教えてくれた。母さまの部屋にはたくさん綺麗な本や、素敵に光る石や、甘いお菓子が沢山あった。だから、私は何よりもこの母さまの部屋

に来るのが好きだったのだ。

この前の春の節句に——久しぶりに会った分家の人たちや、稗田や上白沢の人たちは、挨拶をした私によく母さまに似てきたとお世辞を言い、綺麗だ綺麗だと褒めそやした。

でも、私の思い出の中にある母さまは、もつともつと綺麗な姿をしていたような気がしてならない。それなのに、ちんちくりんでくせつ毛、雀斑だらけの私がそっくりだと褒められるのは、母さまをいっしょに貶められているみたいで、なんだか気に入らなかった。

「……ん」

かたり、抽斗を開け、飾り貝の中にある紅を、小指ですくう。

鏡台の奥にある不細工な顔をみつめ、見よう見まねで唇に引く。咲がしてくれるようにはうまくいかず、はみ出した紅はぐにやりとまがつて、まるでお化けみたいに口を紅くした。

月明かりの下——血で唇を汚した、妖怪みたいな、みにくい女の子。

「……母さま」

私がいま本当に——母さまに似てきたと言うなら。

こうやって、咲や先生たちの言うことを聞いて、お稽古事に精を出して、お洒落やお化粧を覚えていけば、もつともつと母さまのようになれるのだろうか。

そうやって、

私がいまと大人になれば、父様は家に戻ってくるというのだろうか。

——父様はそのために、私を家から出さないようにしたのだろうか。

なんだろう、そうやって考えてしまうとひどく嫌な気分になって、私はごしごしと口紅をぬぐう。べたりと手のひらで広がった紅が拭いきれずに、頬にまで広がる。寝巻の袖でそれを擦り、私は部屋の奥にある籠へ近付いた。

籠の戸をあけて中の文鳥を連れだす。

この手乗り文鳥は、父様からの贈り物——だと、いうことになっている。いつだったか、外に出たいと文句を言う私を慰めるように、妙が連れてきたのだ。

もちろんこんな小さな鳥が外に出ることの代わりに  
なるなんてあるわけもなく、朝夕と鳴いて煩かったか  
ら、部屋の隅に押しやった文鳥の世話は、もちろん妙  
の仕事になった。

「……お前、ここから出たい？」

聞いてみるが、文鳥は寝ぼけているのか、首を傾げ  
る様子もない。

埒が明かれないと思つた私は、握り潰してしまわない  
ように文鳥を連れて——そつと障子を押し開けた。中  
庭に面した一部は雨戸を閉めておらず、縁側まで月が  
煌々と光を投げおろしている。

周りに誰もいないのを確認して、そつと突つ掛けに  
脚を突つ込み、庭に出る。

「ほら」

手を広げ、お行きと文鳥の背中をつついてみるが、  
こいつはなぜかまったく気にした様子がなかった。

ちよつと羽ばたけば、昼みたいに明るい空がそこに  
見えているのに。

焦れた私は、文鳥をひよいと放り投げてみた。

中庭に放り出された文鳥は、ばさばさと忙しく羽  
根を動かし——そのまま地面に飛び降りて、羽をたた  
み、歩きづらそうに地面にぽてりと落ちた。もがくよ  
うに身体をよじり、長い羽根がばさばさと地面を擦る。  
文鳥の翼は、飛べないようにかざきり羽を切り取ら  
れていた。

「……ああ」

すぐに分かった。

こいつは私と同じだ。万が一にもここから出られな  
いように、羽根を切つて閉じ込められたんだ。

「……なによ……これ……」

……私のことなんかどうでもいいくせに、ちゃんと  
したお嬢様にならなければいけないと、母さまのよう  
にならなければいけないと、そう言うのか。

母さまのように、ここから出さないと言うのか。

なぜだろう。背筋を耐えようもない寒気が襲う。私  
はもうここから出られないのだと理解した瞬間、わけ  
のわからないおぞましが、私を押し包む。

まるで、誰か見知らぬ相手の手で、べたべたと全身



をまさぐられているような錯覚。  
気持ち悪くてたまらなかった。

「……………つつ！」

一人でいることが堪え切れず、部屋へと戻つて床に潜り込む。けれどお布団を頭からかぶつても相変わらず、部屋の隅に澱んだ暗がり私が私をじっと見定めているような気がしてならなかった。気のせいだと思つように努めても、不安は心からぬぐえない。

ぎゅっと目を閉じてても、心にへばりつく厭な想像を振り払えず、私はばたばたと脚をばたつかせる。

ふいに――

「――つ!?」

ばさり、と音がして、私はあと少しで盛大に悲鳴をあげるところだった。

うるさくし過ぎたせいか、本棚の上に積み重ねつぱなしにしてあった本が、崩れ落ちたのだ。まだざわざわと栗立つ背中を擦り、私はそつと本に手を伸ばす。

広がった頁から、ふわりと懐かしい古紙の香り。

「これ……………」

忘れもしない。あの、母さまの本だった。ずっとずつと小さな頃、膝の上で、読み聞かせてもらった不思議な物語。童話の絵本や、物語。カラフルな図鑑や、古い歴史の絵巻物。

良く見れば、本棚の上の方で埃を被っていた数冊が、何かのはずみで落つこちてきたらしい。

おそろおそろ頁を広げれば、そこには、母さまの思い出が詰まっていた。七つの海をまたにかけた海賊、不思議なランプに呼び出される魔神、ブリキの樵や弱虫のライオンを連れて虹の向こうを目指す女の子。

そんな物語に混じつて、古びた便せんに書き付けられた文字の束がある。

(母さまの字だ)

直観的にそう思った。数十枚の便せんに、びっしりと書き込まれた難しい文字と、記号と、何かの図形のような紋章。

……それは、

母さまの書いた本だった。便箋のように見えたのは、ノートの端を切り取って束ねていたからだ。

読めなくなつて私には分かる。

そこには、母さまの思いがたくさん、たくさん詰まつていた。いっぱい秘密と不思議が記されていた。

死んだ人と話すための魔法や、遠く離れた場所のこ

とを見聞きする魔法、悪霊を呼び出して従える魔法。母さまの魔法の本の中には、そんな魔法のことが沢山記されていた。

「ま、ほ、う……」

まほう。魔法。間違いない。表紙にある字をたどたどしくなぞつて、私は確信する。

これは魔法書だ。

母さまは、魔法を勉強していたんだ。

この狭いお屋敷を抜け出して、広い世界へいくために。母さまも同じことを考えていたんだ。いまそれが分かつて、私は急に嬉しくなった。同時に、じわりと涙が滲む。母さまの本をそつと抱きしめ、私はしばらく泣いた。

「母さま……」

きつとこれは、母さまが私の為に残してくれたもの

だ。私はそう信じて疑わなかった。

この部屋から抜け出すために。

私は、魔法の勉強を始めた。



母さまが残してくれた魔法書はどれも難しい字が一杯書いてあつて、なかなかすぐには読めなかった。魔法と言うくらいだから人を呪つたりするちよつと物騒なことも書いてあるので、まさか家庭教師の先生に聞く訳にもいかない。ただでさえ咲は私が本を広げるのに良い顔をしない。

女に学問なんか必要ないという考えは、里ではもう随分前から古臭いものになつているし、母さまだって、あれで結構商売の事は詳しかったくらいなだけ、親子三代で霧雨の家に仕える咲は、黴の生えた頭でいまだに女は慎ましく男に従うべしなんて化石のように考えているのだ。

それでなくても、今の使用人たちは私になにか変わ

りがなく、常日頃から目を光らせ、父様に報告している連中なのだ。私は誰にも秘密で、母さまの魔道書の解説を進めなければならなかった。

私はお稽古の復習をすると思つて、遅くならないうようにする約束でランプを借り、こっそり母さまの魔道書を持ち込んで読んだ。咲は夜更かしにいい顔をしなかったけれど、自分からお稽古をしたいといつてゐるのだから、表立つて反対もし辛いはずだ。

魔道書にはあまりにも難しい言葉がたくさんで、中には暗号みたいに書かれた頁もあったけれど、私は辛抱強く母さまのお話を思い出し、ひとつずつ読み解いていった。

そうして少しずつ解説を進めながら、私は魔法の儀式のための準備を始めた。

妙にお小遣いを渡し、魔法に必要な材料を集めさせたのだ。無茶な命令をされて妙はへこへこ、ご勘弁をと謝ったけど、父様に言いつけると言ったらちゃんと頼んだものをもってきてくれた。もちろん怪しまれないように、おやつや色紙、流行りの簪や櫛に混ぜて買

わせるようにした。妙にもすっかり分け前を渡してあるので、共犯である。

それでもトカゲの尻尾とか、ツキヨタケの粉末とか、真つ赤なぶどう酒とか、イモリの黒焼きの燻製とかは妙にはとても見つけてこれなかったもので、こちらはリンノスケに言い付けて持つてきてもらう事にした。

すっかり大人なのに見習いで、ぼーっとした男だけど、どういう訳か私の言うことは良く聞いてくれたので、秘密にしろと言えばきちんと他の使用人たちには黙つてことを進めてくれるのだ。

そうして材料を――魔法の言葉では触媒、と言うらしい――を集めながら、私はどんどん、魔法に傾倒していった。夜には書いてあることを実践して、月の光を出来るだけ多く浴び、呼吸の仕方や指印の切り方、魔法陣の書き方などを覚えて、少しずつ魔法を身につけていったのだ。

私が実践しようと思つている魔法は決まっていた。魔術書に書いてあったなかで、私が読める中で、いちばん難しい魔法。

反魂燈という、死んだ人の魂を呼びだして、話ができる魔法の燈籠を作るといふものだ。

理由は単純。……母さまにもう一度会いたい。

この魔術書を手に入れ、魔法を収めてりっぱな魔法使いになった私が、最初にするべきことはそれだった。きつと、母さまは私を褒めてくれるだろう。

「猫の左爪、葡萄酒、銀石英の粉……」

いよいよ今夜は満月。決行の時である。こつそり起き出し、蒲団の上に風呂敷を広げ、集めた材料を吟味しゆく。乳鉢で刷り潰し、ランプの脂と蠟を混ぜたもので練る。月と星の巡りの正しい時に、代価となる生命の霊髓を振りかけて、月明かりの下でこれに火をともせば、冥界との道が開けるのだ。

ただし。

これまで何度か試してみた、その日一日を幸運に過ぎす魔法や、明日をどう過ごせばいいかを決める予言の魔法のような小魔術とは違って、難しい魔法の為にはそれだけ大きな代償がいる。

魔法の法則は等価交換だ。本来、ひとりではできな

いことを出来るようにするためには、それと同じだけの大きな代償がいる。死者を呼び戻すには、どんな小さなものであっても、生命がその代償だった。

とは言え、まさかそのために誰かを殺すなんてわけにはいかない。いけにえと言えば山羊や鶏が定番だけど、流石に生きたそれらをもってこさせるのが難しいのは、私にも十分わかっていた。いまだって随分無茶を言っているくらいで、リンノスケが困った顔をして、頼んだものをもってこれなかったと謝ることもあった。裏庭の小屋に行けば、鶏くらいいるだろうけど、あそこには毎日彼らの世話をして、鶏一匹一匹の顔まで覚えている使用人がいる。一匹いなくなれば大騒ぎだ。霧雨の家で盗みを働いたなんて、それだけで酷い目に遭わされても仕方がない。できるだけこつそりと済ますにはあまり頭のいい方法ではないだろう。

といって、小さな羽虫では、十分な対価にはならないかもしれない。上手くいっても羽虫一匹分の生命じやほんの数秒しか効果が持たなかったりしたら、あまりに勿体ない。

用意できた反魂燈は一回分しかない。もう一度材料を揃えるのはかなり難しいだろう。次の満月までは一月あるし、雨が降ったり曇りだったら儀式そのものが出来ない。折角の材料を無駄にしてしまえば、母さまに会えるチャンスは当分巡って来ないのだ。

せめて外に出かけられるなら、蛇や蛙を捕まえて使えうんだけど……お屋敷に閉じ込められたままではそれも叶わない。ここがボロ屋ならネズミの一匹くらいで済むのかもしれないが、綺麗好きの多津ばあやがうるさく使用人たちを取り仕切り、台所も床下も天井裏も、ぴかぴかに磨き上げていたせいとか、お屋敷には喻え薄暗い蔵の中にも蜘蛛の巣ひとつはらず、ネズミ一匹見かけない。

「どうしよう……」

迷っているうちに夜はどんどん更けてゆく。そろそろ月が天頂に掛かるころだ。中庭で儀式をはじめなければいけない。焦る私は、寝巻のままぐるぐるとその場を回り始める。

——その時。

私がうるさくしていたからか、部屋の隅で起き出した文鳥が、ちちちと鳴く声が耳に入った。

ああ、これだ。

格好の材料があつた事に喝采して、私はよどみなく行動に移る。

ゆっくりと息を殺して何度も周りを警戒し、中庭へ。いよいよだ。一月かけて準備した魔法の儀式に、否が応でも胸が高鳴った。

ごくりと固い唾を飲み込み、月明かりの下に乳皿を置き、その上に練った蠟をそつと載せる。蠟の中に立てた芯を解し、近くにあつた燐寸<sup>マッチ</sup>を確認。ゆっくりと火を灯した。

緑色の蠟が溶け、反魂の魔法を封じ込めた灯が白い煙をくゆらせる。このお香の上に、捕まえた文鳥。この首を切つて、血をこぼせば——魔法は完成する。

かあさまに、会える。

「……………」

文鳥は相変わらず間拔けな顔をするばかり。飛べない羽根を時折ばたばたと動かし、きょとんと、首を傾

げる。ロクに飛ばず、妙が餌ばかりやっているものだから、始めて私の部屋に来たところに比べても随分まるまると太っていた。

「……………さあ、やるわよ」

小刀を手に、緊張に震える自分の指を握り締め、決意を口にする。文鳥は相変わらず暢気なものだ。自分の命が終わろうとしている事も分かっていない。私が少しその気になって、この小刀を動かせば——死んでしまうというのに。

「……………」

手が、動かない。震える小刀の切っ先を、文鳥の喉に押し付けたまま。私は石像みたいに強張った指をそのままにしていた。

私は魔法使いになったのに。運命を見、不可能を可能にして、生死も飛び越える魔法使いになったのに。なった、はずなのに。

けれど——自分でも笑ってしまうくらい、私の息は震えていた。

……そして。

「真理沙、なにをしている」

突然の声に振り向けば。

双眸に怒りを漲らせた、父様の姿があった。



父様は烈火のごとく怒った。私の集めた魔法の道具をぜんぶ集め、庭に積み上げて燃やしたのだ。それだけじゃない。母さまの残してくれた本までも、全部、その火の中にくべてしまった。

「やめて！ やめてよ父様！ それは母さまのものよ！ どうして勝手に燃やすの!？」

飛び付いて止めさせようとする身体が跳ね飛ばされる。どしんと尻餅をついた拍子に頭をぶつけ、一瞬目の奥が真っ白になる。

「だ、旦那様……」

「……………」

壮絶な顔の父様を、使用人たちは遠巻きに見守るばかり。燃え盛る炎の中、母さまが残してくれた本が次々

灰になって、崩れてゆく。真つ黒な煙が立ち昇り、空に高く登つてゆく。

「燃えちやう……母さまの本が、全部燃えちやう！……やめてよ！ 父様、やめて！ 妙、多津、リンノスケ！ やめさせてよ、こんなの、やだよ！」

「黙れ！」

ばあんと、強く横顔を叩かれた。身体が地面に投げ出され、耳が聞こえなくなる。口の奥にじやりりと土を嚙んだ。じわりと広がる鉄くさい味が、背中を震わせた。熱い衝撃から一拍遅れて、ずきずきと痛みが拡がってくる。

それだけでは済まなかった。倒れたところから胸を掴まれて引き起こされた私は、さらに左右の頬を叩かれた。

一人娘に向けるには強すぎる暴力に、使用人たちが一斉にどよめく。咲は眼を回して、リンノスケに支えられていた。

「……………」

母さまの本を灰にして吹き上がる火柱に背に、父様

は怒りすら滲ませて、じつと私を見降ろしていた。理解の及ばない怪物を見る目だった。

私は、父様の大きな姿が急に恐ろしくなった。

このひとは、その気になれば私を簡単に害せるのだ。私が、文鳥にしようとしたみたいに。

簡単に、私を、殺すことができるのだ。

——それが恐ろしくて、怖かった。

「……………二度と」

長い長い沈黙の後、たき火がほとんど白い灰になって崩れる頃に、父様は口を開く。錆ついた錠前を、辛うじて動かすような、軋んだ声音で。

「二度と、こんな真似をするな」

「……………」

「真理沙。返事はどうした！」

思い切りぶつけられる言葉。頬が痛む。地面に突き飛ばされた時の膝と胸が痛い。

なによりも。

全てが燃え尽きた灰の中で、言葉に出来ない私のなにかが、激しく斬り取られたみたいに、痛む。

私は母さまにもう一度会いたかっただけなのに。冥界に暮らしているはずの母さまに、一目だけでも会って、頑張つてると伝えて、声をかけてほしかった。それだけだったのに。

「ふざけないで！　へんよ、おかしいわよ！　父様は、もう母さまに会いたくないの!？」

かあつと燃える気持ちだが、言葉になつて飛び出していた。眼を見開き睨む私を、けれど父様は冷たい目で見降ろす。

「あれは、もう死んだ」

「そうじゃないっ!」

思い切りかぶりを振る。なんで、なんで、なんで、このひとは、そんなことも分からないのか!

「どうして!？」　どうして平気なの!？　どうして父様は、母さまに会えないのに平気でいられるの!？　父様は、母さまに会いたくないの!？　どうして!？　ほか好きな女の人がいるからなの!？」

最後の言葉を口にした時、凄まじい眼で、睨まれた。  
「だ、だんな様……っ」

妙は、額を地面に擦り付けんばかりに伏す。リンノスケも同じように、深く頭を下げていた。父様はそれを一瞥もせず言い捨てる。

「お前が付いていながらなんという様だ」

「あ、あ、申し訳ありませんッ」

「違う!　妙は悪くない!　妙にも、リンノスケにも、私を買つてきなさいって命令したのよ!」

「だんな様、も、申し訳ありませんッ、申し訳ありません……ッ」

壊れたように謝罪を繰り返す妙。

どうして。どうしてこんなことになるのだろう。

……そんなに、そんなに、母さまに会おうとするのは悪い事なの?　そんなはずはない。

そんなこと、ありえない!

「父様、答えてよ!　父様は、もう母さまのことなんて忘れてしまいたいのか?　もう一度話したいって考えないのか!」

「こんな事をしでかして、反省どころかまだそんな事を言うのか」



「だから、何を反省しろっていうの!? 父様こそおかしいわよ!? 私は母さまに会いたいだけなのに! くそ! 離せ、離しなさいよあんたたちっ!」

飛び出そうとした私を、使用人たちが寄つてたかつて押さえつける。もがいても暴れても逃れることはできず、私は声を振り絞つて叫ぶ。

喉が枯れてしまつても良い。私を連れて行こうとする使用人たちに、手足を振り回して抗ひ、叫び続けた。けれど——父様の背中には、届かない。

「真理沙。……今後、この部屋に入るのを禁じる」

「……………ッッ!」

あまりにも一方的に投げ付けられる、拒絶の言葉。私は腫れて熱い口の中で、ぎりりと歯を軋らせた。

もう嫌だ。——もう限界だ!

「父様の馬鹿! もういい、こんなくだらない家、出てつてやる!」

「……自分の立場もわきまえずに、くだらないことを言うな」

「嘘だと思つてゐるんでしょう? 本気なんだから!

父様なんか、私の父様じゃないっ!」

「——ッ」

瞬間。右の頬が張られた。

手のひらじゃなく、ほとんど拳骨。力加減も何もなく、首の骨が折れてしまったんじゃないかと思うくらいだった。こんなにも強くぶたれたのは、初めてだった。口の中に鉄と塩の味。じわりと滲む痛みが、私の目元を揺らす。

「——真理沙」

頬を張られた痛みが、じんじんと疼いていた。骨の奥にまでは届かない、肌と肉だけを痛める痛み。自分が非力な女であることが否が応でも感じさせられる暴力だった。

「あ……」

ひゅう、と喉が熱い息をこぼす。拳を固め、無言で怒りをたぎらせる父様に、私はもう委縮して、何も言ひ返すことはできなかった。

鼻の奥が熱く、目元が滲む。なんて情けない。打たれて声を荒げられれば、ちっぽけな私はもう、なんにも

反抗できなくなる。

分かつているのに恐ろしい。勇気のない自分の手足。魔法が使えればこんな理不尽、くしゃくしゃに握り潰してしまえるのに。

「部屋に戻せ」

一方的に会話が打ち切られ、背を向けていく父様の姿はみるみる遠くなる。使用人たちはまるで心を亡くした人形みたいに、諾々と父様の命令に従っていた。

(……………、ッ)

言葉にできない感情が、ぐるぐると胸の中で渦を巻く。マグマのように熱く滾り、燃え盛る。いくら暴れようとも、喚こうとも、けして晴れない憎悪が、心の中に凝ってゆく。

……私のことを、父様は、最後まで振り返ろうとはしなかった。

しばらく後になって、父様はこのころ、私には内緒で、私の婚約を進めていた事が分かった。

相手は里でも大きな、金融を扱う商家だ。その、七つも上の馬鹿息子に、まだ八歳だった私を宛がうつ

もりだったらしい。こいつが相当な変態で、同い年か年上の女の子には興味すら持たないという酷い相手。

父様はこのことを知ってか知らずか、問題がなければすぐに結納まで済ませるつもりだったらしい。幸運なことに、この騒ぎが噂になって、この話は無かったことになった。

私がつとおとなしく、お嬢様としてボロを出さないようにしていたら、もう少しましな縁談はあったのかもしれないけれど――

それを自業自得だなんて抜かす馬鹿は、ぶんなぐつてやりたかった。

## 【二】

——もう嫌だ。こんな家、出て行ってやる。

その言葉は嘘じゃなかった。一週間。私は大人しく父様の言う事を聞いて過ごして傷を癒し、その間に準備を整えた。

宝物にしていた、母さまのくれた櫛。毛布に、水筒に、おやつのお金平糖、こっそり集めた露草の朝雫や猫の爪、水晶の粉などの魔法の触媒。大事な荷物を吟味してリュックに詰め込む。

家を抜けだすのは金曜日の夜中。ちょうど五十日でもあって、店がいちばん忙しくなつて、私なんかに構っていられなく時間だ。反魂燈の時に夜中に捕まったので一度は躊躇ったけれど、やつぱり昼の間に誰にも見つからずに抜け出すのは難しいと考えたのだ。

その代わり、夜遅くではなく、まだ夜が明けきらな

い早い時間にした。

結論から言つて、脱出はあつけないくらいにあつさり成功した。お屋敷の使用人たちだつて、私一人を見張るために徹夜仕事なんてまづびらだろう。そう考へた読みは見事当たつていた。実際、一週間大人しくしていたせいで気が緩んでいたというものもあるかもしれない。父様との諍いでああは言つたものの、私が本当に家出するかもなんて思つていたのは精々、妙か多津か、リンノスケくらいだったはずだった。

眠りこけた使用人の傍を、足音を立てないよう忍び足で通り抜け、勝手口のかんぬきを外せばすぐに家の外には出る事ができた。

子供達が里を抜け出さないようにと、里の回りに大人達が作つていた柵には、たくさんのお金平糖があつた。これまで寅吉達と一緒に抜け出す時にも良く使つていたものだけど、そのいくつかは私達の起こした騒動で大人たちに塞がれていた。

最近皆と一緒に遊ばなくなつたみつ上の一成が、卑怯にも私達を裏切つて、大人たちに混じつて抜け道

の場所を教えて回つたらしい。

それでも、一成が仲間に加わらない間に、新しい抜け道を私達は沢山見つけていた。心あたりを辛抱強く巡つていけば、四か所目で無事な抜け道を見つけることが出来た。柵の釘打ちが甘く、杭が腐つていて少し力を込めれば柵が鎧戸みたいに押し開けられるのだ。

近くには畑仕事の小屋があつて、柵を抜ける時に茂みをかき分けねばならず、音が立つてしまうのが不安だったけど——えいと覚悟を決めて通り抜けてみれば、思ひのほかあつさりと外に出ることができた。

柵の外に私を見張っている手代がいたり、待ち伏せしているやつがいたり、使用人が後を追いかけてくることもなく。

寝静まつたばかりの里の外を小走りに離れ、近くの林の中に身を潜めるまで、あんまりもすんなりといったので、なんだか拍子抜けしてしまつたくらい。

最初は実感がわかなかつたけれど……近くの丘の上から遠くなる里の屋根を見降ろして——ふつつつと、胸の中に感動が湧き上がってくる。ついにやつた。や

つてやつたのだ。

「うふ、うふふ……」

思わず笑いが込み上げてくる。父様に、里の皆に一泡吹かせてやつたのだという達成感が、心を軽くする。家を出て、具体的にどうしてやろうつてところまでは考えていなかった。ただ、一秒でもこんな所にいたくないと、それだけを考えていたのだ。だからこそこの脱出は爽快だった。ハプニングがなくて拍子抜けではあつたけど、それだけ私が上手くやつたのだと考えれば気分も良い。

私は私だ。霧雨のお嬢様なんかくそくらえだ。鳥籠みたいな部屋に閉じ込められて、可愛い綺麗だよと愛でられるだけの人生なんて、絶対にごめんだつた。母さまだって、父様と結婚して、本当に幸せだったのか。今の私はそれすら疑つていた。

「さあ、どこに行こうかしら」

私は自由だ。好きに生きてやるんだ。そんな晴々しい気分で一歩を踏み出す。

里を離れて一刻も過ぎると、空がうつすらと白み始

める。夜明けだ。今日から、霧雨真理沙の新しい人生が始まるんだ。

高い空は、私の焦がれ続けた自由そのものと思えた。空を見上げて、歩く手脚にも力が漲る。背負ったリュックの重さも、いまは心地いいくらいだ。

「これが人生の重みってやつなのよね」

ちよつと格好付けて、悟った風な事を言ってみる。

ともあれ、当面はすこしでも里から離れることが重要だった。大勢の人が暮らす里の外にもいくつか集落や家があつて、その人たちは里と頻繁に行き来をしている。山を猟場にする猟師や炭焼き小屋に住む職人だっているし、まだ油断するのは早い。

折角うまく逃げ出したのに、里の近くをいつまでもうろろろして見てつかつてしまうような間抜けになる訳にはいかなかった。

街道を歩けば楽だったけど、私は大きな道を避けて細い獣道を歩くことにした。一刻ばかり歩くと空が白み始め、おひさまが山の端から顔を覗かせる。そろそろみんな目を覚ます頃だろう、きつと今頃、里は大

騒ぎになっているに違いなかった。

妙やリンノスケには少しかけ申し訳なかったけど、彼らだつて私が里を出て一人で生きていくつて話には賛成するどころか、父様の味方をして絶対に駄目だと反対するに決まっていた。

前途ある少女の夢や未来をよつてたかつて潰そうとするなんて、本当に横暴だと思ふ。

「……いけないいけない、せつかく上手くいっただのに、こんなんじゃない気分が台無しね」

まだ思い出すだけで怒りが込み上げてくる。ぶるぶると首を振つて、後ろ向きな考えを振り払った。人生の門出に嫌な事ばかり考えていたつて仕方ない。

それにしても、あまりにも脱出がうまくいきすぎて、時々、ひよつとして誰か付いてきてるんじゃないかと不安になって何度か後ろを振り返つてみるけれど、何度やつても私を追いかけてくる足音は聞こえない。

「……………」

こっそり木の陰に隠れたりして息を潜め、様子を窺つてみたりしたけれど、結果は同じ。それでも誰かが

後を付けてきているような気がして、仕方がなかった。見えない相手に急かされるように足を速める。

——結局は、すれ違う相手もいなかったし、ぜんぶ私の思い過ごしだったのだけど。

里を出て一刻半も歩いただろうか。一人の旅はやけに長く感じたけれど、ようやく街道をぬけて、六地藏とお堂が並ぶ四つ辻へ出た。ここから南へ向かうと、沢をぐるつと回り込んで向日葵畑へ、東へ向かえば博麗の巫女様がいる神社へ。そして北は、妖怪達が棲み家を構える御山へ向かうはずだった。ちよつと汗ばんだ額をぬぐい、水筒を取り出して中身を口にする。

どこへ向かうべきか——しばし思案。

「そうだわ」

ちよつとこの近くに昔、里の悪餓鬼達と一緒に作った秘密基地があるのを思い出したのだ。確か、寅吉と私とどっちがリーダーになるかで喧嘩をした時だっけ。その時は私がここを見つけて、結局皆この基地に集まって仲直りしたのだ。

十メートル位の深さの洞窟が岩壁に穿たれた祠。一

番奥には古いからっぽの石棺があつて、確か、リンノスケは大昔の古墳だなんて言っていたっけ。古い洞窟を改造した秘密基地は、街道からも離れていて、周りの人たちの視線をやり過ぐすちよつといい隠れ場所になるはずだった。

記憶を頼りに目印を探し、草の伸び放題になった藪を掻き分けてしばし。

「……あつた！」

懐かしさと共に踏み入った秘密基地は、ずいぶん変わり果てた姿を晒していた。草は伸び放題、戸板の屋根は朽ちて崩れ、お菓子やジュースを貯蔵していた食糧庫の中身はすっかり跡形もなく、皆で持ち寄つて洞窟の奥の宝箱に納めていた宝物まで無惨に掘り起こされていた。性質の悪い妖怪か獣の仕業だろう。

どうやら、もうだいぶ前から、ここには誰も訪れていないらしい。

「……そっか」

よくよく考えてみれば、私だつて最後にここに来たのはもう何年前になるだろう。最近はお稽古が多くな

つて、朝から夜まで遊んでいる事はできなくなっていたし、いきおい遊ぶ場所も里から半日で行って帰ってこれるような近場に限定されていた。

「でも、いくら私がこれなくなつたからつて、こんなに荒れ放題にさせておくなんて、なつてないわね！」  
憤りと共にかつての入り口だった戸板を蹴飛ばすと、どうにか持ちこたえていた細い屋根はがらんと崩れ落ち、もうもうと木屑を舞いあげる。

慌てて顔を払い、私は大きく溜息をついた。

……それでも。

もしかしたら、もう少し時間が経てば、誰かがここにやってくるかもしれない。基地を作った先輩として、せめて一言文句を言つてやらなければならぬような気がした。

「そうよね。……もう私は、一人で生きていくんだもの。最後に先輩として、いろいろ教えてあげるのかもしれないかもしれないわ」

もう、里には戻らないんだし。

その言葉を飲み込んで、私は近くの石に腰をおろし

て、少し休憩をすることにする。汗をぬぐつて水筒に口を付けると、虫の声、鳥の声が辺りを埋める。

一人がこんなに静かなのだとは、思いもしなかった。

正直に言えば、ほんの少しだけ期待していた。

ここで待つていたら、見慣れたあいつらが――寅吉や、弥七に十蔵。ほかの子分たちや、いつも一緒に遊んでいた皆が、ひよつこり顔を出すんじゃないかと。

ううん、別に寅でなくたっていい。意気地なしの長次でも、泣き虫の新兵衛でも、いまだに時代遅れにも士族様を鼻にかけて気に食わない一成でも、蟲の好きな明澄だつて良い。

ひよつとしたら、私の知つてる顔が、その茂みから出てくるんじゃないか、と。

そんな淡い期待を、私は捨てられなかった。

そうすれば。最近、全然一緒に遊べなくなつていた懐かしい顔を囲んでしばらく話をしたりすれば。もしかして、なんだか馬鹿馬鹿しくなつて家出を諦め、父様に謝つてやつても良いつて気分になつたかもしれない。

あいつらを引き連れて、そのまま夕暮れまで探検に出掛けたいとも思っていた。まだおひさまも高いし、今日は一日めいっぱい遊べるはずだ。久々にたくさん遊んで、すっきりして、そうすれば家に戻る気になるかもしれないと思った。

あるいは……これは私にとつての一大事で、人生の岐路で、とても大事な決断ではあるのだけど、どうしても頼まれるようなことがあれば、一緒に、家出してやるやつが居ても良いかと思った。もちろん誰でもいいってわけじゃなく、まあ、寅吉くらい付き合いいの長いやつなら、寛大に、それくらいは許してやつても良い気分だった。

けれど、空がすっかり明るくなって、おひさまが空に昇り、梢の陰が地面にきらきらと落ちるようになるまでの一刻あまり。私が出発の予定を随分延ばして待ってやつても、誰もやってきやしなかったのだ。

「ふん、残念ね。せっかく、一緒に行つてあげても良いって思つてたのに」

もったいぶって荷物を背負いながら、私はちらりと

茂みの方を見る。これが最後のチャンスだぞと。その辺でぐずぐずしていたり、気負つて出てくるに出てこれなくなつて、ずっとこちらの様子を見ていたりするのなら、いまなんだぞと。

誰かいるなら聞こえるように、心持ち声を大きくしてわざとらしく溜息をつく。

「あーあ、本当にもつたいたいわ。ちよつと考えても良いかなつて思つてたけど、そろそろ出発しなきゃいけないのよね」

やれやれとばかりに腰を上げて、大きく伸びをする私に、梢を揺らして小鳥が飛び立つてゆく。

「……もう少しだけ居てあげるけど、これだけなんだからね？」

荷物の位置を直すふりをして、もう一度。

秘密基地への入り口を窺う私に、答える声は無い。

……要するに。

霧雨の家のような、裕福で力のある家でもなく、里の一般的な家であれば、十歳にもなればもう、子供だなんて言える歳じゃないということを、私は知



らなかつたのだ。

たとえ子供だとしたって、いつまでも遊んでばかりで済む筈もない。私は単に、遊びに付き合わないやつらのことを付き合ひが悪いと頬を膨らませているばかりだつたけど、夏が始まつたばかりの季節は、田植えに畑仕事に、猫の手だつて借りたいくらいの大忙しだ。商家では四半期のべもしなくちゃいけないし、女の子なら子守に家事に、炊事洗濯掃除。やることは山のようにあるはずだつた。

寅吉もこの時にはもう、ウチの紹介で里の本店に丁稚奉公に出ていたというのをずっと後になって知つた。あの日のように、皆で沢に出掛けた私達の、宝物みたいな時間はとくに失われていた。

私だけが、どうしようもないほどに聞き分けのない、子供だつたんだ。



「……本当にみんな薄情だわ。晴れの門出なのに、見

送りにくらい来てくれたつていいじゃない！」

冷たい友人たちに毒づきながら、秘密基地を後にする。もし今からでも反省して後を追いかけてくるなら、私だつて鬼じゃない。ちゃんと謝るなら許してあげるつもりだつた。

そのため、ちゃんと私の事が分かるように持ち出した色紙に手紙を残しておいた。昔決めた合言葉と暗号で書いてあるから、多分他の大人に見つかつても大丈夫なはずだ。

基地を出て四つ辻を東へ。おひさまが空高く、気付けば街道にはちらほらと人の影が見える。

街道を通れば誰かに見つかる。里ではないところに住んでいる人でも、里に寄らずに暮らしてはいけない。

私の顔は、自慢じゃないけれど有名な方だし、知っている誰かに見つかる訳にはいかなかったから、自然足は人通りの少ない道へと向かつていく。

「おんや、お嬢ちゃん、どつちやへお出かけかな」

「……お祖母ちゃんのおうちにおつかいに行くの」  
道端で牛を休め、煙草をふかしていた行商のおじさ

んに聞かれ、私はつい本当のことを言いそうになった。  
——慌てて言葉を飲み込み、当たり前障りのないことを  
言つてやり過ぐす。

「ふうん。こつちやに集落なんぞあつたかね？」

少し不思議そうな顔をしているおじさんから、足を  
速めて遠ざかる。

（あぶない、あぶない……急がないと）

できるだけ早く里を離れなければいけなかつたのに、  
かなり寄り道をしてしまった。

商売をしている人は危険なのだ。ひよつとしたらう  
ちの店と取引があるかもしれないし、父様が私を見つ  
けて連れ戻すように話を回しているかもしれない。

里の方から来た感じじゃなかつたから、多分大丈夫  
だろうと思うけれど……油断は禁物だ。

「……暑いわね……」

随分休んだはずなのに、荷物はかえつてずしりと重  
く、肩紐が背中に食い込む感じがした。靴も親指のあ  
たりが痛くて、熱い。前ならこれくらいで疲れたりは  
しなかつたはずなのに。最近はずっと部屋に閉じ込め

られてお稽古事ばかりさせられていたから、身体が鈍  
つてしまったんだろうか。

背中に汗がびつしよりと湿り、思うように足が進ま  
ない。何度か立ち止まって荷物を背負い直し、痛い肩  
ひもにタオルを挟んでみたりする。それでも次第に、  
背中の痛みは耐えきれないものに代わっていった。喉  
が渴いて、ご飯もあまり食べる気がしない。

私がすっかりくたびれかけたころ——

歩いてきた獣道はどうとう途切れ、小さな清流にせ  
き止められていた。粗末な丸木橋が掛けられた流れは、  
さらさらと綺麗な——けれど速い流れを見せている。  
まるでその清流で、向こうにある穢れを流し去つてし  
まわんとするばかりに。

橋のたもとには、小さな立て看板が残されていた。  
風雨に晒されてすっかり読めなくなっているが、古め  
かしい字で『危険、立ち入るな』とでも書かれている  
のだろう。

細い橋の向こうには、鬱蒼と茂る深い森が、どこま  
でとも知れず拡がっている。そうやって見れば、この

丸木橋も異界と顛界を隔てる扉のようにも思えた。

里から南東に広がる、人の立ち入ることのない深い森。ここは魔法の森と呼ばれ、里の人間はおろか猟師も山師も立ち入ることを避けていた。

森の花粉や幻覚を見せるキノコが群生し、狼や狸々まで潜んでいる。背の高い木々とコケや蔦に覆われた昼なお暗い森の中では方位磁針も役に立たず、方向感覚も狂わされてしまうという。

入り込んだものは迷って餓えて死ぬか、獣か妖怪に食われて死ぬのが相場だという。

「……………」

そしてまた、この森には悪霊が棲み、入って来たものを呪い殺すとも言われていた。

「悪霊ね。上等じゃない」

そう。森の悪霊。

良くある子供だましの噂話だ。ずうっと大昔に里で大暴れしたという、とても強い悪霊の話である。そういったはある日どこから現れて、呆れるほどの呪詛をそこらじゅうに撒き散らし、のべつ幕なしに濃い瘴気を

振りまいて、人里はおろか幻想郷そのものを滅茶苦茶に荒らしまわったらしい。

その呪いは大地を腐らせ、水を穢し、建物を粉々に叩き壊し、大勢の村人を病にして苦しめたという。しかもその呪詛は一時のものではなく、長く長く後まで残る執拗なものだった。

そこで立ち上がったのが当時の博麗の巫女様である。巫女様は暴れ回るそいつを深い瘴気の中から見つけ出し、その力を封じて見事退治したのだった。もう少し遅ければ、幻想郷はもう二度と立ち直れないくらいボロボロになってしまふところだったらしい。

そんな悪霊が、今なお恨みを抱いて夜な夜なうろつくというのがこの魔法の森なのだ。良く考えてみれば、退治されたはずの悪霊がどうしてまだ生き残っているのか、恨みある博麗のお社や里を放つてこんな場所をうろついているのか、入り込んで来たものを殺してどうするかとか、矛盾はいっぱいあるのだけだ。

私をはじめ里の子供は、大人たちが私達を脅かすための作り話だと思っていたのだけど、こういう具合か、

この話のかえつて、大人の方が、特に年寄りほど怖がつているような節があった。

「悪霊ね、……うふ。魔法使いに相応しい相手ね！」

しかし魔法使いたらんとするのなら、そんなものを恐れては始まらないのである。名だたる魔神や高名な悪魔を呼び出し、契約してねじ伏せて召使いにし、意のままにこき使つてこそその魔法使いなのだ。悪霊の一匹や二匹、怖いわけではない。

私はまっすぐに、軋む丸木橋を渡り森の中へと踏み込む。無謀だなんて思いもしなかった。

この時ももう少し私が臆病だったなら、森の外を夕暮れまでうろついて、傾く夕陽と迫る夜の闇に怯え、泣きながら里に逃げ帰ることが出来たかもしれない。

けれど、私がそうだと気付いた頃にはもう、私は森の奥深くまで踏み入ってしまった。出口どころか来た道も分からなくなるくらい複雑に込み入った森の内側に迷い込み、その後悔はもうなんの役にも立たなかったのだ。

「……もう、行つても行つてもおんなじような所ばっ

かりじゃない」

森に入つてもう何時間歩いただろう。当たりの風景はいつまでも変わり映えがない。いい加減うんざりと、木の幹にがりがりと傷を付ける。

私は用意周到だから、間抜けなお伽噺の兄妹みたいに。パンくずで道しるべを作るなんて間抜けな事はしない。けれど、さっき付けたばかりの目印の傷の下に、少し前に付けたはずの目印を見つけると、流石に迷つてしまったことを認めざるを得なかった。

きつと、方向を間違えて同じところをぐるぐると回り続けているのだらうと、想像することは出来たけれど——目にする光景はさつき通つたはずの森の広場とはまるで違つて見えて、なんだかこの森が勝手に動いて、私を迷わせて閉じ込めてしまおうとしているんじゃないかと思えてならなかった。

「魔法の森なんて呼ばれているんだから、それくらいの事はあつてもおかしくないわよね」

「ごそごそリュックを漁り、ひとりでそんな納得をしてみる。もちろんそこにはこの迷いの森を抜けだす

ヒントになる道具なんて見つからなかったけれど、用意した旅装を確かめると、幾分心が落ち着く気がした。森の中は、まるで緑の壁に囲まれた迷宮のよう。節くれだった幹やねじくれ曲がった枝。苔生してうねうねと重なる木々は、普段の遊び場で見えるような木々とはまるで違っていて、絵本の中に出てくる年経て背中の曲がった老婆の魔女を連想させた。

木々の根っこは複雑に絡み合い、地面から半メートルも浮いて地面をのたうち、ただでさえ低い枝に太い蔦が絡まって、緑の緞帳が幾重にも行く手を阻む。

小さな私にはその隙間をくぐり抜けるだけでも一苦勞だった。暗い森の隙間、微かに梢の薄い場所をすり抜けた仄かな陽の光の下では、赤に青に黄色に紫、見たこともない花が揺れ、さわさわとざわめく。細長い銀色の背中をした百足が大木のうろへ逃げ込み、八本脚の蜘蛛が素早く地面を駆け抜けてゆく。

……後になって考えてみれば、私が迷っていたのはまだ、魔法の森のほんの入り口のところだったはずだ。魔法の森の本当の深い場所には、幻覚キノコや毒花が

絶えず撒き散らす胞子や毒の花粉が立ち込め、時には濃い瘴気すら蟠っていて、入り込んだものの精神を、肉体を侵す。

この時の私には、それらに侵された症状が全然出ていなかったのだから。

それはたぶん幸運だった。耐性のないまま森の中心部まで入り込んでいたら、私は比喩抜きで頭を溶かされて動けなくなっていたはずだ。早晚、その場に倒れて朽ち、蟲や菌糸の苗床にされるか、そうでなければ森をうろつく下級妖怪か餓えた獣たちの腹に収まっていただろう。

「こう言う時は、無駄に動きまわったりしないで、おとなしく待つて朝を待つのが良いのよ」

時間ははっきり分らないけど、お昼はもう随分前に過ぎている筈だ。森の中にはぼんやりと陽が差し込んでいて、いまいち時間の感覚もはっきりしない。

「……どこでも時間が分かるような魔法があれば良かったんだけど」

他の魔法をひとつも知らないことを棚に上げて、私

はそうひとりごちる。

新天地で時間が分らないのは不便かもしれないとは思ったけど、まさか、家の壁掛け時計を鞆に入れて家出する訳にも行かなかった。父様が大事にしていた懐中時計くらい、かっぱらってくるべきだったかもしれない。一人娘の晴れの旅立ちなのだ、それくらいの餞別は貰つても罰は当たらなかつただろうと思う。

ともかく、こう言う時はおとなしくしているべきだ。どこかで聞きかじった知識で、私はそう決める。それが、遭難した時に誰かの助けを待つためにすべき事であつたり、誰かの助けつて一体誰だとかいうのは、わざと頭の中から追い出した。

私は家を出るにあたつて、十分なキャンプの支度はしてきたつもりだった。どこかに工房を構えて魔法使いの生活を始めるにしたつて、里から一日で歩いていけるような場所では意味がないわけで。目的地に到着するまでは、何日か、冒険小説で読んだみたいな旅の日々を過ごし、道中で寝泊りをするようになるのは織り込み済みだった。

私みたいな女の子がひとりで宿を取ろうとしても怪しまれるだろうし、ヘンに不審がられても困る。

「……父様が後から来るとか言えば通じるかな……」。

リンノスケを呼ぶとか、誰か、使用人の代わりになるひとを探すとか」

貯金箱の中身は全部持ってきたけど、私のお小遣いで人は何日くらい雇えるんだろう。ちゃんと魔法が使えれば、見目良い悪魔を呼んで使用人のふりをさせるくらい簡単にできるのに。……いや、そもそもそんな万能的な召使いがいるなら、どこでも好きな所で、私を抱えて空を飛んで運ばせたつていいのだし、絵本に出てきた魔法のランプの魔神みたいに、宮殿のようなお屋敷を建てさせるのも簡単だろう。

けれど今は、その支度もぜんぶ、自分でやらなければいけない。でもこれも冒険。霧雨真理沙の魔法使いとしての物語の序章となるはずだった。

とにかく、森がだんだんと薄暗くなり始めているのは間違いない。適当な広場を見つけた私は、今日のキャンプ地をここに決める。リュックから嵩張る毛

布を出して、乾いた苔の上に強いて、ベッドはすぐに完成。座り込んで靴を脱ぎ、疲れた足を揉みほぐす。さつきまであんなに暑かったのに、急に身体が冷えたような気がして、手足が重くなる。

「……やっぱり、この森は身体に良くないのね」

手の甲に、自作の護符をべたりと貼り付ける。母さまの魔術書から書き写したこの図案は、所持しているものへの害は全て遮断してくれるものだ。母さまが残してくれた魔法の護符だ。お店で余らせた墨と、書き損じて捨てられていた帳面の裏側に書いたものであっても、効果は損なわれなはずだった。

心持ち楽になった気がして、私は気合を入れて立ち上がる。

「これで良し。まずは……火ね」

広場に立ち枯れた木から手の届く枝を折り、重ねて薪にして火を付ける。

けれど、いくら燐寸<sup>マッチ</sup>を擦っても、薪は燐るばかりで火はつかず、煙がもうもうと巻き上がるばかり。火つけに千切った新聞紙はすぐに燃え尽きてしまい、小枝

一本にも火が移らない。苔に覆われた木々は、一見乾いて見えても水を吸っており、しかも苔の上では思うように風も入らないらしい。

「もお……変ね……あ熱っ!!」

苛立ちのままに、まとめて三本箱にねじりつけた燐寸がぼうと激しく火を上げ、私は思わず燐寸の箱を取り落とししてしまう。地面に散らばった燐寸は苔の上に沈み、みるみる水気を擦って役に立たなくなってしまう。

「……あー……、……」

間の抜けた声。

火傷しかけた指を擦って、箱の中に残った残りの燐寸を掻き集める。

「ひい、ふう……」

残ったのはわずか五本。たったこれだけ。火を起こし、暖を取るためのものは、この五本しか残っていない。……急に乏しくなってしまった燐寸を見て、私の心に不安が込み上げる。

燐った焚き火（予定地）と、燐寸を見比べてしばし。

今日は思っていたよりも寒くないし、ご飯だってちゃんと持ってきている。無理して火を熾すことは無いかもしれない。

「そうね、明日の為に残しておこう」

それが、賢いやり方のような気がして、私はそう結論付ける。

こんな体たらくで、明日の野営はどうするのかという疑問や、そもそもこの森を抜け出せるのかという不安は、努めて頭から追い出した。

「それよりもご飯ね。ちゃんと食べておかなきゃ疲れちゃうし」

おなかは空いていたけれど、喉が渴いてどうにも食欲が湧かない。さっきから水筒に残った雫ばかり舐めてきたのだ。それでも夕飯まで抜きにする訳にはいかないし、努めて明るくリュックからお弁当を取り出して晩ご飯にする。

「……………むぐ」

一口だけで、すぐに後悔した。

台所から持ち出したパンにハムを挟んだサンドイッチ

チは冷えていて、乾いたパンは固くなってパサパサ、レタスを見る影も無くしおれて、挟んだ干し肉は塩っ辛過ぎて、全然美味しくなかった。

無理に噛みちぎって飲み込んでみるが、三分の一も食べないうちにおなか一杯になってしまった。やっぱり和食派の私としては、お弁当もご飯のほうがよかったのだと、いまさら悔いる。

しかし日持ちのするのはやっぱりパンのほうだと思つたし、冒険のお話ではだいたいサンドイッチをもつていくものだし、怪しまれずに短い時間で用意できるものとなると、これしか選択肢が無かつたのだ。

水筒のふたを開けて、空っぽの中身をひっくり返し、わずかな水滴を舌に付ける。街道を歩いている時にたくさん汗をかいて、先のことは考えずに飲んでしまつたせいで、水筒の中身はもうとつくに空っぽになっていた。普段、悪餓鬼達と一緒にいつも遊んでいるところには近くに飲める水が湧いていたし、街道沿いになら、どこかに泉でもあるだろうと決めつけていたのだ。けれど生憎と、この深い森の中ではまったくそんな



ものは見当たらなかった。

……もつとも、それで良かったのかもしれない。この時下手にそんなものを見つけていたら、生水を飲んでおなかを壊し酷い事になっていたんじゃないだろうかと思う。拭くもののことをすっかり忘れており、途中で小用を済ませるのだった苦勞したくらいだから。

結局、サンドイッチは半分齧ったところでそれ以上食べる気が起きなくなり、残りは布でまき直して鞆に戻した。気は進まないけど、明日の朝ご飯にするしかない。

ご飯を食べ終えると、冷えていた身体がさらに強張ったような気がした。無理に詰め込んだサンドイッチがおなかの中でごろごろして、気分も良くない。

いつしか、森の中には冷たい薄闇が忍び寄ってきていたのだ。この時ようやく気付いたのだけど、森のそこそこにはぼんやりと光を放つ苔が生えていて、そのせいで木々がすっかり空を覆い隠していても、あたりは完全な闇へと落ちることがない。明りに蠟燭を使わなくても済みそうなのは有り難かったけど、この薄ぼ

んやりとした明かりの中では、今が何時なのか、日が暮れたすぐ後なのか夜中なのかまるで判然としないのだった。

「……もう、寝ようかな」

呟いてみるが、やはり誰も返事なんかしてくれない。深い森の中でそれがやけに寒々しくて、自分が独りぼっちなのだというのを改めて思い知らされる。

押し寄せてくる寂しさを振り払うように首を振って、私は毛布へと潜り込む。今日はもう休もう。それで、明日早くに起きて、森を抜ける方法を探せばいい。

「おやすみなさい」

一応口に出して言ってみたものの……なんだか自分の声なのに、しわがれて弱々しく、近くに潜んでいた幽霊が喋ったんじゃないかと思ってしまうほどだった。風がゆつくりと吹き抜け、茂みが微かに揺れる。ヒカリゴケのぼんやりとした明りの向こう、薄暗がりには何か潜んでいるように思えて、私は慌てて毛布を頭からかぶる。

荷物に入れる時は大きくてかさばって邪魔でしょう

がないと思つていた毛布だけど、こうして取り出して敷いてみると随分薄くて頼りない感じがした。背中にごつごつと木の根っこが当たり、寝心地の良い姿勢を採してしばらく何度も寝返りを打つ。

おおお……ん……

虫の羽音や、梢を揺らすわずかな風に混じつて、遠く、獣の遠吠えが聞こえる。

「……………」

ぎゅうつと毛布を握り締める。

昼間、獣は一匹も見かけていなかったし、縄張りには入っていないことは間違いないと思うのだけど、その声を聞くと途端に怖くなった。

この森には狼や、他の獣が棲んでいるのだ。多くの生き物がここに潜んでいる事は、分かっていたはずなのに——遠く聞こえる吼え声に、私は急に胸の奥を掴まれたような気分になった。

耳を塞いで寝返りを打つても、耳の奥で反響する恐ろしい声は、ずっといつまでも聞こえてくるような気がした。

この魔法の森には、恐ろしい悪霊が棲むという。

今なお妄執にとらわれ彷徨う、森の悪霊。幻想郷を荒らしまわったかの悪霊であれば、獣や虫を従えるくらい簡単かもしれない。入り込んできた者を片っ端から呪い殺すというあの悪霊は、自分の手下にした獣たちを使って、自分の縄張りである森の中を見張らせているのかも。

薄暗い森のそこかしこから、ぎらぎらと赤い目玉がこちらを覗き込んでいるような気がした。

「……こ、怖くないわよ」

動揺を押し隠そうとしてあげた反論の声は、むしろ私の心を奮い立たせるどころか、かえって恐怖を増す結果になった。掠れた声はあまりにも弱々しく震えていて、頼りなく、梢に消えてゆくばかり。自分の声に応えるものがないことに、わけもなく背筋を冷たいものが這いあがる。辺りの闇は一段と濃くなって、私を押し包もうとしているような気がした。

その闇の向こうに、ひたひたと悪霊が迫ってきているような気さえする。冷たい手で、私の心臓を握りつ

ぶそうと、いまにも姿を現さんばかりに――

「こ、恐くなんかないんだから！ 私は、魔法使いなんだもの！」

ぞおつと脳裏をよぎる、得体の知れない悪霊の姿。

毛布にくるまったまま木の根元に蹲り、自棄になって、私は歌い始めた。獣を避けるのには歌っていると良いという、弥七の言っていた事を思い出したのだ。獣だつて悪霊だつて、似たようなもののはずだった。

寂しさと恐怖を紛らわせようと、私は遮二無二声を張り上げ、思い付く限りの歌を歌い続ける。リズムも拍子も音程も、調子外れの歌声。それでも声が聞こえている間は、だれも近寄つてはこないはずだと、そう決めつけて。

それでも半刻もすると喉が痛くなり、もうそれ以上歌う元気もなくなつた。頭がぼんやりとして、疲れているのに――何故だか心がざわついて高ぶり、眠気がやつて来ない。

げほ、と痛む喉をさすると、寒さとともに怯えがやつてくる。

ヒカリゴケの灯りは薄暗く、時間の経過はまるで分らない。もう夜中になつていてもおかしくなかつたはずだけれど、いつになつたら朝が来るのだろうか。なんだか、薄暗い森の中にうずくまつて一人でいると、だんだんもう何百年もこうしているような気までしてくる。いつの間にか時間の中でも迷子になつて、ひよつとして朝がやつてこないんじゃないか。そんな事を考えてしまい、私は心底恐ろしくなつた。

「ねえ……」

日中に披露していた勇ましきなど忘れ、私は弱々しく、枯れた声で叫びをあげていた。

「ねえ、誰かいらないの……!?」

家出をしてきたのだとか、見付かつてはいけないのとか、知恵の付いた古獣や妖怪を呼び寄せてしまうかもしれないとか、そんなところまでは頭が回らなかつた。

ここには誰もいない。誰も私に伝えてくれない。誰も返事をしてくれない。

お屋敷で閉じ込められていた時だつて、声を上げれ

ばすぐに誰かが駆け付けてきてくれた。けれど、ここには誰もいない。

私、一人。本当の一人。

ぞつとするほどの孤独が際限なく膨らむ。私の胸を押し潰してしまいうちに、ほんの数時間で思い知った恐怖が、ずんと重さを増す。

深い森の、薄暗い闇の中で、私のそれまでの虚勢はあつてなく引き剥がされ、臆病な霧雨真理沙の剥き出しの心が露わにされていた。

誰でも良かった。誰かいないのか。

何度も呼びかける声に、相変わらず誰も答えてくれない。

——いや。

「ねえ、居るの？ 誰かいるの!？」

私の声に応じるように、微かな物音がした——ような気がした。風の音でも蟲の音でもない。聞き間違いかもしれないともう一度声を張り上げる。

静寂。森の中、夜の風がゆっくりと吹き抜ける。

再び、物音。今度は聞き間違いじゃない。間違いな

く、応えるように、誰かが茂みをかき分ける音がする。足音がする。

——誰かいる。

それだけでもう、私の心は喝采を上げていた。跳ね起き、靴に荷物を取りこぼさんばかりに詰め込んで、靴も満足に履かずに、毛布にくるまったまま駆け出す。張り出した老木の根に躓き、鳶に腕を取られ、分厚い苔に足を滑らせて転びかけ、鼻を打って——なお、必死になつて森の中を走った。

走る先、視界を塞ぐ緑の緞帳の隙間にぼんやりと灯りが見えた。星や月明かりとは違う、揺らめく灯り。燃える火の明り。間違いない、誰かがいるんだ。高鳴る心とともに、上る息を嘔み殺して、髪を振り乱して走った。

助かるんだ。誰かいる。これで一人じゃなくなる。

ここから出られる!

「待って! お願ひ、待ってよ!」

ここで置いていかれたらまた独りぼっちだ。このまま一人で、明けない夜の中、この深い森の中で動けな

くなくて、朽ちて死んでいくのかもしれない。ようやくその事に思い至ると同時、心臓を握りつぶされるような恐怖が脚元から這い上がってくる。

懸命に走る私に、灯りがどんどん近付いてくる。向こうはこちらに気付いている様子は無かったけど、急いで離れて行ってしまうわけでもなかった。これなら追いつける。

ばくばくと跳ね上がり、荒い息と一緒に口から飛び出してしまいそうな心臓を押さえ、最後の力を振り絞って――重なる蔦をかき分け、飛び出した。

そこにあつたのは――

カラカラと、揺れる、髑髏。

近くで燃える人魂に照らされ、半分乾いて、ミイラのようになった――かつて生きていた人間の、成れの果てだった。



古びた広場、苔むした死体に――私は悲鳴を上げて

いた。喉が枯れていた事も忘れ、恥も外聞も無く、喉を震わせて。

そうして叫んでいなければ、恐怖を吐き出していなければ、もう本当に、頭がおかしくなってしまうかもしれないと、冗談抜きでそう思った。

そこは、数人の人間達が事切れ、骸となって倒れた場所だった。

ぼんやりと漂っていたのは、彼等の身体から浮いた燐が、火の玉になって燃えている灯り。それがぼうぼうと青白い炎を上げては、ふつりと消え、また新しく火が上がる。

私はそれを、松明やランプの灯りと見間違えていたのだ。

「つぐ、つ」

竦った腐臭が鼻を付き、上がる息と共に吸いこんでしまった胸が一気に悪くなる。無理をしていた胃の中身が一気にひっくり返る。口元を押さえる指の間から、込み上げた吐き気が溢れ出した。

おなかの中に残っていたサンドイッチを、酸っぱい

胃液と一緒にげえげえと吐き出して、なおもこみ上げてくるえずきに咽る。

「げほ、っ、げふっ、っぐ」

びちゃびちゃと汚らしい飛沫が服を汚した。喉を擦る嘔吐物に、痛む喉が切れて吐く胃液に血が混じる。腐敗して干からびた死体が、虚ろにこちらを見上げている。きりきりと胸が痛み、おなががひっくり返った様に痙攣する。

もう一度こみ上げてくる吐き気に、言うことを聞かなくなつた身体が地面に突つ伏した。

この場所で彼等が命を落としてからもう随分と経っているようで、おかげで私は一番見たくない時期の、腐敗して蛆が湧き、目や舌が垂れ腐り落ちたおぞましい姿を目にせずに済んだのだけ——お転婆でこそあったものの、霧雨のお屋敷で蝶よ花よと育てられた私が、そんな凄惨な現場を冷静に観察できるわけもない。だから私は、彼等の身体が、大きな爪で碎かれたり、手足を無造作に噛み千切られたり、臓腑を引きずり出されたりしていることにも気付けなかった。

罌や狼など、年経た獣の中には、まれに人の味を覚えて、妖怪に成ることがある。丁度その最中に、彼等はこうして自分が喰い殺した者の姿を誇るように見せつける事がままあった。そうなれば、もう普通の猟師では歯が立たない。妖怪に成りかけた獣は鉛玉の数発程度では死ななくなるのだ。

そんな奴らは、完全な人食いの妖怪と「成つて」しまう前に、巫女様が調伏しなければならぬ。

……要するに私は、人食いの獣の縄張りに自分から踏み込んだようなものだのだ。

すぐ近くで、ぱきりと物音がした。今度は錯覚ではなく、間違いなく本当の気配。嘔吐しながら悲鳴を上げていたはずなのにそれに気付けたのは、私の声がすっかり枯れて、もう呻き声を漏らすのが精一杯になっていたからだ。ひゅうひゅうと息音を立てる私が、堪え切れず咳をするのと同時、もういちど。

ずし、と、地面を揺らすほどにはつきりとした足音。間髪入れず、生臭い呼吸を吐き散らす息遣いと、牙を擦らせる唸り声が、背中の方から聞こえてくる。

「——ッ!」

背筋が栗立つ。ちりちりと、うなじが焦げるように熱い。

何かが、すぐ、後ろにいる。恐怖と同時に、絶対に振り向いてはいけないうと、もう一人の自分が叫ぶ。

『それ』が何なのか、はつきり目にしてしまえば、私はもう、完全に身が竦んでしまつて、這いずる事もできなくなる筈だつた。

気付けば、

私はなにもかもを投げ出して逃げ出していた。泥にまみれ、根に躓いて転がり、口を切つて膝をすりむき走る。四つん這いのように地面を這つて、それでも遮二無二逃げていた。

(にげ、なきや、……)

息が上がっているのも、消化しきれない胃の中身がなおも込み上げるのも、早鐘のように打つ心臓が限界を訴えているのも、疲れ切った手足も、右足の靴が脱げて、素足が木の根っこに引っかかり、爪をはがして血を流しているのも。

もう、どうでも良かった。

(逃げなきや……! 逃げなきや、喰われる、食べられちゃう……!)

死ぬ。殺される。こんなにも恐ろしいと、心から感じたのは、きつと、これが最初。

追ってくる気配を振り払えず、泥にまみれ、何度も転び、怪我をして、擦り傷だらけになつて、なお走つた。すぐ後ろにあいつの爪が、牙が、迫ってきている。少しでも挫ければ、そのまま食い千切られてしまう。

ずし、ずし、と重い足音が——凄まじい速さで迫ってくる。

血腥い吐息がすぐ耳元で聞こえるような気がした。恐怖に後ろを振り返ることもできず、追ってくる相手を見定める事もできず。喉がかすれ、息が上がり、心臓が口から飛び出しそうになる。どこを走っているのかもわからず、私は夜の森の中をさまよつた。

帰りたい、もう嫌だ。けれど迷つてそれもできない。あれだけ覚悟したはずの決意もあっさりゆらぐ、弱い自分。死んだつて帰つてやるもんかという鉄の決意は、

半日夜の森をさまよっただけで誰でもいいからすがりつきたい気持ちでいっぱいだった。

「あうっ……」

ずるり、足が大きく滑る。段差になっている木の根を踏み外し、身体が空転。背中と後ろ頭をしたたかに地面に打ち付ける。分厚い苔がクッションにならなければ、死んでいたかも知れなかった。そこまでの事は無くとも、脚の骨の一本くらい折れていても仕方なかった。

起き上がらなければ、逃げなければ。気は焦るが、手足が鉛のように重い。

箱入りのお嬢様の生活に慣れてしまった身体は、棒のように疲れきって、泥にまみれ、言う事を聞いてくれない。荷物は放りだし、痛む喉を湿らせる飲み水もなく、喉は唾すら湧かずにからから。手足の擦り傷が痛み、泥にまみれた服はずしりと重く、青臭い匂いをこびりつかせる。

そこは、森の中にぽかりと空いた小さな広場だった。深く垂れこめる木々の枝が、茨が、蔦が、雑草が、苔

が。不思議と遠慮したように距離をとって、大きな空洞を作っている。森の木々が避けたような広場の中央には、真黒な石碑が堂々と立っていた。

魔法の森の木々は、その石碑を避けるように根を張っているのだ。

「いやだ……」

悲鳴のように。拒絶のように。

懇願の声が喉を震わせた。

「いやだ、いやだいやだ、助けて、いやあ……死にたくない、死にたくない!!」

下着の股がじわりと濡れる。見る間に足の間が温くなり、冷え切っていた腿がぴくんと震えた。木々の隙間、虚のようにぽかりと空いた、森の奥の闇を見つめて——もう私は、そこから目を離せずにいた。

その、時だった。

「——なんだい、あんたは」

まるで前触れも無く、しわがれた声、恐ろしい顔をした青い影が、そこに現れたのだ。

姿は、女のように見えた。けれど深い青の衣は半分



透けて向こうが見え、人とは思えない碧の髪に、真っ白い肌。長い睫毛の間には、きらきらとした輝きの瞳孔をいくつも宿した赤い眼が覗く。

そして何よりもその女の足は、宙に溶けるようにぼんやりと霞んでいた。

そいつは、間違ひなく人間ではなかった。けれど、恐慌に陥って、祈る事も出来ない私が縋れるのは、もうそいつだけだったのだ。

「おねがい！ 助けて！ 死にたくない！」

鼻水をたらし涙を溢れさせ、粗相までしてすがりつく私を、そいつは鬱陶しそうに見下ろすだけだった。伸ばした私の手は、しかし掴もうとしたそいつの服の裾をすり抜けてしまう。

それから、いくつかの事が同時に起きた。

ばきばきと、森の巨木を打ち砕いて、見上げるほどの巨大な獣が姿を見せた。黒い毛皮は靄のようにうねり、狼じみた長い顔をしているのに、目は左右で三対、六つもあり、後ろ肢でしかと大地を踏みしめて立っている。その手はナイフみたいに鋭く曲がった太い鉤

爪を生やして、木々をめきめきと押し倒す。

長い尻尾は三本、その先端に人魂と同じ色の火を燃やしていた。唸り声を漏らし、高く吠えた獣が、まっすぐに私のいる方へ飛びかかって来たのだ。

そして――青い衣の女は、そいつをつまらなそうに睨んだ後。

身動き一つしないまま、右眼のあたりから青い稲妻のような光条を放って、獣の頭を打ち砕いたのだ。じゆうじゆうと、肉を焼き過ぎた時の焦げくさい嫌なにおいを振りまいて、大きな頭を吹き飛ばされた獣はあっさりと地面に伏す。

ばしや、と私の身体にも、血飛沫が飛び散る。むっとするほどの濃い血の匂い。死の匂いが、あたりに立ちこめた。



私が遠くなっていた意識を取り戻すと、そこには変わらぬ青い衣の女と、倒れ潰れた黒い獣の死体が転が

っていた。

みつともない姿のまま、私は命が助かったことに安堵していた。這いずろうとした服のおしりがべちやりと冷たく濡れているの気付いて、ようやく下着を無様に濡らしてしまったことを理解する。みつともなく粗相をしてしまった事に、一気に顔が赤くなった。

おねしよなんてもう何年も前に卒業したはずなのに。「ふん。真つ当に転化すれば誰の不機嫌を踏み抜いたかくらいは理解する分別を持つだろうに。人の味に酔った成り立てほど始末に悪いのはないね」

震えたままの私の前で、青い女が小さく舌打ちをすると、獣の死体はじゅうじゅうと何かに侵されるように崩れてゆく。さらにその軀は火の気もないのに炎に包まれて、ひとりでに燃え上がった。見上げるほどの毛むくじやらかな巨体はみるみる灰に変わり、さらにその灰もすぐに風に溶けて崩れていった。

「……こんな連中が出てくるようじゃ、ここも先が知れたもんだ。忌々しい」

まるで誰かへの文句のように。どこか寂しげにつぶ

やいて、女は私へと視線を向けた。たったいま、獣の頭を砕き、その身体を灰へと変えた恐ろしい視線を。紅い右眼の奥、眼球の中には、まるで群れるようにいくつもの瞳孔が開いていた。

「さて」

じろり。その邪惡な視線に、比喻でなく私の身体は石になった。指一本どころか、まばたきひとつ、呼吸も心臓も、全て停められてしまったのだ。

間違いない。こいつだ。

こいつが森の悪霊。幻想郷のあらゆるものを呪い、侵し、毒に塗れさせた、ばけものだ。

本当にいるとは思わなかった。けれど、認めざるを得ない。

こんな事が出来るようなやつを、私は他に知らなかったからだ。青い女から視線を離す事すらできず、一切の身動きは叶わず。——私は、こいつを畏れる事も許されなかった。

「あたしに助けを乞うたね。娘。……お前、名前は？」

「ま、……まり、さ……」

なぜか口だけは動かす事が出来た。この瞬間、悪霊が私にそれを赦したからかもしれない。

きりさめ、まりさ。震えながら、おぼつかない舌を動かし、どうにかそれだけを口にする。

それを聞いて、私を見降ろしながら——悪霊の表情が少しだけ動いた。悪霊は手にした長い杖を伸ばして私の顔を上向けさせ、ねめつける。

「……………」

不思議な事に、悪霊はしばし何かを考えていた様子だった。

もつとも、私はそれどころでは無くて、自分もさっきの獣みたいに一睨みで殺されてしまうのではないかと、もつと悪くて、このまま悪霊に身体を乗っ取られて、操られてしまうのじゃないかと、そんな事を考えるので精一杯だった。

悪霊の右眼の中にぎよろりと群れひしめく、紅い無数の目玉。こいつは人に似た形をして、言葉を話すにもかかわらず、獣よりもつと恐ろしい何かだった。下半身が弛緩し、濡れた下着がまた熱くなる。

逃げられない。そのことは痛いほどはつきり理解できた。こいつは、私を逃がす気なんて欠片も思っていない。森の悪霊がそんな慈悲をみせるなんてことは、絶対に無いのだ。

だから——

私は、私が、助かるには。

虚勢を暴かれてすっかり切れ端だけになってしまった、ちっぽけな勇気を振り絞るしかなかった。

そうだ。魔法使いは、こんな事で諦めたりはしない。

「ね、ねえ、あなた」

「あん？」

黙考を邪魔されたからか、不機嫌そうに悪霊が唸る。蠢く紅い瞳に睨まれ、手足がびきりと引きつり痛みが走る。怖くてたまらなかつたけれど、私は先を続けた。できるだけつつかえないように。いつも練習していた言葉を、喉から絞り出す。

「わ、わたし、あなたにお願いがあるのよ！ わたし、魔法使いになりたいの！」

里も、家も、みんなみんな、どうでもいい。あんな

くだらない俗世を超越し、世の理と根源の渦を手にする、大魔法使いになるのだ。

声を震わせながら、どうにかそう言った私の顔を覗き込み、悪霊はしばし絶句し——それから腹を抱えて笑いだした。

あまりにも遠慮のない大笑に、私は自分の置かれた状況も忘れてつい怒鳴ってしまう。

「そんなに可笑しいの!」

「つははは……ああ、そりやねえ?」

歯を剥き出し叫ぶ私に、何がおかしいのか、悪霊はにやにやと笑みをみせるばかり。やつぱり間違いない。こいつは本当に、とんでもなく性格の悪い悪霊だ。乙女の大切な夢を、あろうことか嘲笑うなんて、とんでもないやつに違いない。

「あたしに分からなくても思うのかい。お前には、魔法の才能なんかこれっぽちもないじゃないか。平々凡々な、ただの村娘だ。それが魔法使いだって? 笑い死にさせるつもりかい?」

すう、と悪霊は指先を私の額に押し付ける。半透明

の指先が、私の頭の中に沈み込んだ。

ひやり、頭の中に入り込んだ悪霊の手にぞくりと背中が震える。このまま指を動かせば、私の脳味噌はあつというまにぐちゃぐちゃだ。……やつぱりこいつは、私を簡単に殺すことができるのだ。

「稀に、人間の中にも生まれつきの化け物がいる。そういったのは遅かれ早かれ里から弾き出されて、こういう場所に流れ着くもんだが——お前さんは見る限りそうももてなさそうだ。精々がどこかのお嬢様ってところだろうね。つまらん生まれだつてのに、自分だけは特別だと訳も無く信じ込んでる類の、一番性質の悪い凡俗さ」

「……あら。節穴なのはあなたの眼じゃないの? それか、よつぽど才能がないのね。私に嫉妬してそんな事を言ってるんだわ。だって、私は母さまの娘だもの。どんな魔法使いにだって絶対に負けない、大魔法使いになれる才能があるわ」

私は知っていた。森に住む大悪霊のもう一つの噂。この悪霊は、時たま甘言を囁いて願いを叶えてくれる

と騙し、その代償にとんでもないものを要求するといふ。けれどそれこそ、私の求めていたものに、私の望みをかなえるものだ。

「私、知ってるわ。森の悪霊ってあなたのことでしょ。

魂と引き換えに、お願いを叶えてくれるって」

「つは。……良くご存じだねえお嬢ちゃん。いかにも、

あたしはその悪霊、魅魔だよ。……なんだい、魔法使

いになりたい、そいつがあんたの願いかい？」

ぐいと息がかかるほどまで顔を近づけ、にいと口元

を細める悪霊——魅魔。

母さまのしてくれたお話で、私はちゃんと知っていた。この悪霊はとびきり性格の悪いやつで、願いをまっとうに叶えるつもりなどさらさらない類の、従順でも卑屈でもない、最悪に扱いにくいやつだ。

そもそも願いと引き換えに魂をもらうという、正当な取引による契約は魔界に属する正統な魔神の眷族くらいにしか成り立たない。多くの野良悪魔や悪霊たちは、紳士的な上っ面だけを装い、契約をたてに嘘をつき、騙し、ただただひたすらに暴れて契約者を脅かす

ことを好むのである。

この魅魔と言う悪霊も、契約のふりをしてからひどい条件を押しつけ、この娘をいたぶってやるう。きつとそう考えているに違いない。

だから、私は命令する。私は、母さまの魔術書で、こんな性質の悪い悪霊の事を知っているのだ。魔法使いを目標したその日から、こんなやつをどうすればいいのか、どうやってあしらえばいいのかを、ずっと考えてきた。悪霊というのは意地悪で、主人の願いをできるだけねじ曲げて願いをかなえようとするからだから。

「……違うわ。私のお願いはこうよ。魅魔」  
一息。

「私を、あなたの弟子にしてください」

悪霊に限らず、悪魔や魔神にとつて、契約は絶対だ。そこに記された条件は鎖よりも頑丈に彼等の身体を雁字搦めにし、絶対に抗えない制約と誓約を与える。

だから、契約の条文が絶対的なものであるほど、悪魔は喜びほくそ笑む。今度ばかりは安全と、自分ばかりはうまくやつたと、考え抜いた契約をたてに悪魔に従え、約束を結んだ相手を最悪の（悪魔たちにとって最高の）タイミングで裏切り絶望を与えるのは、悪魔にとってこの上ない喜びなんだそうだと。

だからこそ、悪魔たちは契約の条文を逆読みし、文脈を意地悪く解釈し、その裏をかこうとする。でも、それでは駄目だ。悪魔たちは恐ろしく気が長いし、一度願いを叶えて取引をした魔法使いはどんなに優秀でも、悪魔の与えてくれた果実の虜になってしまう。

一番優秀な魔法使いは、悪魔なんかに頼らない。悪魔と対等な取引なんかせず、実力で悪魔をねじ伏せてこき使う魔法使いなのだ。

でも、私はまだそこまで優秀じゃない。

私が支払えるものは、たぶんこの悪霊にとっては些細なものではないはずだ。母さまの魔術書にはいくつか魔法が載っていたけれど、そもそも人間の魔法使いが使う魔法なんて、悪魔からしてみれば全部子供の

ごっこ遊びのようなものらしい。

若い処女の娘（私もそうらしいけれど、処女ってどういう意味だろう？）は悪魔にとって贅沢ないけにえだけど、それは私以外の相手からも手に入れようとすれば手に入れられるものだ。

だから。

私は考えた。私が悪霊にとって大事なものになってしまえばいいのだ。悪霊の弟子になれば、きつと魔法だって好きに使えるだろうし、きちんと面倒を見させる事もできる。そして、ちゃんと独り立ちできるような実力を付けければ、自然に契約は解消される。

それに、普通の師匠と弟子なら、出来が悪かったり師匠の機嫌を損ねたりすれば破門されて放り出されてしまうかもしれないけれど、この場合は契約によるものだから、悪魔の方が一方的に私を放り出すことはできないはずだった。

「へえ……」

悪魔はしばらく、面白そうな顔をしていた。

我ながら会心の思い付きだと思ったけど、実際に悪

霊を前にひと芝居をうつなんて、恐怖で心臓が止まりそうだった。

でも、どうやらまずは上手くいったみたいだ。もちろん、私は注意深く用心を解かず、顔には安心の欠片も出さない。

一番怖かったのは、一瞬の間も置かず、ああ、いいだろうと頷かれてしまうこと。それは要するに、魅魔が前にも同じようなお願いをされたということで、私の言ったことは二番煎じだったということになる。

誰かの真似じゃあ、悪魔は出し抜けない。それまであいつらが考えた事も無い意外な願いで、戸惑わせてしまえばいいんだ。

悪魔の弱点、それは、人間のすることを面白いと考えていること。普通とは違う物言いをする人間の魂を珍重し、おもしろがることだ。こいつは他の奴とはちがう、凡俗とは違う特別な魂だと思わせてしまえば、後の交渉は有利に働く。

案の定、魅魔はしばらくして、小さく笑った。

「生意気な願いだが、あたしにとつても悪い話じゃあ

ないね。丁度、一人で難儀していたところさ。……いいだろう、まりさと言ったね、娘」

「は……はい」

名前を呼ばれて、私は自分の失敗に思わず毒づきかけた。

いくら怖くて動転して、取り乱していたとはいえ、名前を聞かれた時、迂闊に本名を——捨てたかった本当の名前を名乗ってしまったことを強く後悔した。こんな名前なんて、いらないと思っていたのに、こんな場所でも私の足を引っ張るなんて。

悪魔との取引に限らず、魔法において真名——本当の名前を教えるのはいちばんしてはいけない事なのだ。真の名前は、命と同じかそれ以上に大切なもの。それを握ったものは、相手を自由に支配することができる。

しかも、こいつは考えうる限り最悪の相手なのだ。

「ここに名乗って誓いな。それで契約は成立だよ」

「……わかったわ」

だから。私はせめてもの仕返しに、たどたどしくも文字をゆがめて自分の名前を示す。

私の一番欲しいもの。母さまの遺してくれた、宝物の名前。

——『魔』理沙。

真なんて、本当の正しいことなんて知ったことか。

霧雨の苗字なんかもう知らない。私は魔女だ。魔法と共にある化物にだって、なんだってなってる。

覚悟と共に示した私の名前を見て、魅魔は鷹揚に頷いて見せる。

「……いいだろうさ、願いを叶えてやる。森の悪霊の名において、お前さんを比類なき大魔法使いにしてやろうじゃないか」

にいいと、真つ赤で大きな口を三日月みたいに歪めて、魅魔は笑う。

契約——成立だ。

「いい、約束よ？ これは契約。あなたは私を弟子にするの。弟子なのだから、あなたは私を見捨てられないし、見殺しにできないし、大切に扱わなきゃいけない。もちろん、私が魔法使いとして力を付けるのだから、邪魔しちゃう駄目。期限は、私が立派な魔法使いにな

るまで。このお願いが叶うまでよ、悪霊」

「ふん。……魔理沙。もうお前はあたしの弟子だ、それにふさわしい呼び方をしな」

つまらなそうに鼻を鳴らして、じろりと一瞥。うまくしてやられたという悔しさが、魅魔の表情に浮かんでいた。

無数の眼球がひしめく、恐ろしい紅い瞳。でも、その視線はもう、私を傷付けない。そうできないことを、私は確信していた。師匠は、弟子がきちんと育つまで、弟子を守らなければいけないからだ。契約は絶対なのだ。いくら不満に思っても、それに従わなくちゃいけない。

「——わかりました。魅魔様」

「よろしい。行くよ。付いてきな」

そうしてこの日。

私は森の魔法使い、魔理沙になったのだ。



## 【三】

「ちよつと！ 待つてよ！」

後に付いて歩きだすと同時、みるみる遠ざかる魅魔様の背中に、私はたまらず声を上げた。服は泥だらけ、靴も片方ないうえに、全身擦り傷だらけ。手足も強張つてまともに歩けないのに、魅魔様は地面も空も関係なくすると進んでいつてしまう。

悪霊と呼ばれているのだから幽霊みたいなもののは分かつていたけれど、重なる蔦や森の古木を関係なしに擦り抜けていつてしまうのはちよつと反則だろう。折り重なる枝を潜り抜けるのに四苦八苦しているうち、あつという間に青い背中が見えなくなり、私は慌てて叫んだ。

「待つてよ、そんな簡単に付いていけないわ！」

「……仕方のない弟子だね」

近くの木の幹からぬつと顔を出し、魅魔様は舌打ちと共に嫌そうな表情。

けれど契約の通り、私を見捨てずに戻つて来た魅魔様は、そのまま月の意匠を施された杖を伸ばし、私の襟首を猫でも摘まむみたいにひよいと担ぎあげた。

「きやあ!？」

「あまり暴れるんじゃないよ。一張羅が汚れちまう」  
言うが早いか。魅魔様の姿がふわりと宙を踊る。身体が地面から離れたと同時に、ふうわりと羽根のように軽くなる。

私は魅魔様に抱えられて、風のように、影のように、夜の森を駆け抜けていた。ヒカリゴケと星明かりに照らされて複雑に入り組んだ陰影を見せる魔法の森の風景が、みるみる真後ろにすつ飛んでゆく。

どういう仕組みなのか、魅魔様の進む先を避けるように、太い枝がうねり、這いまわる根っこが飛び退き、腰を曲げて意地悪に行く手を塞いでいた森の古い木々は整列して背を伸ばし、蔦や茨は畏まって隅っこに伏せ、魅魔様に道を譲るのだった。

早馬が駆けるよりも疾く——私たちは深い魔法の森の奥へ奥へと進んでゆく。私は瞬きも忘れて、その不思議な光景に見入っていた。

「——さて」

そうして、魅魔様が立ち止まった時。

私の目の前には、大きな大きな、お屋敷があった。

真鍮の立派な門構え。里でもちよつと見たことがないほどの、大きなお屋敷だった。たしか稗田の本家はこれくらい立派な大きさだけど、このお屋敷は壁は漆喰の代わりに煉瓦を使い、大きくせり出した屋根瓦は橙色。壁には蔦が絡まって窓がずらり。しかも重なった屋根の上にはまた窓があつて、上層階が鐘楼みたいが高く聳えている。辿り着くには十階も階段を登らなければいけないような高さの塔も突き出していた。

文字通りの、絵本の中の魔女の家だった。

「降りな」

ひよいと私を放り投げ——バランスを崩してむぎゅつと地面に突つ伏す私の事には目もくれず、魅魔様は、ドアも開けずに入り口の扉を通り抜けて、すいすいと

中に入つて行つてしまふ。

おそろおそろ私が玄関を踏んで、重いドアに手をかけた。複雑な魔法の刻印が捺されたドアを押し開けると、むつとするほどの黴と埃の匂いが押し寄せてきた。

おおよそ、生きている人が暮らしているとは思えないほどの、古びた匂い。積み重ねた年月の重さが、一気に奥から溢れだしてくる。

「まずはその惨めつたらしい格好をどうにかしないとね」

言われて杖の先で下腹のあたりを示され、私は頬を紅くする。泥まみれの服の下から、嘔吐物で汚れた胸元や、濡れたままの下着のことを思い出したからだ。

ついて来いとも言わずにずんずん奥へ進んでゆく魅魔様を追いかけ、私はできるだけ汚れた床を踏まないようにしながら、つま先立ちでお屋敷の奥へと急ぐ。

長い廊下を何度も曲がったつきあたりに、大きなバスルームがあつた。白い陶製のお風呂は、霧雨のお屋敷では見たことのない洋風のもの。そこらじゅうにうつすらと埃が積もっていたけれど、上等なものだとす

ぐに分かった。

ながらく使われた様子は無い場所に、これを片付けるのかとちよつとうんざりする。けれどそんな心配は無用だった。魅魔様がちらりと睨むだけで、見る間に辺りのものに命が宿ったのだ。

蛇口が勝手に動き、バスタブにはみるみる水が溢れ、薪がひとりでに起き上がり、並んで行進し、自分の身を引き裂いてボイラーに投身自殺。デッキブラシが飛び上がって黒カビだらけの床のタイルを擦り始め、錆ついていたボイラーはひとりでに火を熾し、薪を勢い良く燃やし始める。

「すごい……!」

始めて目にした本物の魔法に、私の胸は高鳴った。

これまでお話や母さまの魔術書の中でしか見たことがなかった、本物の魔法がそこにあった。

まるで手足のように、魅魔様はこの家を操るのだ。

驚きと興奮に目を丸くする私のお尻を叩いて、魅魔様は急かす。

「ほら、はやく風呂に入っておいで。汚くてかなわな

いよ」

あまり、女の子相手に汚い汚いと繰り返すのはいかがかと思つたけれど、実際に早くこの汚れたものを脱いでしまいたいのは確かだった。苦勞して服と下着を脱ぎずると、魅魔様はそれも宙に浮かべて、ボイラーにくべてしまう。

「ちよつと! なにするの、私の服よ!」

「あたしに繕いものでもさせる気かい、魔理沙。魔法使いになったんなら、現世のものは捨てるべきなんだよ。……第一、あんなに汚れてちゃ洗濯するのも面倒だ。取っておいたつてどうせもう着れやしないよ」

折角のお気に入りの上着だったのにと、残念な気分にもなる。見る間に燃えてしまう服は惜しかったけれど——魅魔様の言っている事もたしかにもっともだった。私は今日からここで暮らす、魔法使いの弟子、魔理沙なのだ。人里に住んでいた霧雨真理沙の持ちものなんか、はやく失くしてしまふべきだった。

あつという間にいい湯加減に湧いたお風呂に肩まで浸かって、汗と汚れと泥を丁寧に流し、すっかり強張

った手足を解し、埃と脂に乾いた髪を石鹸でこしこしと洗って、ようやく私は人心地つく事が出来た。家のお風呂とは違う、洋風のお風呂は、入り方もちよつと変わっていてなかなか面白かった。湯船の中で身体を洗って、そのままお湯に浸かつて泡と汚れを流すのだ。派手にお湯を流しても、魅魔様の魔法のおかげで湯船にはすぐに温かいお湯が溢れてきて、私は身体の隅から隅までを綺麗にすることができた。

「——いつまで長風呂をしてるんだい、はやくしな」  
「はい、魅魔様」

向こうから歩いてきたタオルで濡れた身体を拭き、畳まれていた下着——膝まである古臭いドロワーズだ——を穿いて、シュミーズを身につける。ずつと昔に誰かが着ていたものかもしれない。新品ではなく丁寧に洗濯されて仕舞われていた物の感触がした。

ちよつと穿き慣れない下着を持て余し、魅魔様に呼ばれるまま、二階へ上がる。なんだか下着一枚で動き回るのは恥ずかしかったけれど、そういうものなんだろうか。

呼ばれる声のままに廊下を進み、招かれた部屋には大きなクロゼットがぎつしりと並べられていた。床から天井まで、抽斗とドアが重なり、ひっくり返りそうになるくらいにぎつしりと、沢山の服が仕舞われている。魅魔様の示すそのどれもが、みんな闇を溶かしたように濃い色合いをしていた。

「これが今日からのお前の服だ。まあ、いろいろあるが、当面はこれでいいだろうさ」

魅魔様が示したクロゼットを開けると、そこには紫の衣装がひと揃い、提げてあった。他の服が皺だらけの襦だらけなのに、その一着だけが不思議と、ついさつき洗濯に出したばかりのようにぴかぴかだ。顔を近づければ、ぽかぽかとおひさまの匂いまでさせている。促されるままに着替えれば、黒のスカート、手首のところをしぼった長袖。厚手だけど涼しい布地は、あつらえたみたいにぴったりと私の背丈に合っていた。大きなつばをしたとんがり帽子には、三日月の飾りがワンポイント。

近くに歩いてきた姿見の鏡を覗き込めば、なかなか

どうして一端の魔女がそこにいた。

「ふむん。ひとまず格好は付いたね」

片目を閉じてこちらを窺い、魅魔様も一人納得が、すぐに眇眼になって唇を捻じ曲げ、

「——いや、ちよいとその髪が良くない。……魔理沙、お前の金髪は昔からかい？」

「そうよ、どうしたの、魅魔様？」

「魔法を使うには服装のコーディネートも大事でね。

装う姿形も一つの魔法に成るのさ。しばらくすれば状況も変わるだろうが、今のところその服には金髪は合わないね」

そう言つて、魅魔様は私に髪を染めるように命令した。よりによつて、あんまりにもセンスのない赤毛に。

私の金髪は、くせつ毛でこそあったけれど、父様とは似ても似つかない地毛の金色。母さまの髪の色と同じなのだ。だからそんな簡単に染めろと言われても、すぐには納得できなかったけれど——弟子として、魅魔様の言うことには従わなければならなかった。魔法使いの階梯として、服装や色が定められているらしい。

これも魔法の為と思ひ、魅魔様の用意した魔法の染め粉を渋々受け取る。

「……世の中に、赤毛ほどこみにくいものはないと思つていたけれど、これはとても耐えられないわ」

染め方の加減が分からず、何度も紅金まだらのみつともない髪になりながら——どうにか私は髪を染め直した。まあ、魅魔様のような緑にしろと言われないだけ、ましだったかもしれない。

そうして、鏡の中には、里の店の一人娘、霧雨真理沙とは似ても似つかない、赤毛の魔女の魔理沙の姿があった。

「……うふふ」

大きな帽子を押さえて、思わずご機嫌な笑みが浮かぶ。スカートをそつとつまみ、くるくると姿見の前で回つて見せる。

きつとこの格好でなら、里を堂々と歩いていても、誰にも私だと気付かれないに違いない。いかにもな暗い色合いのローブにとんがり帽子。悪い魔女だと追いかけられるかもしれないが——いまや私は本物の魔法

使いなのだ。向かってくる奴は片っ端から、魔法の杖でネズミやトカゲ、カエルに変えてしまえばいい。

いよいよ本当に、私は魔法使いになれたのだ。その実感が私の胸を満たしていた。

——そうして。

私の魔法使いとしての修行が始まった。

と大仰に言ってはみても、そのほとんどは雑用みたいなものだ。

魅魔様はとても強い力を持っていたけれど、ひとつ弱点がある。悪霊であるために、実体を持たないことだ。

生まれながらにそういう種族である幽霊と違って、亡霊や悪霊は死者の未練や悔恨が形を凝らせて生じたものになる。魅魔様は半分くらい死者の国である冥界に属しているようなものであるため、こちらの世界の様々な制約に縛られない。それが魅魔様の強さの秘密でもあるのだけど、同時にそれはこちらの世界にある

道具や生き物に触れることが出来ないということでもあった。

もちろん、魅魔様は並みの悪霊ではないので、その気になればこちらの世界に実体をもつこともできるけど、息を止めているようなもので、あまり長い時間そうしている事はできないし、力も余分に消耗してしまうのだという。

私に命じられたのは、魅魔様の身の回りのお世話。

このお屋敷は、魅魔様が拠点にする以前から存在していて、もうずっと昔に死んでしまった魔法使いが所有していた場所であつたらしい。魅魔様も全容は把握しておらず、複雑に入り組んだ部屋に適当に集められた魔法の品や薬、魔術書なんかが無造作に押し込めてあつたという。私が最初に案内されたクロゼットもそのひとつだつたらしい。

「あまり片付けの得意な魔法使いじゃなかったのね」「魔法使いなんてのは大概そんなものさ。興味のあるものを集めるのだけが好きで、それ以外はどうでもいい。……逆に言うなら、そういう連中だけが、魔法使

いになれるってことだ」

まずはお屋敷のどこに何があるかを覚えるのが一番最初の仕事だった。入ってはいけない部屋、両目を開けて通ってはいけない廊下、下るのはいいけれど昇ってはいけない階段。お屋敷のそこらじゅうにまだ生きている剣呑な魔法の罠が散らばっており、万が一それを踏み抜けば私はたちまち黒焦げだ。魅魔様は平然と行き来するけれど、私は文字通り命がけでお屋敷の構造を覚えることになった。

そしてまた、魅魔様はかなりの放任主義なのだ。なにしろ魅魔様は悪霊だから、お風呂も食事も睡眠も取る必要がない。まったく無頓着で、そこらにふわふわしているだけだから、私は大概の事を一人でやらなくてはならなかった。

けれど、必要であるかどうかと、そういう人生の楽しみを好むかどうかはまた別であるみたいだ。魅魔様は突然のお風呂の準備を私に言い付けたり、ご飯を作れと言いだしてみたり、洗濯をしろと気まぐれを起こしたり、実にわがままだった。私は文句を言いながら

も、いつ言いつけられても大丈夫なようにその準備をしていなければならなかった。

……どのみち、私が生きていくためにはご飯もベッドもお風呂も必要だったから、それを二人分、用意するのと同じことだったのだけだ。

せつかく魔法使いになれたのに、こんな見習いの使用人みたいなことをしなくちゃいけないのかと腹も立ったけど、私は魔法使いは何よりも契約を重んじるのだということを知っていたから、サボることも手を抜くこともなかった。

商売のために結んだ約束を破ろうとする相手にだって、決して甘い顔を見せず、堂々とその悪事を糾弾するのが正しいのだし、私がきちんと契約を守っていれば、その相手も私に文句を付けられない。

でたらめを並べて難癖をつけてくるような不埒な悪魔には、堂々と、自分が契約に反していないことを突き付けてやればいいのだ。

それに。

(師匠だなんて言っても、油断しちゃいけないわ。私

とあいつはあくまでも魔法使いと悪霊なんだから。いつ、とんでもない罫を仕掛けて、私を陥れようとするか分らないもの」

魔法使いとしてかくあるべきだという信条に従って、私はいつも、同居する悪霊に油断して隙を晒さないように、気を張り詰め、夜毎に鏡を見て自分に言い聞かせていた。表向きは忠実な弟子であることを守り、うっかり気を許したりしないように。

「魔理沙。ここにある本の、ここからここまでの棚を整理しておきな。ちゃんと埃を払って、虫干しも手を抜くんじゃないよ。……順番もきちんと元通りに並べておくんだ。いいね？」

「はい、魅魔様」

「四階の広間の掃除は終わったのかい。赤と白の扉には触らなかつたらうね」

「はい、魅魔様」

「客間用の食器棚の銀の燭台が燦んでいたよ。ちゃんと磨いてから仕舞っておくんだね」

「はい、魅魔様」

「ああ、それと——」

あれこれと、まるで召使いか小間使いみたいに使われるのには腹も立ったし、一日かけてようやく仕上げた仕事に、ねちねちと細かい間違いを粗探しされて、厭味を言われるのは鬱陶しかったけど。

自分にやるべき事を与えられて、それをひとつずつ終わらせていくのは、少しだけ楽しくもあった。埃だらけの古びたお屋敷が、だんだん私も満足いくような綺麗さを取り戻していくのは、ちょっとした遣り甲斐を感じることだったのだ。

「リグアの香薬は仕上がってるかい。手抜きせずに量はきっちり計るんだよ。面倒だからって器具を洗うのを飛ばしたり、ぞんざいに混ぜると承知しないよ」

「わかつてるわよ、魅魔様」

「返事ばかり立派だねえ。ほらほら、はやくしな。せつかくの満月が隠れちまうだろ」

なかでも私が一番好きなのは、魔法薬を錬る仕事だった。

魅魔様は私に十種類くらいの魔法の薬の作り方を教



え、定期的にそれを作るように命じていた。それらは魅魔様が楽しみのために吸ったり、部屋に焚き込めたりして使う、魔女の香薬だった。

この魔法の森には、毒の強い花粉や薬効を持つ菌糸を吹き出すキノコや草花がたくさん群生している。その中には魔力を持ったものも少なくない。これらの収穫時期を見定めて、必要な量だけ集め、干して乾かし、磨り潰したり、細かく刻んで水にさらす。そうして用意した素材を丁寧に炒めて焦がしたり、月明かりで乾かして、膏で抽出したりして処理をし、銀の天秤皿を乗せた天秤で量り取って、複雑な手順で混ぜ合わせ、分厚い鉄鍋で何夜も煮込んで、魔法の薬を作るのだ。

一度始めると何日もかかる大仕事だったけど、混ぜるたびに色を変えたり、泡を立て、光を放ち反応したりする材料は私を飽きさせなかった。

「どう、魅魔様？ 今年一番のハイジロコの新芽よ」

「——んむ。悪くないね」

霊体でも触れる事ができるヒイロカネを精錬した赤金色のキセルに葉を詰めて、魅魔様は美味しそうに

煙を飲み込む。ローブの裾から伸びた白い霊体の脚先が、トロンと長く伸びているのは、香薬がよく効いてきた証しだ。

私は覚えたことを良く復習し、手順よくできるように練習を繰り返した。

七色に光る虫の羽根を刻んで燃やした灰に、トカゲを捕まえて日干しにして尻尾をちょん切り、薬草やキノコを集めて刻んで釜で煮たり、夏至の日の朝一番、太陽が出る前に起き出して葦の花に溜まった朝露を集めてハーブティを濃く煮出す。

忙しい弟子の仕事の合間を見て、自分なりに工夫をした魔法薬の製法を考え、それを一つ一つ実験した。

「うふふ、新しい配合をつくってみたの。試していいかしら、魅魔様」

「好きにしな」

少しずつ私の薬の調合の腕が上がるにつれ、私の魔法は上達していった。ひよつとしたら才能があるのかもしれない。たくさんいる魔法使いの中には、魔法薬作りの専門家もいるという。

魔法使いというのは自分の魔術書を書くものらしいから、私の最初の正式な魔術書は、魔法の薬の精製法にするつもりだった。

「……うう、これは慣れないわね」

魅魔様が美味しそうに吸っているから、魔女香は良いものだと思つて真似してみたけれど、煙管で吸う煙は苦くて臭くて、とても呑めたものじゃなかった。

立派な魔法使いになるにはこれも涼しい顔をしてこなさなければならぬのだけど、一度、薄める前のエキスをそのまま燃やしたものを思い切り吸い込んで倒れ、三日も寝込んでしまつてさすがに諦めた。こればかりはもつと魔法使いとして格が上がつてからにしかない。

香水もいけど効き目が長く持たない。どうしようかと思案しているうち、昔、霧雨の家にいた頃に貰つた香り袋のことを思い出した。

ちよつと格好悪いけど、魔法使いの服に魔法薬の素敵な香りがしているというのは悪くない気がしたので、私は森で見つけたアカシゲの茎を傷つけて集めた乳液

を固め、ササカマドの粉末と混ぜて袋に詰め、それを首にかけておくことにした。魅魔様の好きな魔女香と同じ成分で、ゆっくり胸に吸い込むと頭がすうつとして気持ちいい。

「なんだい、酷い煙だねえ」

「あ、魅魔様。見て！ 私が作つた魔法薬よ！」

「……ふうん」

煮詰めすぎて黒炎を立ち上らせ、酷い匂いのする大釜の中身に顔を顰め、魅魔様は私を見比べ、

「まあ、好きにやりな」

そうやって、私を許してくれた。

事実、私の魔法の腕はめきめきと上昇していたのだ。いくつか自己流で魔法薬をつくり、その精製の腕も上がった。

私がいくつか課題をこなすと、魅魔様は私を部屋に呼び出して、新しい魔法を教えてくれた。ドロワーズだけになってじつとしてゐる私に、魅魔様が冷たい霊体の手で触れて、私に新しい力を与えてくれるのだ。

「んっ……」

「吐くんじやないよ。飲み込みな」

千切れた霊体の塊が、胃の中をゆっくり滑り落ちてゆく。ぞくりと背中が震え、喉が力を反射的に拒絶する。私は脂汗を浮かべて込み上げる吐き気を堪え、与えられた力が身体に馴染むのを待つ。じんわりとおなかの奥に溶けてゆく冷たい力が背筋に刺し込まれていくと、やがて新しい神経ができたみたいに全身に強い力が漲るのだ。

魅魔様の言いつけを守るたび、最初は光や派手な音を飛ばすだけだった杖から、輝く閃光や燃え盛る炎が飛び出し、大木を、苔生した巨石を打ち砕く。

そうして、私がハルシゲシから抽出した魔女香を吸えるようになる頃には、森で暴れる妖怪に成りかけた獣を退治できるくらいに、私は強くなっていた。



その日はやけに頭が痛く、食欲も湧かず、散々な日だった。魔法薬を作るのにも小さなミスを繰り返し、

ぼーっとして魅魔様のティーカップのコレクションを壊してしまい、さんざんに叱られた。

すっかり疲れきった私は、お風呂にも入れないまま部屋に戻り、ベッドに倒れこんでしまった。なんだかおなかが痛いような気がして、気分も悪かったけれど、すぐに眠気がやってきて、私の意識は深いまどろみの中に落ちてゆく。

「ん……？」

ずいぶん時間が立つて、私は不快な感触に目を覚ました。なんだろう、さつきからやけに脚のあたりが強張る。汗をかくような気温ではないはずなのに、寝苦しいくらいに背中が濡れている。下着の中にもぬるぬると汗のようにへばりつくような違和感。

そして、鉄くさい匂いが鼻をついた。

「……え」

痛む頭を押さえて身を起せば、脚の付け根が濡れている。何だろうと思ってシーツを捲ると、ドロワーズには大きく赤い色が染み出ている。

私が女の子から、少女になった証だった。

「……うわ」

シートと下着が真っ赤に染まっているのは一見してショッキングな光景だったけど、思っていたよりも、驚きは小さかった。

母さまはいなくても霧雨の家は住み込みの使用人達も多くて、割合に女所帯だったし、そう言うことがあ  
るのだというのはつきり教えられてはいなくても、  
なんとなく理解していたから。

とは言つても、思っていたよりもいっぱい血が出て  
いて、汚れた脚の間が気持ち悪くて、頭痛も眠る前よ  
りも少し強くなっているような気がする。女の子には  
普通のこと、身体に悪い事ではないとわかつていて  
も、やっぱりどこか怪我をしてしまったみたいな気分  
で、落ち着かない。

「……お風呂、入らなくちゃいけないのかしら」

血が止まっていないのにそんな事をしていいものな  
のだろうか、良く分からない。けれど半分固まりかけ  
た血をそのままにしておく気にもなれず、私はシート  
を引きずってお風呂場に向かい、いらないタオルを絞

つて足をぬぐう。

なんだかおねしよの後始末みたいな気分でもうにも  
気分が良くなかった。これは大人になった証なのだと  
いうのは頭ではわかつているのだけど、パジャマと下  
着、シートを汚してしまったのが失敗をしたみたいに  
感じてしまう。

そつと身体の汚れを洗い流しながら、隣を見れば、  
お風呂場の姿見に、白い身体が映っていた。……魅魔  
様のところに弟子入りしてから、食べものが変わった  
せい、昔より少しおなかやお尻のあたりが丸くなっ  
たような気がした。

鏡に映る女の子の身体が、自分のことなのになん  
か気恥ずかしくて、思わず目を反らしてしまう。

良く考えて見れば、自分が、女の子なんだというこ  
とを——こんな風にはつきり意識したのは、この日が  
最初だったかもしれない。里ではいつも男の子達に混  
じって遊んでいたし、沢や淵で遊ぶ時も裸になるのを  
まるで気にせずになっていたけれど——、今はそんなこと、  
とてもできそうになかった。

翌朝。

私に乙女の証が来た事を、魅魔様はまるで我が子の事のように喜んでくれた。

「瘦せっぽちで肋も浮いてて、本当に女の子か疑わしかったもんだけどねえ」

「……やめてよ、魅魔様」

誤魔化しきれないだろうと思い、ちよつと恥ずかしいのを我慢して告白すると、魅魔様は大変驚いて、そして喜んでくれたのだった。

大げさなお祝いをしようとしてくれたのは、流石に恥ずかしくてやめてもらった。代わりに魅魔様は大きな大粒のエメラルドのタブレットを一つ、お祝いにくれた。

「女であることは大切さ。魔理沙。とくに魔女にとつてはね。ごくわずかな例外はあるけれど、多く女というのは非力なものさ。真つ向腕っ節を披露することも、理路整然と道理を説く事も、女にはできない。できないってことにされるもんだ。実際はどうあれね。」

その理不尽への恨み、憤り、呪詛、それが魔女の力

の源だ。何の事はない、女を虐げる男は、それだけ女を恐れているのさ。だから魔女はその畏れを集めて力にする。

——魔理沙、これからはちゃんとお洒落にも気を使いな。可愛い女の子であることは、魔女として必要な事だからね」

そつと撫でられた頭がなんだかくすぐつたい。でも嫌な気分ではなく、本当の母さまというのはこんな感じなんだろうかと思う。母さまにこうしてもらったのはもうずっと昔のことなんだけど、魅魔様の優しい手は母さまのそれに良く似ているような気がした。

それから数日、世話を焼かれながら、私は自分が少女になったことを、心から誇らしく思うようになったのだった。



そんなある日。作つたばかりの魔女香を試していた私を呼び寄せ、魅魔様は普段とはちよつと違う様子で

言い付けた。

「あら、なあに、魅魔様」

「またそれを吸つてたのかい」

ハルシゲシの魔女香は私のお気に入りだ。蜜蝋を混ぜて火を灯し、煙を部屋に焚き込めると集中が高まり、余計なことを考えなくても良くなる。同時にふわふわした心地よさも味わたるので、それに身を委ね、ソファで魔術書を広げるのが最近の日課だった。

片目をつぶり、赤い眼球のひしめく右目でじろじろと私を眺め、魅魔様は溜息のように呟いた。

「それだけ経路が繋がったなら十分だろう。魔理沙、付いて来な」

なんだろう、いつもとは違う雰囲気になんとなく首を傾げながらついていくと、魅魔様は私を連れ、四階の倉庫へと向かう。

入ってはいけないと言われていた、四階の右の廊下の端、赤い扉の部屋だ。

魅魔様がドアノブを一瞥すると、大きな錠前がばちんと外れ、がっちりとは絡まっていた太い鎖が地面にじ

やらんと落ちる。促されてドアを開ければ、そこにはぎつしりと――見たことも無いほどの道具が詰め込まれていた。

「うわあ……」

倉庫と言うより、がらくた箱といったほうが正しいかもしれない。子どもが遊んだ後のおもちゃを構わず放り込んだ箱みたいに、順番もばらばらに詰め込まれて膨らんだ戸棚やクロゼットをみて、私は思わず声を上げていた。

「魅魔様、がらくたが一杯あるわ」

「がらくたとは言ってくれるじゃないか。ちゃんと『眼』を開いてみな」

そう師匠に言われて、私は慌てておでこに意識を集中する。魅魔様がチャナギの樹液で書いてくれた経路をなぞるように思いかえし、ぐつと頭の上に力を込めると――ぱあといき目が開いた。

第三の眼、チャクラ、そんなふうには呼ばれる魔法使いの眼。魔力や呪詛を感じし、魔法を魔法として掴み取る感覚だ。開けた『眼』でがらくたの山を見れば、

評価は一変していた。

倉庫に押し込められていたのはどれもこれも、きらきらと輝く魔力が込められた、一級品のマジックアイテムばかり。中には自分で魔力を生み出しているのか、手にとってもいけないのに動きだすものまである。

「そうだね——こいつで良いか」

魅魔様がぼいと拾つてよこしたのは、私の背よりも長い箒だった。慌てて受け止めようとした箒は、ぴよんと跳ねてひとりでに立ち、背中を曲げて挨拶までする。

「わ……」

慌てて私もお辞儀すると、箒はぴたりと動きを止め、私の手の中に納まった。

トネリコ材を丁寧研磨して磨き上げ、シラカバの小枝を束ねて刈り揃えた特注品。柄には限定生産を示す刻印が打たれ、製作を担当した工房の印章も刻まれている。

その姿を、私は魔界新聞の広告欄で見たことがあった。

（ファイナボレット）  
「焰矢」。

魔界でも随一と噂のある箒職人が作り上げた、最高の高速レース用箒。五年前に限定生産された特注品で、全部で五〇〇本少ししか生産されていないものだ。今ではプレミアがついて、魔界通販に並ぶ時も新品が一本一八〇万 Mag を超えた高額で取引されているともいう。

そう。箒——魔法使いが空を飛ぶためのアイテムだ。いよいよ私は、空を飛ぶことができるのだ。

「み、魅魔様、これ……！」

「懐かれたようだね。悪くない。……魔理沙、服を脱いでこいつを塗りな。股も脇の下も耳の後ろも忘れるんじゃないよ」

続いて放り投げられたのは、小さなクリーム壺。蓋を開けてみると、薄い緑色の、すうすうするいい匂いのクリームがたっぷり入っていた。

魔女の軟膏だ。魔法使いの力を増し、感覚を鋭くするために必須のアイテム。その製法は魔女ごとに違っており、秘中の秘とされている。魔法使い同士でもその作り方を教え合うことは滅多にないらしい。

魅魔様に言われるままに服を脱いで、私は裸になってそれを全身に塗り付ける。胸とか脚の間に塗り込むのは少し恥ずかしかったのだけど、魅魔様はもたもたしている私に焦れたようで、手を実体化させて乱暴に軟膏を擦り付ける。冷たい手がクリームを擦り付けるのはなんだかちよつとくすぐったかった。

「ほら、ここもまだ塗れてないよ」

「ひゃあんっ……!? ま、まって、一人でできるわ、魅魔様っ」

「うるさいね、大人しくしてな。お前にやらせてたら晩までかかっちゃうよ」

背中と足の裏とおしりの塗り残しを指摘され、私は苦勞してそこにも軟膏を擦り込んでゆく。

服の下でべたべたするクリームの感触はちよつと気持ち悪かったけれど――なぜだか心が高鳴り、ぽかぽかと全身が熱い。ぽおつと頭の芯が熱をもったみたいで、風邪で熱を出したのとはまた別の、お祭りの前のような不思議な気分だった。

「……もういいね。外に行くよ、はやくしな」

服を着直した私は、急かされながら与えられたばかりの箒を手にも、魅魔様の後を追って庭へ出た。

お屋敷の裏庭では洗濯物のために迷いの森の木々が頭上を塞ぐ枝を広げ、おひさまの光が降り注いでいる。さつき私が干したばかりのシャツが翻るその間で、私はどきどきしながら、ニスを塗られたトネリコの木の柄に跨った。

途端、私の足元からまばゆい輝きと共にごうと突風が吹き上がる。ローブのスカートがバタバタと捲れ、帽子が風を孕んですつ飛んで行きそうになる。ふわりと宙に浮き上がる感覚に、思わず声が漏れた。

「ふぁ……ッ!?」

魅魔様のくれた《焰矢》は実にじやじや馬な箒だった。暴れ回る箒が制御を失ってすつ飛んで行きそうになるのを、腿にぎゅつと挟んで押さえ込む。

吹き上がる突風はいよいよ強くなり、魔力光の輝きも増す。スカートはまるでパラシュートのように膨らみ、ドロワーズがすっかり丸見えだ。

全身を包み込む高揚感に氣を失わないよう、私はき



つく目を閉じ、箒の柄をぎゅっと握りしめて師匠の名前を呼んだ。

「魅魔様……!」

うつすらと目を開ければ、滲む視界の先で、魅魔様は腕組みをして、じいっと難しい顔をして私の方を見ている。

私ははっとした。これは試練なのだ。魔法使いとして一人前になるための、大事な関門。情けないところは見せられない。

決意と共に柄を握む手に力を込め、ぐっと奥歯を噛み締める。意識を上。遙か、空の上に。

ふうわり、妙な浮遊感。身体が重力の枷に抗うように、天地に満ちる飛行力を感じ取る。

脚がゆっくりゆっくり地面から浮き上がる——と同時。ぎゅんと周りの景色が流れ、背後に飛び去った。体重がすっかり消えてなくなったような、不思議な感覚があった。

気づけば私の身体は、裏庭のはるか上空、森のはるか上空にあった。

「わ……」

眼下には一面に広がる深い深い魔法の森。

空は——ちょうど、夕暮れと夜の境界線上の時間だった。《焰矢》はゆるゆると柄を巡らせ、ごうごうと空を踊る風の中に身を委ねる。

ゆったりとめぐる視界一面に、赤と青と、空を塗り替えるグラデーションが、カーテンみたいに折り重なって見える。空には早々といくつかの星が輝いていて、大きな満月が遠く山脈の端に形をのぞかせていた。

いまや、模型のようにちっぽけな幻想郷が、遙か眼下に広がっていた。

「飛んでる……わたし、本当に空を飛んでるわ!」

ぎゅうっと箒の柄を握りしめる。身体が落っこちてしまふんじゃないかと不安になったからだ。けれど、魔法の箒はしっかりと私の身体を支えてくれた。

かえってその不安定さが、これが夢なのではないとはつきり教えてくれる。私は今、あの遙か高い空の上にあるのだ。高ぶる心がドキドキと跳ね、顔が興奮に赤くなる。

ああ、すごい。なんて素敵なんだ。

空の上が、飛ぶことが、こんなに素晴らしいなんて、知らなかった。

「すごいわ、魅魔様！」

「——その恰好はいただけないねえ、もっと優雅に座れないのかい」

はしやぐ私のすぐ隣に、いつの間にか魅魔様の姿があった。

私の箒の乗り方に魅魔様は釘を刺す。箒を跨ぐようにして、ばたばたと両足を動かしているから、下からは下着が丸見えだ。もともと、ドロワーズなんて見られてしまっても恥ずかしがるような下着じゃないからこそ、空も飛べるんだろうけど。

「でも、横座りしたら前がうまく見えないじゃない。落っこちちゃうかもしれないし」

口を尖らせると、魅魔様はそうかいと苦笑い。私はぎゅつと脚の付け根に挟み込んだ箒の柄を掴み、ぐいと引き上げる。押さえた帽子の下から赤毛の髪をなびかせ、風をはらんだスカートをはためかせ、柄の尖端

を空の一角へとめぐらせて、胸の高鳴りのままに空を駆ける。

ああ、これが空だ。これが魔法だ。

私はいま、——自由だ。

## 【四】

空を飛べるようになって、私の行動範囲は大きく広がった。これまで深い蔭をかき分け根っこを飛び越えて歩いて行くしかなかった森の奥や、森を飛び出してはるか外の山や谷まで、簡単に çık かけて戻ってくる事ができるようになったからだ。

里にも空を飛べる人はいたけれど、いざ自分がこうして飛べるようになるまで、こんなにも便利で素晴らしいものだとは思わなかった。

そうして出かけた先では当然のように、新顔の私をみて襲いかかってくる好戦的な妖怪やお化け、妖精たちがいた。そいつらを相手に少しずつ魔法の実戦を積み、私はますます魔法使いとして力を付けていった。

そんな事をしているうち、私はそいつらからたびたび、この幻想郷の端にあるという神社の名前を耳にす

るようになった。

博麗大結界の要、博麗神社。

名前だけは里にいたところから聞いていた。その神社はこの幻想郷の要であると敬われ、大切な場所とされている。

そこに住んでいるのが博麗の巫女様で、彼女はどんなに強力な妖怪でも封じてしまう力を持つと言う。

里の人たちは、老人から子供までそろって巫女様を敬い、そして恐れていた。巫女様は人と人ではないものの境界に立ち、私達と外の世界を隔てる境界に立つ、幻想郷の中心であり、守護者であるという。

あらゆる決まり事や慣例から、博麗の巫女様だけは別枠だった。新年のあいさつや、新嘗祭にも出てこないし、そもそも人里にも住んでいない。

おぼろげな記憶では、里に流行病が広まった時、巫女様が父様のところを訪ねてきたような覚えがある。

歳は多分、母さまと同じくらいだったと思う。長くて黒い髪をした綺麗な女の人だった。母さまより綺麗な女の人を私は知らないけれど、巫女様もお化粧もし

てないのに整った顔をしていだ。でも、なんだかふわふわ宙に浮いてるみたいで、私も父様の事もまるで目に入っていないような、浮世離れた印象があつた。

いまや私も立派な魔女。博麗の巫女となれば、悪魔や魔神の扱いをめぐって対立するかもしれない危険な相手だ。実際、これまでにも多くの妖怪達が巫女に討伐されたり封印されたりしていたことを、私は知るようになった。

直接見聞きした訳じゃないけれど、最近ではサリエルという邪眼を使う堕天使や、コンガラという有角の剣士、ユウゲンマガンなんていう大物の悪魔も討伐されてしまったらしい。

「……その名前はあまり気分のいいもんじゃないね」  
夕食の食卓で巫女のことを聞いた時、魅魔様は不機嫌そうに眉をしかめた。

「あれはね、真正正銘の化け物さ。人間なんかとはちがういきものだよ」

自他共に認める悪霊の魅魔様がそんな言い方をするものだから、私はつい吹き出してしまった。そんなの

負け惜しみみたいなものじゃないかと思つたからだ。けれど魅魔様は笑う私を強くたしなめ、言い聞かせるように言う。

「強い力をもった悪魔や妖怪ほど、巫女を恐れるんだ。そこらの木つ端妖怪や妖精には感じ取れるようなものじゃないからね、あの力は。……規格外。——いや、博麗に意志なんてあるのかね。法理、法則。そういうものだよ、博麗っていうのは」

真剣な眼をして語る魅魔様の言葉は、私の胸に強く残つた。

……思えばこの時から、あいつとの出会いが始まつていたのかもしれない。私はまだ会つたこともない、博麗の巫女に対抗意識を燃やしていたのだ。

もちろん、魅魔様の弟子として日々魔法に習熟するこの私が、たかだか巫女なんか遅れを取るはずなんじゃないけれど、やがては大悪魔や魔神をも使役することになる予定の魔法使いとして、巫女がどんなやつなのかちゃんと見極めておく必要があると思つたのだ。かくして、私はいま、博麗神社の上空にいた。

「ふうん……」

愛用の箒に跨り空の上から見下ろせば、博麗神社は東の山の端、くねる山道と長い石段の上に鎮座していた。面白い事に、この神社は参道や鳥居を里の方ではなく、全然見当違いの方向に向けているのだ。里の方から神社に入るには、獣道から裏口の狭い階段をぐねぐねと昇り続けるしかない。

里にそっぽを向いた神社なんて、誰も参拝にやってこれない気がする。里の人たちは滅多に神社に近付こうとしていなかったけれど、あれは敬い恐れていたというよりも、単に行くのが大変だっただけなのかもしれない。

「巫女も変わり者なら、神社も変なのね」

神社の上空をぐるっと旋回し、怪しげないものがないことを確認してから、神社との距離を十分に保つてから、慎重に高度を落としてゆく。

そう。今日の目的は偵察である。何も最初から馬鹿正直に、のこのこと姿を晒して会いに行つてやる必要はない。今日はこっそり様子を窺い、十分に事前情報

を得てから、また後日にあらためて会いに行つてやるのだ。相手は私のことを知らないけれど、私は相手のことを知っている。心でも読まれたか、悪魔でも使つて情報を調べたとも思わせてやるのだ。

つまらないはつたりと言うなかれ、これだつて立派な魔法である。

本当に魔法を使つてそうできれば一番いいんだけど、残念ながらまだ私でも、悪魔を呼び出して使役することとはできない。魅魔様がまだ早いと言つて教えてくれないのだ。

「魅魔様も意地悪だわ。私なら簡単にできるのに」

きつと魅魔様も成長著しい私をちよつと怖く思つているのかもしれない。私が魅魔様の弟子で居るのは、確かに契約によるものだけど、魅魔様はそんなものがなくつたつて先生だと思ひ、私だつていまの弟子でいることにやぶさかではないのに。

そんな事を考えているうちに神社の境内が近づいてきた。いまのところ巫女の姿は見えなかったけれど、近くの茂みの中に箒を伝つて飛び移る。

「——ふむ？」

どうでもいいことで見付かるのも馬鹿馬鹿しいので、私は魅魔様から教えてもらった透明化<sup>インビジブル</sup>の魔法薬をぱくりと飲み込む。真つ黒に焦げるまで焙つて播り潰したイモリの尻尾を、苦さを堪えて飲み込めば、私の姿は風に溶けて消えてゆくのだ。

念には念を入れ、木の陰からそおつと神社の様子を窺う。里にも小さな社はあるけれど、神社というものをしっかり見たのはこれが初めてだった。落ち葉一枚残っていない境内には白い砂利が敷かれていて、古びた神社は苔を乗せた茅葺きの屋根と、銅張りの屋根を重ねている。古い建物なのだというのは分かったけれど、里で聞かされていたように神聖で触れ得ざるものという感じはあまりない。

しゃり、と境内の玉砂利を踏む音に、私は慌てて頭を引っ込めた。うん、見えていないとは分かっていたけれど、念のため。

小さな足音が、長い簪を引きずって近づいてくる。さつきまで気配も感じなかったのに、神社の裏手でも

掃除していたんだろうか？ ゆっくり顔を出してみると、驚いたことに、そいつはまっすぐ木の上のこちらを見上げて言ってきたのだ。

「ねえ。そこに居るのは誰？」

なんてやつだ。魅魔様の調合法で作ったイモリの透明薬は、効果時間中は隣で鼻をつままれたって気付かれなくなるような強力な魔法なのに、全然効いていない。息を詰めて気配を殺そうとしてみるものの、そいつは迷うことなく私の隠れている木の方へ歩いてくる。

後で知ったことだけど、神域である神道様式の封土<sup>ドメイン</sup>では、様式の異なる魔女術は力を失うのだ。幾重にも祀られた神社の中で、収束具に止めた魔法薬も私の魔力もごっそり力を削がれていた。私がまずすべきことは、この封土の中でも自由に動けるように浄化をすることだったんだ。

これ以上格好悪いところは見せられない。私は木陰から飛び出し、枝を蹴ってくるりとそいつの前に飛び降りる。

「はじめまして」

「あなた、だれ？」

ちよこんと小さな顔が傾げられる。

驚くべきことに、そいつは私とそう歳の変わらない女の子だった。

こいつも巫女に見えるけれど、きつとこの神社の中間使いか、見習いだろう。赤い大きなリボンと額の上で真横に切り揃えた黒髪のせいで、年齢よりもさらに子供っぽく見える。あまり飾り気のない白の衣と緋袴というのも野暮つたさを強調していた。黒目がちの彼女には似合っているけれど、少なくとも、おしやれと可愛さでは私の勝ちだ。

「……まりさ。魔理沙よ」

敵地で意気に飲まれまいと、私はあえて胸を張ってみせる。ちよつとばかりの虚勢も混ぜて。

棒立ちなのはちよつとカッコ悪いなと思って少し片足を引き、スカートの裾を摘まんで優雅にお辞儀。魔女帽子のつばをそつと引き下げて、小さくウインク。……うん、決まった。

だというのに、こいつはじろじろと無遠慮に私を上から下まで眺めまわし、見定めるようにしてくる。失礼なやつだ。

「ふうん。ずいぶん小さいのに魔女なんかやってるのね。あなた、あまり良くないものが憑いてるみたいだけど。ひよつとしてお祓いして欲しいの？」

「うふふ。魔女ですもの。悪魔のエスコートくらいはしていますわ」

子供扱いの上に馬鹿にされたのはすぐに分かったので、妖艶な魔女を意識してくすりと舌を出し、悪戯っぽく微笑んでやる。が、むかつくことにこの小さな巫女はふうん、と興味なさげに相槌を打つだけだった。

なんだか知らないけれど嫌な奴だ。こいつの第一印象は私の中でそう決まった。

「あなたのお名前は？」

「霊夢よ」

魔女と名乗った私に、臆することなくさらりと名乗る。そこに宿る言霊、含まれた韻、答える寸前に何のためらいもなく口にした所から見ても疑いようもない。

霊夢——それが間違はなく目の前の彼女を体现するのにふさわしい響きを確認する。

これがこいつの真名だ。穢れを嫌う巫女のはしくれのくせに自分の本名を名乗る事に頓着がないなんて、とんだ間抜けめ。たぶん見習いだから危険意識がないんだらうけど、これは儲けものだ。うふ。うふふ。

「どうしたのよ、ヘンな顔して。悪いものでも食べたの？」

会心の笑みを浮かべそうになるのを堪えている私に、そんな無礼な返事が飛んできたけど——寛大な私はそれを赦してやることにする。それよりも私はこんな小さな子にかかずらつてゐる場合ではないのだ。こほんと咳払いをして、尋ねる事にする。

「ねえ。あなた。ここは博麗の神社でしょう？ 巫女様はどこにいるのかしら？ あの神社の中？ 私はね、巫女様に会いに来たのよ。そういえばあなたって、巫女様の子どものなの？ ……あれ？ 巫女様って結婚できるとのかしら」

「いっぺんに聞かないでよ」

煩そうに顔を顰め——やっぱりしつけのなっていない子だ——そいつは箒を引きずって歩き出す。置いていかれるのかと思つて私は慌ててその後を追いかけた。「ここは博麗神社。私は霊夢。巫女が結婚できるかどうかは知らないわ」

小さな巫女はそのまま急に立ち止まって、くるとこちらを見た。

「それで、ここには私しかいないから、私が博麗の巫女なんですようね」

他人事みたいにそれだけ言つて、そいつは境内を掃き始める。

私は呆然と、馬鹿みたいにその言葉を聞き流していた。右耳から左耳に通り返していきそうなのをいつの言葉も、慌てて捕まえて、一つずつ頭の中で繰り返す。

博麗の神社。巫女。霊夢。

つまり、

この生意気な子が、博麗の巫女だというのか。

「おかしいわ、前に博麗の巫女つて見たことあるけれど、あなたみたいな子供じゃなかったもの。私は魔女



だからそれくらいお見通しよ。あなた、嘘ついてるんでしょ」

「本当よ。私は二年くらい前からここにいてるけど、他に巫女は見たことがないもの。先代の事はよくしらないけれど、あなたが見たのはそっちかもね」

二年前。……はつきりはしないけど、私が里で巫女様を見たのは多分、それよりも前だったはずだ。すると、それからいくらしないうちに博麗の巫女は代替わりしていたのか。

「……ふうん。こんな、ちびっ子にねえ？」

「あなただってちびっ子じゃないの」

「私は魔法使いなのよ。子どもと一緒にされたら困るわ。うふふ」

くすくすと微笑んでやる。なにしろ私は先々月に晴れて乙女の証を迎えているのだから。誰に後ろめたいこともなく、立派に大人の女の子だ。きつと、どうせこいつは『まだ』なんだろう。優越感を胸に見降ろしてやるが、当の巫女はどうでもいいとばかりに掃除を進めている。ひよつとしたらそんなことすら碌に知ら

ないのかもしれない。

けれど無視されるのはやっぱり生意気だった。いっそ魔法で懲らしめて、立場を分かせてやろうかと、残酷な心が頭をもたげる。

と――

「ご主人様、どちらにおいでですかの」

神社の裏側から、しわがれた声が響いてきた。咳き混じりながらも、良く響く大きな声だ。

見れば、鱗と甲羅に深い皺を刻んだ大きな亀が、庭の裏手にある池からにょきりと顔を覗かせていた。随分なお爺さんみたいで、顎には白いひげがたくさんたくわえられ、白い眉も長く垂れ下がっている。亀の妖怪なんてあまり見ないけれど、神社にこんな怪しげな奴が居付いているのか。

「またぞろこんなところで……今日の御勤めはどうしましたかな」

「玄翁。いいじゃない、面倒臭いんだもの。毎日拝んだって、神様だって同じことばかり言われ続けたら飽きちゃうわよ」

「信心というモノは欠いてはならぬものですぞ。日々の繰り返し、心に留めおくことが肝要なのです。一日くらいとサボるだけで、正しい信仰というものはあつさりとしわれてしまうのですからな」

「それって、たぶん神様が我儘過ぎるのよ。私なら三日くらい忘れられてもどうでもいいのに」

「巫女が神を騙るとは嘆かわしい……修行嫌いも大概になされ、霊夢様」

のろのろと地面を這う亀は、やけに人間臭く前脚で目元を押さえる仕草をして、はああと大きなため息をついてみせる。なんだかよく分からないけれど、あの亀——玄爺と呼ばれているみたいだ——が、霊夢の世話役なのだろうか。なんで神社に亀がいて巫女にお説教してるのかさっぱり分からないけれど、あんな具合だからこの神社の管理は相当適当なんだと知れた。

「ともあれ、今からでもお勤めを。良いですかな」

「もう、面倒ねえ……」

ぴしやりと言いつつ切れ、口を尖らせる霊夢。明らかにやる気の無さそうに箒を弄ぶ。

まったく、とんだぐうたら巫女だ。でも、この博麗の社はそうでもないかもしれない。私の魔法をあつさり打ち消してしまいうくらいの力を持つ神社だ。上手く使ってやれば私の力をもっと増す役に立つかもしれない。

「ねえ霊夢」

亀がいなくなるのを見計らい、とびきりの笑顔を作つて、私は霊夢に尋ねる。

「この神社って、何の神様を祀っているの？」

「……さあ？」

「さあ、って……」

「知らないもの。それ以上は何も言えないじゃない？」

驚いた事に、霊夢は本当にこの神社に祀られた神格を知らなかった。こんなので巫女が務まるのだろうか。後にもっと驚くことになるのだが、どうもこの結果の端にある社殿には、祀られている神格に当たるものが存在しないらしい。つまり博麗の巫女は、空っぽの本殿を祀っているのだ。……なぞなぞじやあるまいし一体何がどうなっているのかまったくわからない。

「それよりあなた、丁度いいわ。私の代わりにここのお掃除をしておいて」

「え？ 待ちなさいよ、なんで私がそんなことしなくちゃいけないの？」

いきなり話を振られて驚く私に、霊夢はさも当然とばかりのずうずうしい顔をして、

「他に誰もいないじゃない。箒だつて持つてきてるんだし、じゃあお願いね」

「あ、こら！ これは魔法の箒で、掃除の為になんか——つて、待ちなさい！」

言うが早いか、霊夢は私に境内の掃除を押し付け、神社の中に走つて行つてしまった。

二本の箒を抱え。私はどうしたものかとしばし、途方に暮れるのだった。



どうにも気に入らないやつだ——

私の、霊夢への最初の評価はそんなところだ。同じ

年の友達ができたのは久しぶりだけど、人の都合も考えずにあれこれと命令するのは気に入らないし、自分の事を棚に上げてこつちを子供扱いするのもどうかと思う。見たところ、まだあいつは胸もぺったんこで、女の子らしいところがどこにも見当たらない。

なによりも、私は魅魔様の弟子の大魔法使いだと言うのに、あいつは私のことを全然どうでもいいように扱うのが癪に障った。寛大な私は魔法使いの余裕としてその横暴を許してやっているのだけど、何度霊夢に私がどれだけすごい魔法使いなのかを教えてやつても、あいつは興味なげにふうんと頷くだけ。ええと、こういうのをなんて言うんだっけ……そうだ、暖簾に腕押しつてやつだ。

とにかく、霊夢は万事、なにごとにもふわふわして、何をやつても何を言つても反応らしい反応を返さないのだ。あまりに上の空なのでちよつと頭がどこかへんなんじゃないかと思つたりしたこともあったけど、どうやらそれは違うみたいで、ちゃんと怒りもすれば笑うこともある。

ただ、ほとんどの物事があいっには『そうあるがまま』の、ごくごく当然のことであるらしかった。日常の変化を些細なものとして軽んじているのでもなく、決してどうでもいいわけでもなくて、大事に思っていないわけでもない。

ただ、起きてしまった事に対して、ああすればよかったと後悔したり、どうしてこうしなかったと執着したりする気持ちが驚くほど低いらしい。怒ったり笑ったりもほんの一時の事で、いちど感情を見せてしまえば、後にはそれをただ事実として認めているという、そんな心のありようは、なんだかお伽噺に出てきた仙人みたいに思えた。

……まあ、仙人様というには、どうにも修行嫌いでぐうたらな巫女であつただけだ。

ただ、どんな時に神社に行っても、あいっは必ずそこに居るので、ちよつと時間を潰したい時に神社に寄るのはそんなに悪くはなかった。面倒そうな態度を取っても薄いお茶と湿気たお煎餅を持ってくるくれるくらいのはず、霊夢もうるさい玄爺のお小言を

聞かずに済む時間を有り難がつていた。

どうも、博麗の巫女というのは滅多に神社を出る事は許されないらしい。理由は良く分からないけど、このぼろい神社に居る事が巫女の御役目なんだとか。

「じゃあ、本当に霊夢はずっとここで独りで暮らしているの？」

「ええ」

さらりと答える霊夢。最初は気にしていなかったけれど、よく考えるとすごい事かも知れなかった。霊夢が今代の博麗の巫女になったのが、だいたい二年くらい前のこと。つまり、私がまだ霧雨の家を出るよりもつと前、悪戯鬼達と一緒に毎日泥んこになって遊んでいたところから、霊夢はここですうっと、独りで暮らしていたことになる。

厳密には玄爺だっているし、本当の意味で独りきりではないだろうけど、池から長い時間出られない亀では話相手にはなれても、それ以外にはてんで役に立たない。まして最近めつきりお爺さんになってしまったあの神亀は、一日の多くの時間を池の中で眠って過ご

しているという。

つまり霊夢は、神社の掃除、洗濯、炊事、何もかも一人で全部やらなければいけないのだ。あの頃の私が、霊夢と同じようなことをできたのかというと、正直に言えばちよつと、難しいかもしれない。

「でも、今なら魅魔様のところで習ったから、私だつてちゃんとご飯も作れるし洗濯だつてできるもの」

「？ なんのこと？」

いけないいけない、無意識に張り合つてしまった。

そもそも霊夢と私を比べる事自体がおかしいのだ。私は森の悪霊の弟子にして、魔法使いの魔理沙。たくさん悪魔を従え使役して、空も飛び魔法を扱える、立派な魔法使いなのだ。修行もさぼりがちで、神社から出たこともないような巫女見習いとは別格なのである。

「なあに、あなた魅魔の弟子なの？」

「うふふ。ばれちゃつたら仕方ないわね。」

そうよ、私は魔法使いの魔理沙。様式は古き魔女術、森の悪霊・魅魔様を導師精霊にもつ第五階梯！ 未来の幻想郷一番の大魔法使いよ！

霊夢が魅魔様のことを知っていたのは驚きだったけれど、いずれ気付かれることだろう。どうせなら威勢よく名乗つてしまえと開き直る。

しかし、こうして認めたとたん、あろうことか霊夢はいきなりお札やお祓い棒を出して私に向けてきたのである。

「ちよ、ちよつと！ 何するのよ、いきなり」

「なにつて、悪い奴は退治しなくちゃいけないでしょ」さらりと答え、ごつそりとお札を投げ付けてくる霊夢。視界を埋めるほどのたくさんの呪符から、私は箒を呼び寄せて宙に逃れた。

「もう、乱暴な巫女ね！」

なおもしつこく追いかけてくるお札を焼き払い、箒の上から魔法を投げつける。

けれど霊夢は慌てずに、お祓い棒を構えて眼を閉じた。

「陰陽玉！」

途端、神社の本殿の中から一抱えもある丸い珠が飛び出してくる。白と黒に塗り分けられた珠は、毬みた

いにぼんぼんと跳ねて飛び回り、私の魔法を弾き飛ばしてしまつた。

もう一度魔法を撃ち込んでみるが、結果は同じ。霊夢の回りを護るように跳ねる珠が、私の魔法をこともなげに弾き、吸収してしまう。どうやら相当力のある宝具らしい。

魔法と神玉がぶつかり合い、それに呼応するように、空を分厚く覆っていた雲が乱れ、遠く雷が鳴り響く。

ほどなく、ぼつぼつと雨が降り始めた。

見る間に濡れてゆく境内にじつと向かいあつて、私と霊夢はお互いの顔を睨みつける。

「あんたが何を考へてるのか知らないけど、魅魔……あいつは悪霊。それもものすごく性質の悪い奴なのよ。軽々しく付き合うものじゃないわ」

「お生憎さまね。私は魔女なの。悪魔や魔神との契約なんていつものことなんだから」

馬鹿にした表情の霊夢に、こつちも買ひ言葉で言いかえす。魅魔様が悪い奴だというのはちよつと否定し辛いけれど、祀るものの居ない神社の巫女なんてもの

の方が、よつぽど胡散臭いと思う。

「そう。……やつぱり、あの時もつと念入りに退治しておくんだったわ」

魅魔様の口ぶりから、なんとなくそうなのだろうと思つていたのだけど、やつぱり霊夢と魅魔様は戦つたことがあるらしかつた。

どうも霊夢も魅魔様を仕留め切れなかつたようだけど、私に喧嘩をふっかけ、負け惜しみにそんな事まで言うなんて、よつぽど悔しかつたんだろう。

「あんたも、あんな悪いやつと言う事なんか聞かない方がいいわよ」

「うふふ。ご忠告、ありがたく聞いておきますわ」

きつと霊夢は私の魔法の上達を恐れているのだろう。その手には乗るものか。

強さを増す雨足の中、じつとこちらを見上げる霊夢に見せつけるように、私は宙をぐるんと一周してみせる。一人で空も飛べない巫女に、魔法使いたる私が遅れを取る訳がない。

「それでは今日はお暇しますわ。ごきげんよう、霊夢」

「……………」

帽子のつばを下げ、強い雨の中にくすりと口元だけで笑みを残して。

私は神社を後にした。



「……なんだい、情けない。魔法使いが流行り風邪なんてみっともないねえ」

「ごめんなさい……」

げほ、と掠れた声が絞り出す声は、お婆ちゃんみたいなしわがれ声。このまま自分の声がこのままで、気付いたら肌も皺くちや、腰も曲がつて動けなくなるんじゃないかと思うと、怖くてたまらない。

頭がぼうつとして、咳で喉の奥が締め付けられるように苦しくて、手足がだるくて、訳もなく寒い。

分厚い毛布を何枚もかけたベッドの上で、魔界の炎を燃やす薪ストーブがしゅんしゅんとポットを湧かしている。ずず、と鼻を吸る喉の奥が痛い。

雨の中を濡れて帰ったのがいけなかったのか、私はすっかり風邪をひいてしまっていた。

季節外れの夕立ちは、叩きつけるような豪雨となつて、空を飛ぶ私をずぶ濡れにしたのだ。ごうごうとうねる空の黒雲。遠く跳ねる稲光。

叩きつけられる雷の音を避け、簾にしがみつこうにして高度を落として、どうにか魅魔様のお屋敷に辿り着いた事には、ローブは水を吸って脚に絡み、下着までびしょびしょに濡れてしまっていた。

「まったく、神社に居たんなら大人しく止むまで待ってりやいいものを、間抜けだねえ」

「だつて、みまさま……」

「ああもう、喋るんじゃないよ」

私は魅魔様の為に頑張ってるのに——そう思つて話そうとした瞬間、ごほごほと咳が止まらなくなる。胸が軋み、身体の奥がぎゅうつと引きちぎられるような痛みが立て続けに走った。ベッドの上で背中を丸めてもがく私に、魅魔様は傍らの水差しから薬湯を飲ませてくれる。

「つぐ、げほ、げほ……」

「落ち着いて、ゆっくり息をしな」

ああ、こんな時のためにも雨避けの魔法とか有ると便利なんだけど、そう言えば私はまだ習ったことがない。……いやいや、魔法使いなんだから天気の一つや二つちよちよいと変えてしまわなければ嘘つてもものだろう。今度神社に行く時までには、調べて覚えておくことにしよう。そう言えば今日は霊夢のところでおやつを食べ損ねた気がする。今度会った時には、二人分要求してみようか。

……ぼんやりした頭が、いつしか眠気に包まれてゆく。

「どうもこりや、お前の作った魔法薬は効かないようだね。しばらく辛抱しな、魔理沙」

言われなくなつて、咳と熱の苦しみに、もう死ぬほど後悔していた。今度から、風邪の為の魔法薬もちやんと作っておくようにしようと心に誓う。魅魔様はこんな時も厳しい。自分で風邪をひいてしまったんだから、自分の責任なのだと。

それでも、魅魔様がこうして傍に居てくれるのは、嬉しかった。たとえこれが、契約によるものであるのだとしても――。

「ああ、酷い熱だ」

吐息と共に、魅魔様の霊体の冷たい手がそつとおでこを撫でてくれる。ひんやりした手のひらに触れて貰っている、すこしだけ頭が楽になったような気がする。熱でぼうつとする頭がゆっくり霞み、深く深く眠りの中に落ちてゆく。

意識が深い闇の中に飲まれる瞬間、

霊夢はきつと、こんな時も独りきりなんだと。

ふと、そんな事を思った。



とはいえ、私と霊夢の仲が悪かったのかというと、そうでもなくて。

それから起きた、いくつかの騒動――後に異変と呼ばれるようになった出来事で、私と霊夢は何度となく



顔を合わせるようになった。

歴戦の戦車乗りを名乗る里香という少女が、がどこからか持ち込んだ花冠戦車や邪眼獣を乗騎にして、暴れようとしたのを止めて回ったり（主に私と魅魔様は霊夢の邪魔して回った側だったけど）。

別の世界からやってきたという、教授を名乗る、全身真っ赤な女とその弟子の水兵服の小娘やら、ポルターガイストやら、私と同じく魔法使いを自称する少女やら、科学信奉者の魔女なんて連中と、複雑に乱れて折り重なった時空の中で対決したり。

神社に沸いてきた大量の幽霊を追いかけて、神社裏手にあった湖に出現した、夢幻館なんて呼ばれる館に住んでいた妖怪たちと戦ったり。

幻想郷は騒がしく、騒動には事欠かず、博麗の巫女の出番は多かったのである。

もちろん魅魔様も黙ってみてはいない。時には堂々と、時にはこっそりとそれに参加し、私も時には霊夢と敵対し、時には協力して、妙な連中と付き合うことになった。

特に面倒だったのが夢幻館の時の騒動だ。魅魔様は、夢と幻が結実して顕界（現実世界）に溢れ出して来たんだなんて説明してくれたけれど、もともとが夢の世界に住んでいただけあつてか、夢幻館に暮らしている連中は厄介者ぞろいだった。

弱いのか強いのかで、妖怪は言うに及ばず、大鎌をぶら下げた死神やら、金髪の小さな吸血鬼なんてやつらもいた。

中でも特に凄かったのがそいつらの親分の、幽香と名乗る妖怪だった。幽香は寝込みを襲った私達に寝ぼけたまま強烈な反撃をかまし、一度引込んだ後はぶかぶかのズボンにチェックのベストに着替えて、日傘を手にもって再戦を申し込んできたのだ。

夢の世界を縦横に駆け巡り、分身を呼び出したり力づくで魔法を踏みつぶしたり、掲げた傘から高出力の大火力レーザーを惜しげもなく連発してくる幽香に、さしもの私も攻めあぐね、魅魔様に出番を譲ることにした。この時は霊夢も苦戦していたのでおあいこだらう。

最終的に魅魔様が格の違いで幽香をねじ伏せて、夢幻館の騒動は無事終結した。

後で聞いたところによると、強いと言うだけなら、幽香よりも強い妖怪が、夢幻館のさらに奥に潜んでいるらしい。夢月、幻月というらしい双子の姉妹は、私は結局一度も会うことができなかったで、それが本当かは分からないけれど。



「うふふ、霊夢、こんにちわ」

「なんだ、あんたか」

神社の屋根上に箒を停め、うんざりとした表情を浮かべる霊夢に、スカートをつまんで優雅に一礼。こんなやり取りが日常になるくらいには、霊夢とは顔なじみだった。

「そんなとこ登ってないで、降りてきなさいよ」

「あら、ここは私の特等席よ？ いいじゃない、どうせ神様もいるんだか分からないお社なんだから」

「そう言う問題じゃないわ」

脚元からの抗議には耳をかさず、急な傾斜の瓦の上にごろんと横になった。きらきらとまぶしいおひさまの下、白い雲の流れる空を仰ぐ。北には雲をかぶる妖怪の御山、深い梢を重ねる魔法の森、遙か彼方、澄んだ水を称える紅魔の湖。見渡せば幻想郷が一望できるこの場所は、私のお気に入りだった。

なによりも好きなのは、この蒼い空。長い長い階段の上にある博麗神社は、幻想郷で一番、空に近い場所なのかもしれない。

「もう、魔理沙っ……怒るわよ！」

ぷうと頬を膨らませながら、霊夢が苦勞して屋根の上に登ってくる。構えた手からお札が飛んでくるのを、箒に飛び乗って避ける。飛べない霊夢にはそれだけで私を追いかけてくることはできない。

「うふふ。鬼さんこちら」

「——玄爺っ、ねえ玄爺！ 速く来なさい！」

「おやおや……何の騒ぎですかね？」

霊夢が呼びつけているこの老亀が、霊夢の空での足

代わりになる乗騎であることを、私は最近知った。このお爺さん亀にどっかり腰をおろして空へ舞い上がる霊夢を初めて見た時、私はおなかを抱えて大笑いしてしまったのだけど——博麗の社を守る神獣、老いていても空を舞う姿はなかなかのもので、ばら撒かれる魔力弾をひらひらかわしていく姿には貫録すら見えた。

霊夢もその乗りこなす方はよく心得ていて、私にもそう負けないくらいの戦いぶりに、ちよつと驚いたくらいである。

博麗の巫女なんて大層な肩書のくせに、亀に乗かって空を飛ぶ姿はどうにも滑稽で、それからも見るたびに笑ってしまいたくなつたけど——霊夢はいたって真面目で、面倒そうに玄爺のお小言を聞き流しながら封魔針やお札を飛ばす。なんともやる気のない攻撃は次々に妖怪を叩きのめしてゆくのだ。

そして、なによりも凄かったのは、例の、陰陽玉という神宝だ。博麗神社の宝具であるというこの小さな玉は、相当に強力な妖怪でも容赦なく一撃で押し潰し、その内側に封印してしまふ。成程、ぐうたらな霊夢が

博麗の巫女を務めていられる理由も分かうというものだ。

「さあ、霊夢、いくわよ」

「はあ、もう……面倒ねえ」

そうして毎回、こんな感じ。

霊夢は滅多に神社の外に出てこようとしなかったから、こうして私が一方的に神社を訪ねてゆくばかりだった。私にはこの神社を乗っ取って、自分の魔法の拠点にしようという企みがあったし、そのあたりを抜きにしても、魅魔様の厳しい修行の合間にここで過ごす時間は決して悪くなかった。

それに、そうでもしなければこいつは本当に一人きりだろうから。

顔を合わせては他愛もないおしゃべりをし、些細な事で喧嘩をして、疲れたら一緒に縁側でお茶とおやつ。霊夢はまだ子供のくせに渋いお茶に、お煎餅やお饅頭が好きだったので、実に私と好みがあった。魅魔様は洋食派だったので私も必然的にケーキやポトフ、リゾットを作らされることが多かったけど、私も本音は和

食派である。

とっておきの水羊羹なんかを苦勞して冷たい井戸水で冷やしてから、一緒に食べた時は、思わず二人で笑い出してしまったほど。

私が来ると折角のおやつが半分になってしまふと文句を言つてばかりの靈夢だったけれど、そのくせきちんと二人分用意してあるあたり、素直じゃないなあと思う。

そしてまた、今日も。

「……また来たの？」

「うふふ、ご挨拶ねえ。靈夢」

お昼ご飯の途中だったのだろうか。ちやぶ台に座っていた靈夢は、折角の私の訪問にも関わらず、ぞんざいにそれだけ言う興味なさげに冷麦を嚼り始める。まったく拍子抜けすることはなはだしい。幻想郷きつての魔法使いが訪ねてきてやったというのに、この対応では力も抜けようというものだ。

「なあに、折角遊びに来てあげたのにその態度？」

「むぐ。……知らないわよ。いまご飯食べてるから後

にして」

なんとも適当な扱いだが、それでも怒鳴り返したりはしない。どんな時も礼儀を欠かさないのが、魔法使いに相応しい態度なのだ。

けれど、私が忙しい修業の合間を縫って訪ねてきてあげたというのに、このぐうたら巫女は面倒そうな顔をするばかり。形はどうあれ、神様に仕える巫女としてはあるまじき態度だと思うのだけど、いつになつてもこいつの態度は変わらないのだ。

「なあに、この前は黒で、今度は白色？ 本当に見て

くれが定まらないのね」

「日々お洒落に氣を使う魔女として当然の装いですわ。靈夢こそいつもおんなじ格好で飽きないの？」

そう、今日の私は、魅魔様に例のクロゼットの部屋で新調して貰つた新しい服に袖を通してゐる。ローブの色は紫ではなく、白。赤に染めていた髪も金色に戻したばかりだ。

魔法使いはその位階ごとに服飾に制約を受ける。つまり服の色を変えたということは、私が魔法使いの階

梯をまた新しく一つ上に昇つて、いよいよ世界の真理へと迫つたことの証なのである。

「これでもちゃんと変えてるのよ」

代わり映えのない巫女服の袖を引つ張つて主張する霊夢だが、私には違いは見つからない。どうせこの貧乏神社だ、お古を引つ張り出してきたとかそんなところだろう。

だというのに、霊夢ときたら冷麦の残りをちゅるるんと啜りながら、じろじろと私の格好を眺め、

「でも、あんたには白は似合わないわね。偽物みたい」  
などとのたまいやがったのである。

この白の三角帽子は特にお気に入り、鏡の前ですうっと見惚れていたくらいだったというのに。さすがにカチンときた私だけど、あくまで魔法使いらしく、たつぷりの余裕と淑女の慎みを保つて霊夢に提案した。「それだけ強くなったってことよ。なんなら、今からでも教えてあげるわ」

「またそれ？」

私がポケットから出したカードに、霊夢は露骨に嫌

そうな顔をする。

「あら、魔界で流行っている最新の決闘法なのよ？ いまじや魔法使いはみんなこれで遊ぶの。遅れてるわね、霊夢」

「……私は魔法使いじゃないもの。それに、そういうの面倒だわ」

「そんなだから巫女はダメなのよ」

魔法使いの最新流行は、やはり魔界だ。いつかは私も魔界に行つて、あそこで更なる魔法使いとしての力を身につけたいと考えている。魅魔様に話したら、お前にやまだ早いよなんて言われてしまったけど——最近私は私もそれを見越して、瘴気や毒に耐性を持てるようになる魔法薬の研究をしているのだ。

その魔界でいまブームなのが、この遊びだ。予め魔法を形にして宣言し、手持ちのスペルをすべて失うまで戦う弾幕勝負である。射眼を高める地力の鍛錬にもなるし、広く自分の魔法を周りに印象付けられることもあつて特に魔法使いの間で評価が高い。

なにより、相手と公平な条件で戦えるっていうのが

お気に入りだった。

「さあ、勝負よ霊夢」

箒の上からびしと指を突き付ける。

「……仲のよろしいことで、結構結構」

「玄爺、うるさい」

私が示した一死四符に、霊夢は面倒くさそうに応じた。縁側から腰を上げ、払い棒を振って乗騎の古亀を呼び寄せた。

「またそのようなぞんざいな口の利き方を……嘆かわしいですぞ、霊夢様」

「ああもう……うるさいわねえ」

池から身を乗り出してさめざめと泣いてみせる老亀に、霊夢は口を尖らせる。

玄爺は霊夢の面倒をみるように申し付かつてはいるようだけど、ぐうたら巫女の惨状にあれこれと口うるさくお小言はしてみても、この老亀には霊夢のために何かしてやろうとする様子はほとんどなかった。口ばかりのご意見番に煩くお説教されてばかりで、霊夢がうんざりする気持ちは分からねくはない。

異変のときでもなければやれ腰が痛い背中が痛いと言句を言い、年寄りをこき使うものではないですぞといつてのける亀との暮らしは、すこし同情してあげた気分になった。

こんなわがままな乗騎に頼って、一人で空も飛べないなんて可哀想だと思ったものだけど、霊夢は特段、空を飛ぶことに興味を持っていないらしい。

最初はただの強がりだと思っていたけれど、付き合いを続けていくにつれてどうも彼女が本気でそう考えているらしいことを知って、私は驚いた。人間の規格外にある博麗の巫女といっても、霊夢はきつとまだまだ子供なんだろう。

「ああ、魔法使いの高尚な理念は、凡俗には理解されないのね」

「何言ってるんだか良く分からないけど、さつさと始めなさいよ」

結局、玄爺に見送られて、一人境内に出てくる霊夢を、私は箒の上から悠然と見降ろしてやる。

「うふふ。急かさなくてもはじめますわ」

優雅に箒の柄を旋回させ、深く一札。手の中の四符を示し、霊夢にも同じことをさせる。条件は整った。いよいよ決闘の始まりだ。

私は自信たっぷり、まずは手札の一枚を切った。



博麗の巫女は、妖怪が起こした騒動や、被害を食い止めるために戦う。

巫女が妖怪達から恐れられ、人間達から敬われているのは、それが理由だった。普段、神社の中で日がな一日お茶を飲んでいたらにしている霊夢が、いざ異変となれば驚くほどの身のこなしで妖怪の攻撃をかわし、見る間に肉薄し、お札や針を叩き込んで調伏してゆくのは、私も思わずぽかんと見惚れてしてしまうほどの見事さだった。

相手のどこが弱点なのかも、相手の攻撃がどこを狙ってくるのかも、霊夢に言わせれば、なんとなく勘でわかる、のだそうだけど——本当だとしたらちよつと

おかしい。

そして——目下、私が興味を持っているのは、霊夢の使う陰陽玉という神宝だった。

普段は神社の本殿に安置されているこの一抱えほどの珠は、代々、博麗の巫女にしか使えないという退魔の宝玉である。かつての巫女たちもこの珠の力を使つて幾多の妖怪を調伏し、封印してきたという。

この陰陽玉こそが、かつて魅魔様が巫女に負ける原因となった神宝なのだ。魅魔様はかつての戦いで、当時の博麗の巫女と闘い、陰陽玉に大半の力を奪われてしまった。この珠は魔力や妖力を封じ、吸収し、反射する能力を持ち、正しい博麗の血統の元にある限り、おおよそどんな妖怪でも敵う手段は無いらしい。

魅魔様の力は、今もなおこの小さな珠の中に封印されているのだ。

霊夢が当代の巫女になってから、魅魔様は陰陽玉の封印を解こうと何度か挑んだらしいけれど、代々の巫女たちが使い続けてきた博麗の神宝の力とはとてもなく、結局その封印を解くことはできなかった。

もちろん、本気で戦えば霊夢本人に魅魔様が負けるはずがないけど、加減を間違えて霊夢を殺してしまったりしたら、陰陽玉の封印を解ける者はいなくなり、魅魔様の力も永遠に取り戻せなくなってしまう。

だからこそ、魅魔様仕方なくは憎い博麗の巫女を放置しているのだという。

けれど、この嚴重で強力な封印も、解く方法が全く無いわけじゃない。

これまでの歴代の巫女たちが節操なく妖怪を退治、封印してきたおかげで、陰陽玉にはいまや膨大な力が封じられており、許容量はほぼ満杯。神宝が備えている浄化能力でも追いつかない状況にあるという。

そして封印した力が陰陽玉の許容量を超えれば、封印を内側から破ることができるというのだ。正確には、たったひとつの神宝が万が一にも壊れてしまわないように力を外に逃がすような仕組みになっているらしいけれど——そうすれば魅魔様はかつての力を取り戻すどころか、封印されていた力全てを手に入れ、幻想郷の神ともいえる存在に成ることができるのだという。

「わかったわ！　じゃあ、私があいつと戦ってその宝具を壊しちゃえばいいのね！」

「……話は最後まで聞きな」

話を聞くなり飛び出しそうとした私を小魔術の魔法の手で掴み、制する魅魔様。襟首を掴まれてふらんと宙ぶりにされた私の目の前に、魅魔様は星のステッキの先端を突き付ける。

「馬鹿だねえ。その程度でどうともなるんなら、とつくにあたしがどうかしているんだ」

「そうなの？」

「痩せても枯れても、博麗の象徴たる至宝だからねえ」やりきれないといった気配の魅魔様。要するに、確かに、陰陽玉の封印の許容量は限界に近いらしいけれど、それでも一杯にするには私や魅魔様が闘ったくらいで埋めることは到底できないという話だった。少なくとも幻想郷を揺るがすような大異変が数度、立て続けに起こり、それらを強引にねじ伏せてしまうくらいの力を封じなければならぬらしい。

「なあんだ。つまらないの。ねえ魅魔様、それだった



ら、靈夢の所からかつぱらつてきて研究した方が手っ取り早いと思うわ」

「魔理沙。そりや盜賊ロバートの考え方だ。仮にも魔法使いウィザードリィを心ざすなら、お前はもう少し思慮深くなるべきだね」

「あら。どっちも冒険者には違わないでしょう？」

「お前もつくづく口の減らない娘になったねえ」

「うふふ。お喋りは女の子の嗜みですわ」

ともあれ、無闇な手出しは無用、というのが魅魔様の命令だった。

せつかく弟子がやる気になっているのに、それをあえて邪魔するなんてなんだか納得いかないけれど、魅魔様にもきつとなにか考えあつてのことなんだろう。

しかも、当の靈夢はあの宝玉がそんな大した宝物だなんてまるで思っていないみたいで、それがますます私をやきもきさせた。

精々が妖怪退治に便利なアイテムぐらいにしか考えておらず、陰陽玉の新しい力を発見したと自慢するのでなにかと思えば、『甘いものを食べても太らなくなる』だの『いろんな香りを出せる』だの『好きなとき

に猫の姿に変形させる』などと聞いてるこつちが頭の痛くなるようなものばかり。

挙句、猫に変えた陰陽玉をひぎに乘せながら、のんびりお茶をしている靈夢を見て、流石の私も心底疲れてしまった。

……まあ、猫、可愛かったけど。

さすがに玄爺もたまりかねたのか、ある時、みだりに大切な宝玉を持ち出すものじゃないとお小言を始めた事があつたけれど、靈夢はじゃあそれを宣伝したらお客さんがたくさん来るかしらなどと嬉しそうに言い出す始末だった。

後になって思えば、博麗神社はこの頃から困窮への道を転がり出していったような気もする。

先代の頃は里から寄進された神田とそれを管理する扶人が付けられていたり、神人が麓に住んでいたたりして、毎年の寄付もそれなりの額になっていたのだとか。

でも巫女が代変わりした時、まだ小さな靈夢のことを知る人はほとんどおらず、当の靈夢もすっかり生活に頓着なんてしていなかったので稼ぎがあるわけもな

く、みるみる神社は寂れていった。

こんなへんびな神社まで物好きにも参拝に訪れる人なんてほとんどいない。良くて行商人が日に一人、酷い時には十日経つても誰もやってこないようなこともざらだった。

私が霊夢に、もう少し里に顔を出すようにしたらどうかと言ったのもそれがきっかけだ。確か先代の巫女様は、里の鎮護祭とかで、ある程度は里に顔を見せていた。霊夢はそれもまったくしていないのだ。少しくらい、博麗神社の巫女として有名になった方がいいと思う、そう勧めてみたのだ。

だというのに、霊夢は私の思い付きを良いアイディアだと喜ぶどころか、面倒そうねの一言でそれを切っ捨ててしまった。

「どうせ、里の人たちは私のことなんてありがたがりではないもの。行ってもおなかが減るだけ勿体ないし、用事もないのに行つたつてしょうがないわ」

私はあんなことがあったから当然だけど、霊夢が自分から里と距離を取ろうとしているのは意外だった。

里の人達はあんなに巫女様巫女様と畏れ敬っているのに。

「ねえ、魔理沙。あんたが代わりに行つてきてよ」

「嫌よ、なんで私が神社の宣伝なんかしてこなきゃいけないの？」

「この前の例の弾幕ごつこの負け分、まだ払ってもらつてないわよね？」

「ぐっ……」

痛いところを突かれて思わずうめいてしまう。確かに最近、魔界の決闘ごつこの私の負けはだいぶ多い。霊夢が勝負に慣れてきたからか、最初のころほど勝てなくなっていた。

けれど自分から吹っかけた勝負だ。仮にも魔法使いが、正当な勝負での負け分を支払えと言われて踏み倒す訳にもいかない。強く言い返すこともできず、私は渋々それを引き受けることになった。

## 【五】

人里に来るのはどれくらいぶりになるんだろう。あの日、もう一度と戻らない覚悟をしていたつもりでも、いぎ里の街並みが近づいてくると、わけもなく胸がきゅうつと締め付けられるような気がする。

箒の上から見下ろす里は、こんなちっぽけだったのかと思うほどささやかなものだった。私がまだ霧雨のお嬢様であった頃、この里が私にとっての世界の全てであり、どこまでも続く大きな大きな街並みだったはずなのに。

私は魅魔様から、幻想郷に住むたくさんの妖怪や妖精たちの社会、魔界や冥界、結界の外にある広大な世界について教えられていた。だからこそ、一段とこの人里は小さなものに見えたのかもしれない。

その一方で、里に近付くにつれて、どうにも首筋が

むずむずとぎわつて落ち着かない。不自然なくらい浮き足立っているのが自分でも分かるくらいだ。

(しつかりしなさい、魔理沙！)

私はもう、立派な魔法使いの魔理沙になったのだ。誰が疑うこともできない魔法使いとして、立派に独り立ちしたはずなのだ。

……間違いない、そのはずなのに。

もしも誰かに正体に気付かれてしまったら、お伽噺の灰かぶり姫みたいにこれまでの日々が全部嘘のように消えてしまうのじゃないかという、根拠のない想像がどうしてもやめられなかった。

(……大丈夫よ、ばれっこないわ)

慎重に、シンボルを刻んだペンダントが姿変えの効果を発揮しているのを確認し、気配消しの魔法薬を二粒追加して、私は動揺をこらえ、自分に言い聞かせる。

そもそも、霧雨の家の近くに行かなければ顔見知りに出くわす筈もないし、私の外見だって里を出たときに比べて随分変わっている。魔法が解けてしまっても、私だと見破れるようなやつはそうそういないはずだっ

た。

箒で堂々と通りに降りる訳にもいかないので、里の近くに降下し、箒を手には街道から里に入る。

およそ一年半ぶりに歩く人里の様子は、まるで昔と変わっていなかった。人混みに賑わう商店街、忙しく走り回る商家の人々、買い物袋を抱えて歩く奥様、縁側で将棋を楽しむご隠居。はしゃいで路地を走りぬけてゆく子供たち。日も高いのに早々と暖簾を潜る飲兵衛達の赤ら顔。

一年半の不在など気にも留めず、里はつい昨日のこのように私を出迎えてくれていた。

「……………ふうん」

なんとなく、気に入らないものを感じながら、ゆっくりと繁華街の方へ向かう。良く見れば見慣れない煉瓦造りの洋風の店が増えていたり、二年前には珍しかった瓦斯燈があちこちに増えていたり、時間の経過を感じる場所があったけれど——これと言って目を見張るような大きな差異は見付からない。

通り過ぎる人たちが私を無視して、楽しみに、ある

いは忙しく追いぬいてゆく。魔法薬の効果であるのは分かってはいたけれど、なんだかまるで私一人が取り残されてしまったみたいで、嫌な気分だった。

「……ま、いいわ」

努めて明るく口に出し、ゆつくりと深呼吸。

里がどうなっているかが分かれば十分だ。元々戻りつもりなんてなかったんだし、今日の本来の目的を果たすことにしよう。

「つて、言ってもねえ」

わざわざ里にやって来たのは霊夢に代わって神社の宣伝をすることなのだけど、よく考えてみれば何をどうすべきかまで完全に丸投げされたので、私としてもどうしていいものか分からない。

そもそも、他人の神社の事にあまり一生懸命になつてやる義理もないはずなのだが、そこは魔法使いである私の謙虚さである。魔法使いたるもの、一度した約束と勝負の借りは正しく果たさなければならぬものだ。それに、あの神社もいずれは私のものになる予定だし。

「私は誰かさんと違つて怠け者じゃないものね」

しかし、まさかチンドン屋みたいに神社のビラをまく訳にもいかないし、私だってあまり目立つのはごめんだ。

「……そもそも、神社の宣伝つてどうすればいいのかしら？」

しばらく考えていると、ふと思ひ出されるのは、小さな頃に父様に連れられて見た鎮護祭の記憶。確かあの時、巫女様がやってきて、里のどこかにある社で何か儀式のようなものをしていたように思う。

「……確か、龍神様がどうこうと言つてたかしら」

結局、あれが何だつたのか、いまいち分からないのだけれど。このまま行くあてもなくぶらぶらしてるのも勿体ないし、まずはそこにでも、と歩き出したその時だった。

「——お嬢様、お待ちください！」

はつきりと耳に残る強い声に、思わず背筋が竦み上

がる。

忘れもしない。あの声は、妙だ。

私を叱る声に、地面に足の裏がへばりついたように動けなくなり、私は石のように硬直したまま、その場に立ち尽くす。

「お嬢様！ お嬢様つてば！」

けれど、その声は私のそばを通り過ぎ——

「亜里沙お嬢様！ お待ちください！」

「もう、早くしてちょうだいな、妙、のんびりしてたら日が暮れてしまうわよ！」

腰に手を当て、使用人を急かすのは——まだ5歳くらいの子さな少女だった。黒い髪を丁寧に梳いて、緑のリボンをした大正袴の可愛らしい女の子。

まるで見覚えのない、そんな彼女を追い掛けて、妙がお嬢様と呼んでいる。

相変わらずどんくさそうな妙は、脚をもつれさせて転びかけ、どんと私の肩にぶつかった。

「あ、ごめんなさいっ」

以前よりも大分背が伸びて、いまや立派な女性らし

い体つきになった妙が、小さく礼だけを言つて走り去つてゆく。

ここにゐる私には、かつて霧雨真理沙だった私には、気付きもせずに。

「さあ、競争よ妙、どっちがさきにお店に着くか！」

「ああん……もう、そんなに汚して！ 旦那様に叱られてしまいますよ、亜里沙お嬢様！」

妙は私のほうを振り返ることもなく、走り回る小さな『霧雨のお嬢様』を追いかける。

言葉づかいは多少丁寧なもの、私とそう変わらない、わがままで忙しい少女に、妙はだいぶ苦労しているらしかつた。

おそろしいものの風景なのだろう。里の誰も、それを見て微笑んでゐる。

「……あは」

自分でも笑えるくらい、乾いた声が、喉から絞り出される。何の事はない。こんなこと、考えておいてしかるべきだった。

父様は、母さまの他にも、たくさん外に女の人を囲

つていた。あんなに長いこと、滅多に家に戻らなかつたんだ。そこに、私以外の子どもが居たつて、全然おかしい事はない。

(……馬鹿みたい)

ああ。私はここに、何を求めてやってきたつもりだったんだろうか。私はとつくに、魔法使いの魔理沙でしかないのに。

これだけ時間が過ぎたあとでも、私の欠けた痕跡が、埋められることのない損失として、今なお嘆き悲しまれているとでも、本当に思っていたのだろうか。

「つ、……は、ははは、あははつ」

何年……何カ月、何日、だったのだろう。

この里で、私が、霧雨真理沙でいられたのは。

私が自分の勝手で、霧雨の家を捨てて里を飛び出したように、霧雨の家も、使えなくなつた娘の代わりを用意したんだ。

そうだ。自分で分かつてたことじゃないか。

もうあそこに、あの家に、私の居場所はない。

そんなこと、とつくに覚悟して、とつくに分かつて

たはずなのに。むしろ、早くそうなって欲しいと思っていたはずなのに。こんな苗字なんて、どうでもいいと思つていた、はず、なのに。

「……………はは、っ」

私がいなくても、私なんか居なくても。まるで初めからそうだったのだと言わんばかりに、人里は日常を繰り返していった。どこからか連れてこられた私の代わりをそっくり、霧雨のお嬢様に入れ替えて。

霧雨亜里沙というらしき少女が、最初からそこに居たのだと、最初から霧雨のお嬢様であつたのだと、当の私ですら錯覚してしまいそうになるほどに。平穩に、当たり前、ごく自然に、里の日常はそこにあつた。

彼女は、私よりもずっと、立派な霧雨のお嬢様なのかもしれない。

いまや私は森の悪霊にさらわれて、魂を奪われてしまったのだと噂されているのだった。

霧雨の家の、前のお嬢様については、居たことも定かではない怪談の一つとして語られ、すっかり顔触れの変つた子供たちがそれを畏れ、あるいは作り話だ

と馬鹿にして憤る。

……ああ。そういうことか。

私は、もう、とつくと——

「なあ、おい、お前！ お前、真理沙じゃないのか!!」

衝撃に打ちのめされていた私は、最初、それが私の名前を呼んでいるのだとはまるで気付けなかった。がくがくと肩を揺さぶられ、ようやく我にかえれば——目の前に驚いた顔の少年が一人。

おかしいな、今は魔法で、誰にも気付かれないようになつていはずなのに。疑問に思う私の前で、彼は私の眼を覚まさせるように名前を呼ぶ。

とても、懐かしい名前を。

「真理沙、やっぱり真理沙だ!」

ゆっくりと、思考が焦点を結ぶ。すぐ目の前にあるのは、ひよろりとした姿の少年だった。日焼けした肌と、汗ばんだ顔。使い込んだ様子の前掛けから、どこかの商家の手代だろうと知れた。

「……寅」

「どうしたんだよ、その格好……」

驚いた顔をする少年には、確かに寅吉の面影があった。

ひよろりと痩せつぽちだった身体は、私よりも頭一つは高く、がつしりと日焼けて肉が付き、顎の先にはわずかに髭も生えて、もう立派な里の若者の仲間入りをしているようだった。

あの頃、一緒になつて大人を困らせていた悪餓鬼だった頃の面影はもう残っていない。

使い込んだ前掛けと、固く太くなった指、逞しく太い腕。つま先のすり減った草履。きつと毎日、土埃をたてて街を走り回っているんだろう。

「やつぱり……お前、今までどこに行つてたんだよ!? 親父さんだつて凄く心配して、本当に大変だったんだぞ!? 神隠しにあつたんじゃないかって、里の人を大勢集めて、あちこち探して……慧音先生も随分遠くまで出かけて、今だつて探してくれてるのに……」

「……………」

「それにその格好……なあ、お前今どこに住んでるんだ? 里の外か? それとも他に——」

ああ。

……ああ。そうか。そうなのか。

上の空の私に、寅吉はあれこれとまくし立てる。今年丁稚奉公が明け、手代として霧雨の家で働き始めたのだとか、母が再婚して弟が出来たのだとか、妙が結婚して、もうすぐ子供が生まれるのだとか、リンノスケが独り立ちしたのだとか、色々。

その中にはさっきの霧雨のお嬢様——私の代わりになった亜里沙という子の名前は出てこなかったけれど、こいつのことだ、わざと話題にはしなかったんだろう。思い返してみれば、どんな時もそうだった。寅吉は、いつも私の傍に居て、私を不快にするような事は一度もなかった。

きつとそれが、こいつの——

「……なあ、聞いてるのか、真理沙!」

「……………」

「……真理沙!」

「うふふ、なあに?」

帽子のつばを下げて、私はゆっくりと唇の端を持ち



上げる。はつきり分かるほど、寅吉が動揺したのが分かった。

「お、おい、真理沙……？」

「うふふ。残念だけど、貴方の知ってる真理沙は、霧雨のお嬢さまは、もういないわ」

帽子で目線を隠したまま、私はそっと少年の傍に身を寄せた。大きな手のひらを掴み、厚い胸板に寄りかかるように、身体をぴたりとくつつける。ちろりと舌を覗かせ、くすくすと。赤い紅を引いた唇を、寅吉の耳元へ近づけた。

「っ!？」

分かりやすく顔を紅くする純情な彼に、私はもう一度笑う。少年の胸に身体を寄せて、その腰を引き寄せる。寅吉が手に取るように動揺しているのが少しだけおかしかった。

「私は魔法の森の魔女。……魔理沙よ」

口元を緩め、その耳元でゆつくりと囁いて、私は指先をぱちんと弾いて魔法の炎を上げる。ぱちぱちと燃える炎が、火花のような尾を引いて、寅吉の目の前を

くると踊る。

ぱあつと火花が弾け、一瞬の閃光を瞬かせた。寅吉が一瞬、目を閉じたのを確認し、私は箒を掴んで全力で空に舞い上がる。

ごうと風が唸り、商店街を吹き抜けた。綺麗に並べられていた売り物が吹き飛ばされて、俄かに騒ぎが巻き起こる。

「——さようなら」

「ま——」

待てよ。真理沙。

ぎゅつと目をつぶり、追いつがる声を耳の外に追いつ出して。私はありつただけの力を振り絞り、里を後にした。



そうして私は遅まきながら、父様がどうしてあそこまで魔法を忌避していたかの理由を知ることになった。今から百年も昔の事になるらしい。当時、博麗大結

界敷設後の混乱期の中をうまく立ち回って徐々に里のなかでも頭角を現していた霧雨の家でのことだ。

その年、例年になく大嵐が里を襲った。十日も二十日も暴風雨が吹き荒れ、まだ小さかった人里はその余波で大きな被害を受けた。里の近くにある小さな清流ですら積み上げた土囊を押し崩さんばかりに荒れ狂い、氾濫して橋のたもとにあった五軒の家を根こそぎ押し流した。

その原因が何だったのかは定かではないけれど、まことしやかに流れた噂が、里の誰かが龍神様のお怒りに触れたから、というものだったらしい。

雨戸を塞ぎ、明りもなく身を寄せ合った屋根の下、人々の間ではこの嵐を引き起こした張本人、龍神様を怒らせた犯人を探して囁きあつた。

あいっだ、こいつだ。いやあいっだ、あいっに違いない、憶測が憶測を呼び、噂は次の噂の元になって、いつしか里には静かな熱狂が渦巻いていた。

そんな時——霧雨の家の、まだ小さな一人娘がふとした隙に行方不明になるという事件が起こる。まだ一

人で歩けるようになって間もない小さな子供が、どういう訳か締めきられた部屋の中から忽然と姿を消していたのだ。

突如のことに、霧雨の家では上を下への大騒ぎとなつた。やれ神隠しだ、やれ誘拐だ、やれ妖怪が紛れ込んだのだ——あれこれと推測ばかりが先を走るが、娘の姿は遥として掴めなかった。

そうしてあくる日。何の前触れもなく、突如として嵐が収まつたのである。

それまでの暴風雨が嘘のように、空には晴天が広がっていた。人々は命永らえたことを感謝し、龍神様の慈悲に涙した。

結局、その嵐が自然のものだったのか、或いは神様や妖怪の手によるものだったのかは最後まで分からなかったのだけど、嵐の最後の日に行方不明になった娘と、突如晴れ渡った空を結びつけて考えない者は居なかった。

まだあどけない霧雨の一人娘が、自らをもって龍神様のお怒りを鎮めたのだ、ということにされてしまつ

たのだ。霧雨の家は、嵐を読んだ張本人を育てた家という誇りと、身をもつてその嵐を沈めた潔さを称える尊敬を集め、なんの脈絡もなく周囲から特別視されることになった。もしもこの行方不明事件の真相が、本当に一人娘を生贄にして嵐を鎮めたという顛末なのであればともかくも、それはさぞ当惑と、微妙な心情を生んだことだろう。

それに耐えきれなかったのが、娘の母親だった。

気付けば自分の娘が龍神様の生贄にされ、果ては嵐の原因であつた事にされてしまったのだ。その嘆きも怒りも並大抵のものではなく、彼女はひたすらに荒れ、暴れた。娘を返せと龍神様の像に怒鳴り、しがみ付き、拌み倒して供物をささげ、果ては石や泥をぶつけて憤る始末。

そうしていつしか、彼女は失われた一人娘を取り戻さんと、怪しげな魔法に傾倒してゆく。長い髪を振り乱し怪しげな呪物を集め、部屋に閉じこもつて魔法の研究に明け暮れる彼女に、どうかもうあの事は忘れろ、あれは事故だったのだと諫める者は多かつたけれど、

それはもう彼女の耳には届いていなかった。

あまりにも理不尽に娘を奪われたことに、それを成り立たせてしまったこの幻想郷という世界の在り方に、彼女の怒りは激しく燃え盛った。

そして彼女はある日、突如の雷鳴と暴風を呼び、里から姿を消したという。

彼女に隠れて、娘を罰あたりだと呼び、蔑んでいた者達をその手にかけて。

呪いが凝つてついには人ではなくなってしまったのか、その嘆きが本物の化け物と呼ばれたのか、魔法の実験が失敗したのか——もはや当時を知る者はおらず、真相は闇の中だ。

しかしその日から生まれた霧雨の魔女は、この幻想郷を脅かし、傷つけ、呪い続けた。見境なく呪いを撒き散らし、嵐と雷鳴を引きつれて幻想郷じゅうを暴れ回るようになった彼女を、さしもの博麗の巫女も看過できなかった。間もなく巫女によって魔女は討伐されたという。

しかしそれでもなお、彼女の悪意はなお強く残り、

瘴気となつて何度も災いをもたらしたとされる。

——以来、霧雨の家ではなによりもこの魔女を恐れ、忌み嫌われ、二度と過ちを犯さぬ様にと、魔法に触れることはなによりも忌まわしきこととされていた。

私は、あろうことかそれに触れてしまったのだ。それが何を意味するのかも分からないまま、母さまを呼び戻そうとしてしまった。

それが父様の目にどう映つたか。考えるまでもない。元々家の外から婿入りした父様は、なによりも霧雨の家の当主に相応しくあろうとしていた。だからこそ、私の魔法への傾倒を決して看過できなかったのだろう。きつと何もかもくだらない偶然であつても——

霧雨の魔女は、忌まれるべきものなのだ。



真実を知つてからも、私の毎日はそう変わるものではなかった。魅魔様の元で修業にいそしみ、たまに出かけて霊夢をからかい、湧いて出る妖怪達を退治して

回る。

そんないつもと変わらない、魔法使い魔理沙の毎日  
は続いていた。

——続いていた、はずだった。

「変よ。こんなの、絶対おかしいわ」

空の上。箒を握る手が軋む。

その日はなんだか胸がむかむかして、どうにも気持ち  
ちが落ち着かない。イライラと蹴飛ばす地面は空の上  
には無く、いきおい箒の速度が増す。

あれから時々、里のことやお店のこと、置いてき  
てしまった妙やリンノスケのことを思い出したりして、  
わけもなく暴れたくなる事があつた。わけもなく寂し  
くなつて、泣いてしまつたりすることもあるけれど。

今夜のこの気分は、それとは別だ。

詰まらない負け惜しみだと、こんなくだらないこと、  
魔法使いの寛大さで受け止めてしまえと考えようとし  
ても、胸の内に膨らんだ疑問は、苛立ちは、どうして  
も押し隠せない。

頬が痛い。砂に擦りつけた擦り傷みたいにじくじく



いるうちに、霊夢がおぎなりに繰り出してくる追尾呪符や封魔針を避けそこねて、私の負けになるのだ。

記録を取っているうちにそれに気付いて、私は慎重に霊夢の攻撃を避ける事に集中してみた。改めて観察してみると、霊夢の攻撃は実にやる気がなくて、無造作に呪符や針を放ってくるだけ。攻撃に強弱の波や硬軟の攻め筋もなく、フェイントも戦略もほとんどない。なにより、一番大事だとされる美しさにも欠けていた。だから、霊夢の攻撃はしっかり見定めていればそんなに苦労せずに避ける事が出来た。

けれど、私がそれより何倍も苦労して、考え込んで繰り出した魔法を、霊夢はやっぱりふわふわと避け続ける。そうしていつしか、私の方が魔法を切らして疲れ切ってしまうか、油断して霊夢の攻撃に当たってしまう、負けか引き分けになるのだ。

つまり、

この遊びで、霊夢はわざと負けようとしなければ、絶対に私には負けないのだ。ただの遊びのはずなのに、それはすごく不平等な気がした。

いや、もちろんこんなごっこ遊びじゃなく、本当の魔法を使って戦えば、私は霊夢なんかにはひけはとらないはずだし、今日だって引き分けで負けてなんかいいけれど。

それに、気付いてしまったことはもう一つある。私は魔法使いとして戦うのに、魅魔様の力を得ている。それなのに、あいつはどうして、巫女のくせに神様を呼んだり降ろしたりしないんだろうか。霊夢はただの身一つで、私に勝ち続けているのだ。

「あいつになんか、負けたくない、のに」

どうにも落ち着かず、私はとうとう飛ぶのを諦めて、森の上に着地した。邪魔な箒を引きずり、ふらふらと夜道を進む。魅魔様のお屋敷までは、まだ遠い。

お札の直撃した頬がひりひりと痛んだ。とっておきの魔法を繰り出した瞬間、霊夢の追尾呪符が脇からすり抜けるようにして飛び込んだきたのだ。呪符におもいつき顔を引っ叩かれて、私はその場に倒れ込んでしまった。

『……大丈夫？』

撃墜の衝撃に呻いて目を開けると、やって来た霊夢が私の顔を覗き込んで心配そうにしていた。

不覚にもその時、私は涙ぐんでしまったのだ。悔しいのでもなく、哀しいのでもなく、わけもなく溢れだそうとした涙は、私の心が霊夢への屈服を認めてしまった証のようで、できるなら今すぐにでもぐりぐりと墨で塗り潰してしまいたい記憶だった。

「負けたくない」

霊夢なんかには、負けたままでいられるもんか。

そうだ、私はあいつに勝たなくちゃいけない。言葉にするとその思いは一層強くなった。

あいつになんか負けない。巫女は敵だ。魔女の天敵だ。私は強い、だから、負けない。

——何をしたって、勝たなくちゃいけない。

(……あれ?)

どうして?

その四文字がふと脳裏をかすめる。どうして私は、

あいつに勝たなくちゃいけないんだろう。最近是一緒にお昼を食べることもあった。決闘ごっこはなんだかんだで面白いし、一緒に異変に向かうのも楽しかった。

霊夢はなんだかんだいい奴で、無愛想でぶっきらぼうだけど、私の勝負にはいつも付き合ってくれて、終わったら一緒にお茶を飲んで、それで——

ちりり、と思考をノイズが掠める。火花が散るような、小さく燃える目が、ちくりと頭の中にわずかな痛みを感じる。

なんだろう。

大事なことを、わすれている、ような。

思いだそうとしても、そこから先は真夜中の底なし沼のように黒く凝ったなにかに遮られて、窺う事が出来ない。

「……………」

魔女帽子を押さえて、ふるふると首を振る。喉の奥に小骨が引つ掛かったみたいなの、不快感。吐き出したいのにも出てこないような違和感。

私はいつたい、何を忘れて——いや、私は何を思い

出そうとしているんだろう。

「霊夢、に」

そうだ。私は霊夢に勝ちたい。

それはどうして？ …… 霊夢に負けたくないから。

なんだ、簡単だ。私は霊夢になんか負けたくない。

だから勝ちたい。単純なことじゃないか。

…… あれ、でも、じゃあどうして負けたくないんだ

ろう。負けたくないってことは、勝ちたいってことで、

だから……

「つゝ……ッ」

ぐるぐると堂々巡りの定まらない思考。尻尾にじゃれてその場を回り続ける仔犬みたいに、愚かしい思考。ぼんやりと熱があたまをぬるま湯に浸しているようで、気持ち悪い。

がりがりと引つ搔いた指に、数本、髪が絡まってふちふちと抜ける。この前染めたのはいつだっけ。根元からすつかり、金の地色が見えてしまっている。

くせつ毛なので分け目は見えないから誤魔化しやすけれど、また染めなきゃいけない。

金髪なんかみつともないから、早く、別の色にしなくちゃ。

「違うわ、これは、母さまの髪の色よ。嫌なんかじゃ」嫌なんかじゃない。…… ない、はず。

夜道を歩いて帰る間、ぐるぐるとその事を想い巡らせていたけれど。結局その忘れていた事が何なのか、思い出すことはできなかった。



その年の出来事は、多分それまでに起きたどんな異変よりも、派手で大規模なビッグイベントだった。これまでにも時空を渡る自称・天才科学者の教授とその助手がやってきて世界が何重にも重なったりした騒動とか、夢と幻の世界に住む妖怪がやってきて、寝ぼけながら幻想郷を踏み荒らしたりとか、大騒ぎには事欠かなかったけれど——今回のそれはちよつと桁が違う。なにしろ、博麗神社の裏庭にぽっかりと、魔界への穴が空いたのだ。



魔界。……そう、魔界だ。

この世界よりもずっと魔力に満ち、膨大な魔素にあふれ、果ての知れないほどに広大で、因果と常識がひっくり返った生物がひしめき、計り知れない力をもった悪魔、魔神達が暮らす場所。

魔界の植物の種や、魔物の牙なんかはほんの切れ端だけでも驚くほど貴重なものとして取引されている。魅魔様のお屋敷の宝物庫のなかでも、とりわけ強力で危険なマジックアイテムは、みんな魔界で製造されたものののだ。

そして、何よりも魔界は魔法使いにとつての憧れの地でもあった。魔界で修行することで、魔法使いは人間の器すら超越して、強力な力とそれに相応しい身体を手に入れる事ができるという。

その話を魅魔様に聞かされて以来、私はずっと魔界に行きたいと思っていた。

長い期間の界外留学や修業は難しくても、魔界の草木や動物たちから魔法薬の材料を集めれば、それだけで私の魔法はもっともっと上達するはずだった。

無論、魅魔様もこのビッグイベントを黙って見逃すはずがない。霊夢が神社裏手の〈門〉から魔界へ向かったと私から聞くと、すぐさま腰を上げたのである。

「——行くよ、魔理沙。付いてきな」

「はい、魅魔様」

私も準備万端を整えて、ただちに魅魔様と共に魔界に向かった。それからなぜか、幽香のやつまでも後を付いてきた。なんでも究極の魔法とかいうものに興味があるらしい。今更あいつが魔法を勉強し始めた理由がよく分からないけれど、とりあえず用心をしようと心に決める。

本当は霊夢に先回りして魔界に入りたかったけれど、既に〈門〉の周辺には魔界から溢れだした化け物たちが山とひしめいていて、一歩先を越されてしまった。

群がる有象無象を蹴散らして、〈門〉をくぐれば——そこはもう、未知の魔法に満ちた異邦の地だった。

「……思ってたのより、随分殺風景な所なのね」

魔界は、私が思い描いていたような、三精四季五行の色彩に溢れた豊かな世界とはまるで違っていた。

ほんの数分前に天と地に分かれたような、荒廃した赤茶けた大地、黒雲と雷鳴渦巻く空。呪詛に汚染された赤い砂嵐が吹き抜けて山を削り、果ても見えない大海の黒々とした波濤は数十メートルも渡って波飛沫を上げる。

幻想郷なんて比べ物にならないくらい広大で広範な世界には、息をするのも苦しいぐらいの濃い魔素と濃密な魔力に溢れていた。そこに生きる生き物たちは、厚さのない猫やら騙し絵みたいな鼠、白なのに黒い鴉空を飛ぶ鯨に地面に潜る蝶々と、どいつもこいつもヘンテコなやつらばかりで、見ているだけでも頭がおかしくなりそうになる。

そんな大地の果てには、夜になつてもばかりと浮かんだままの赤い太陽と、空に届かんばかりのきらきらと輝く水晶の柱があった。

「あれが連中の本拠地かい」

ぶちのめした魔界の住人から、魔界の神様が住むという宮殿、水晶宮のありかを聞き出し、魅魔様はにやりと凶暴な笑みを浮かべる。普段は滅多に見ることの

ない、悪霊の本性剥き出しの魅魔様だ。

荒々しくも若い生命の力に満ち溢れた大地。特に、魔界特有の濃い魔素は魅魔様にはとても心地いい場所のようだった。

「んん……こいつは良いねえ。噂にや聞いてたが、こりやあ想像以上によく馴染むよ」

魅魔様が大きく伸びをして、星を象ったステッキをくるりと回すと、その背中にばさりと一対の大きな翼が現れた。蝙蝠に似た翼は、魅魔様が公爵級以上の神格をもつ魔神であることの証である。

その証拠に、押し寄せる魔界の軍勢——鋼の兵隊やくるくると光の尾を引く造魔達を、魅魔様は杖の一振りで塵も残さずに消し飛ばしてしまった。

「ふん。悪くないねえ。久々に全力で戦えそうだ！」

悪霊である魅魔様は、もとより強大な力を持つけれど、封印によってその根源となる悪意や恨みを補充する術を失ってしまっている。つまり魅魔様は力を使えば使っただけ、その力の総量を失ってしまうのだ。けれど魔界でならば濃い魔素がそれをすぐに補うので、

力の減衰を考えずにフルパワーで闘うことができるのだった。

言葉通り、魔界を往く魅魔様の進軍は、まさに圧倒的だった。閃光が空を穿てば雲を消し飛ばし、大地を叩けば山を根こそぎ切り刻んでゆく。赤い眼球のひしめく右眼は、その邪視の力をもってあらゆるものを支配し、蹂躪する。霊体にたっぷり魔素を吸って実体をつくり、かつてのすらりとした長い足を取り戻して、魅魔様は高らかに笑う。

地形すら一瞬で変えてしまう大悪霊の力に、私は興奮と共に背筋を震わせた。

「すごいわ……!」

魅魔様はやっぱ最強の魔法使いだ。誰にも負けないう最強の、神様なのだ。

「うふふ。私だつて負けてられないわ!」

私はこの日の為に用意した銀の煙管に、煮詰めた固形樹脂を押し込み火打ちの魔法で火を付ける。吸い口に口を付け、ハルシゲシの煙を胸一杯に吸い込んだ。強烈なハーブをミックスした魔女香の効果が、煙から

血管に溶け込んで全身を駆け巡る。

一気に意識が吹き飛び世界が加速し、私の全身に魔法を漲らせた。

「うふふ。かかつてらっしゃい、小鳥さん!」

二百を超える魔法の鏃が、流星の如く空をかける。音速で飛ぶ魔法の矢は、全て狙いを絶対に外さない追尾弾だ。魔界の化け物たちが鏃に射抜かれ、次々撃ち落とされてゆく。

幻想郷の妖怪に比べると、魔界の連中は確かに手ごわかったけれど、もはや私の相手ではなかった。魅魔様の元で力を付けた私は、魔界においても有数な魔法使いに成長していたのだ。

全員が生まれながらの魔法使いだという魔界人たちが率いる鋼兵団の包囲を抜け、そこらじゅうから湧いてくる護衛の小悪魔や造魔を撃ち落とす。完全武装の兵団ですら、私の魔法に射抜かれて次々打ち倒されていく。

いまや敵の攻撃は蠅のように鈍い。魔女香の煙はひと吸いごとに私の神経を研ぎ澄ませ、極彩色に彩られ

た視界は万に迫る弾幕の全てを捕えきることができる。魅魔様直々に鍛えて貰った射眼は、魔女香の薬効によつてさらに何倍にも増幅され、鋭くなつていた。

「うふ、うふふ、うふふ……みつともないわよ、あなたたち。仮にも魔法の本場、魔界の魔法使いなら、もつと優雅にいかなくちや♪」

魔香草を詰めたパイプに火をつけて、たつぷりと煙を胸に吸い込み、ぷはあと吐き出す。

後先を考えない魔法の連続使用でわずかに来た指の震えはすぐに治まり、忍び寄つていた疲労も吹き飛ぶ。すうっと頭の重みが消えて、視界はより澄んで広くクリアに。無数の弾幕の一つ一つの動きが、数秒後の光景まで含めて手に取るように見えてくる。

魔界の門番やふらふらと鬱陶しい見張り役を蹴散らして、目指すは魔界の中枢。天に向けて突き立つ水晶の塔に進路を取れば、荒廃していた紅い大地が途切れ、見上げるような高層の建物や見たこともないほど賑わう街並みが見えてくる。

暗い魔界の太陽を受けて、魔法の輝きを煌々と灯す

街路に、いまや魔界の神様の居城、水晶宮殿は手を伸ばせば届きそうなくらいにまで迫つていた。

快進撃を続ける私の前に、小さな姿が躍り出てきたのはその時だった。

「そこまでよ！」

警告と同時に、次々飛び出してくるのは身長三〇センチほどの人形たち。剣を握つて盾を構え、銀色の胸当てと手甲脚甲で武装した、小さな騎士団だ。

戦列を組んで私の行く手を塞ぐ人形たちの中央に、綺麗な顔の女の子がいた。

「外界の野蛮な魔法使いめ！ これ以上の乱暴は許さないわ！ ちょっと腕が立つからって、調子に乗るのもここまでよ。私が出てきたからには、もうこれまでみたいに行かないんだから！」

「ふうん、あなたも魔法使いなの？」

箒の柄を巡らせて問えば、その子はつんと顔を横に向けて威張つて見せる。

「そうよ、外界の魔法使いはずいぶん野蛮なのね。挨拶もできないなんて」

「あら、それなら鏡を見た方がいいわよ？」

「つ、減らず口をいうなあ！」

アリスと名乗るその子は、私よりも年下のように見えたけれど、外見からは想像もつかないくらいとても強力な魔法を使ってきた。お供に引きつれた人形の騎士団達を見事に指揮し、彼女たちと連携を組んで攻撃してくる。

さすが魔界、こんな魔法使いもいるのだなと少し面白くなった。私も等を加速させ、紫煙の立ち上るパイプをくわえて、すうと胸に煙を満たす。迫りくる人形の騎士団達の槍を掻い潜り、指先に灯る魔力光を天へと投げ上げた。

「うふふ、じゃあこれよ」

私が呪文を唱えて指をさすと、魔界の黒い空に無数の輝きが喚起された。私を太陽として中心に据え、宙天に満ちる星々の輝き。七耀の巡回と運航を司る七つの惑星軌道が顕現する。

魔法渾天儀。

魅魔様の魔法をもとに私が組み上げた、とっておき

の大魔法だ。色とりどりの輝きが流星になって飛び、七重になって重なる惑星軌道が、旋回する光弾を伴いアリスの人形をたたき落とす。

焦りをにじませてアリスも反撃を繰り出すが、天球儀はたとえいくつだろうと停まることはない完成されたシステムだ。一つの惑星を撃ち落とされたところで配置を変え、安定を保って陣形を組み直す。

ソーラーシステムを展開しながら同時に私が放つ魔力の鎌は、アリスの張り巡らせた障壁をみごとにすり抜け、次々と面白いように直撃した。

彼女もなかなか奮戦したけれど、天宮儀をつくる三つ目の光球を砕いたところで、人形たちが力尽きてその場に倒れる。

「うふふ、あはははは！」

ああ、ああ。見たか魔界の未熟者め。これが魔法だ。これが魔法使いだ。そして凄いい、素晴らしい。さすが魔界。わたしはさらにつよくなった。今なら不可能なんかない。なんでもできてしまう。

なにかも楽しくてたまらない。呼び出した力を

次々に放ち、生意気なアリスに叩きつけ、あちこちにくるくる火花を散らして踊る魔素を捕まえてばかりと飲み込む。緑の魔素はしゅわしゅわと喉で弾けるソーダみたいな味がした。

「——なによ、これ、何の冗談なの!？」

「うふふ。これがあなたの知らない外界の魔法よ」

「魔法？ 魔法ですって？ そんな魔法でもなんでもないわ！ あなた、さっきから呪文も、ハンドサインも、魔法陣も全部、全部、デタラメじゃない！ ちゃんと勉強もしてないくせに、魔法使いなんて名乗らないでほしいわ!」

「あらあら。負け惜しみはみつともないわよ?」

「うるさあいつ!」

苦し紛れとはいえ、失礼な事を言ってくる子だ。

喧嘩をふっかけてきたのは向こうなのだ。手加減なんかしてやる理由はない。

私は次々と魔力光を呼び起こし、アリスに立て続けに浴びせかけた。ちっこい身体でしぶとく耐えるアリスだが、それでも容赦なく魔法の直撃が彼女の力を削

つてゆく。

「つ……ううう!」

耐え切れなくなつたアリスは、新しく呼び出した人形を補助にして、大きな銀色の鏡を張った。揺れる水銀の水面のようなそれが、私の魔法を受け止め、こちらへと弾き返してくる。

純粹鏡面、アリスミラー。防御と反撃を同時に行う反射膜だ。いかなる魔法であろうと、受け止め弾き返す高度な魔法——のつもりなのだろう。けれど私は額の『眼』を開いて、すぐにそんなたくらみは看破していた。

反射膜の制御には大きな力を使う。アリスは人形を使つてその補佐をし、実用化させているようだったけれど——どのみち長時間持続させることは無理だ。自動での反撃すら可能にする完璧な防御を無限に続けられているのなら、アリスはこんな所で一介の魔法使いに甘んじている事は無いはずだった。

案の定、アリスの展開していた純粹鏡面は程なく制御を失い、消失した。反射膜の途切れた隙を狙つて距

離を詰め、両手からありつたけの魔法を撃ち込む。

両手足を魔法の鏃に貫かれ、アリスの悲鳴が水晶宮にこだまする。

「っ、どうして、あんたなんか——」

「あなたみたいなお子ちゃまには、私の使う魔法は高度すぎて分からないのね。ごめんなさい。もつと勉強してからなら、教えてあげられたかもしれないのに」

そうだ。私は魔法使いだ。森の悪霊魅魔に師事し、莫大な力を得た魔法使い、魔理沙だ。

迫る私に、咄嗟に魔法盾を張って防御を試みようとするアリスだが、もはやとつくに限界なのか、可愛そうなくらい力が持続しない。ぱきぱきとアリスの防御魔法が砕け、少女の姿は炎と光に飲み込まれた。ボロボロの人形たちがアリスの身体を、辛うじて近くにあった遮蔽へと投げ込む。

「うふふ、ふふ、あははは!!」

ああ、これが私の魔法だ。あらゆるものを押し潰し、蹂躪する私の魔法。どんな宿命も運命も押し通り打ち砕く、万能の力だ。

誰にも負けない、最強の魔法。それが今確かに私の手の中にある。

誰も私を妨げられない。

偉大なる力、星をも支配するアルス・マギカ。

手に溜めた力を掲げ——まっすぐに。

私の叫びは、これまで以上の大きな力を喚起した。

「さあ、これでとどめよ、アリス!」

白の輝きが空を満たす。連鎖する魔法の閃光が十七の輝きになって、アリスの隠れた建物を蹂躪する。魔界に溢れる魔素は、私の魔法にも複雑に作用し、とても強くしていた。巨人が暴れながら何もかも打ちこわし踏み潰したみたいに、魔界の地形がえぐれていく。幽香のまねつてのがちよつと癪だけど、この魔法はなかなか気分がいい。

「そんなことないわ! 私は魔法使いよ! ヴィヴオニッチ手稿もクオラ天讚議も十大四則原論も闇の魔術への防衛論も、全部ちゃんと原文で読んでるのよ!」

「——あーあ、魔界って魔法のメッカだって聞いてたけど、よっぽど遅れてるのね。一つも聞いたことないわよ、そんな魔術書」

「はあ!? 知らないってどういうことよ!? あなた、本当に魔法使い!?!」

いよいよ頭に来たというように怒るアリスに、私は黙って首を竦める。こりゃあ本当にお手上げって奴かな。呼び出した魔法を叩きつけ、反撃を全て防御魔法で食らい尽くす。魔女香の香を胸一杯に吸い込んで、不思議と口元に笑みがこぼれる。

「うふふ、さよなら、小さな魔女さん」

もはや、進軍する私の先に、敵なんていなかった。



騒動の発端になった魔界の神様を叩きのめし、魔界へ繋がる門となった穴は塞がれて一件落着となった。

巨大な白黒の六翼を広げ、創世の力を振るった魔界の神、神綺とその忠実な従僕の夢子。魔界の中枢を占

める二人は、それまでに戦った魔界人に比べてもさらに強力だった。流石の私も二人と一緒に相手することはできなくて、メイドだけを相手にせざるを得なかったくらいだ。

けれどそれも作戦。私が魔界最強の従者を引きつけている間に、魅魔様が魔界の神様と一對一の勝負に持ち込み、正々堂々叩きのめしたのだ。

私がメイドを倒して水晶宮の執務室に辿り着いた時には、もう戦いは終わっていた。

「うう……夢子ちゃん、平気?」

「不覚を取りました……」

並んで転がるメイドと魔界の神様に、私は満足一杯で大きく伸びをする。

「うふふ、残念だったわね、霊夢。今回は私達が一番乗りよ」

「……そうね。まあ、神綺も反省してるみたいだし、これ以上魔界から魔物たちが頭界に出てこないならそれでいいわ」

私はかつてない自分の戦果を見せつけてやるつもり



だったのだけど。

遅れてやってきた霊夢はと言えば、神綺に今後の魔界の不干渉だけを約束させると、悔しがるでもなく、さっさと帰って行ってしまったのである。

結局、この約束は守られなかった。神綺は魔界の最高統治者の権限で外界との行き来を禁じたものの、魔界の企業にそれを徹底させるための規制を取って作らなかった。ほどなく魔界の旅行業者たちがぞくぞくとツアーを組んで〈門〉を超え、幻想郷に繰り出してゆくこととなり、この混乱は半年くらい続いたのである。

さて。それはともかく魔界に残った私と魅魔様は、それからしばらく魔界観光を楽しむ事にした。収穫は絶大で、魔界でしか手に入らない貴重なマジックアイテムや触媒もたくさん手に入れる事が出来たし、見たこともない悪魔や魔神達と知り合うこともできた。

魔界の造物主である神綺を倒したことで、私達は魔界にある全てのものをアンティとして自分たちの財産にする権利を得ていたのだ。

もつとも、いくら価値ある魔界の宝物とはいえ、そ

の全部を一切合財根こそぎ持って帰ることはできないし、魅魔様もそれを望んではいなかったの、我ながら大分遠慮していたと思う。あとをくつついて来ている魔界の案内役が可哀想なくらいに泣きそうになっていたのも、少しばかり気がとがめたし。

私のしたことと言えば精々、魔界のゴブリン達が運営する国立銀行の金庫から欲しかったヒヒイロカネのインゴットを十本ばかり失敬した程度だ。

魔界の観光地はどこも面白かったけれど、なかでも私が特に気に入ったのは、魔界の大図書館だった。水晶宮の一角に設けられた図書館は、地上一階、地下六百六十六階の歪な建物である。まるでさかさまの塔のように、中央を吹き抜けになった書架の迷宮が地の底までも続いていく姿はまさに圧巻。

そしてこの深い書庫の底は、ヴワルという本の異界に繋がっているらしい。さすが魔法の本場、魔界の大図書館である。

本の魔界を支配する組織、〈大法典〉に忠誠を誓い、学派に属する書工や司書を務める悪魔たちに案内され

て、私は滞在期間中のほとんどをこの大図書館に入り浸った。

これまでに見たこともない珍しい魔道書、一級の禁書指定を受けた魔術書が、ぎっしりと詰まっていた。中には図書館の防衛機構として、ひとりで動いて魔法を使ったり、表紙や葉の役目をする使い魔の疑似人格を宿した本もあった。

あちこちの本棚を漁ってはめばしい本を鞆に放り込み、また次の書架へと向かう。一日かけて集めた本を水晶宮にある自分の部屋でじっくりと眺め、また翌日には図書館の中へ。

そんな毎日が続けていたある日のことだ。

今日の収穫を抱え、使い魔にも持たせて水晶宮の自分の部屋に戻る途中、私は魔界の宮殿の一角に見覚えのある顔を見つける。

「——幽香？」

あの緑のくせつ毛と、場にそぐわない日傘は間違いない。夢と幻の館に住む妖怪は、図書館の端っこで、部屋の中だというのに日傘を広げ、ぼつんと一人所在

なげに本棚を眺めている。

なるほど確かに、あいつも魔界にやって来ていた筈だったけれど——いままで姿を見ないものだから、とつくに諦めて帰っていたのだと思っていた。

そもそも、幽香はロクに魔法なんて使えないはずなのに、一体ここに何しに來ているのだろう。不思議に思つて、私は使い魔を引き連れ幽香の元に駆け寄る。

「ねえ。幽香、あなたもこの本に興味があるのかしら？」

「……………」

せっかく声をかけてあげたというのに、幽香はじつと本棚を見つめたまま動かない。

多分、私と顔を合わせたのが気まずいのだろう。わざわざ魔界にやって来たというのに、結局何もできないうちに異変が終わってしまうことになったわけだから。意気込みを空回りさせてしまったのはすこし気の毒に思つたけれど、まあ、私と魅魔様が一緒に挑んだ以上、他の連中に出る幕がないのは当然と言つていいだろう。

とは言え、別に私だって幽香をのけものにしようと思ふほど心は狭くない。偉大なる魔法使いとして、真理に繋がる智慧を求めるものは寛大に受け入れてあげてあげべきだった。たとえ、その目的が究極の魔法なんて幼稚なものであったとしても。

図書館にぎつしりと詰め込まれた本を示し、幽香を呼ぶ。

「ねえ、あなたにもこれ、見せてあげても良いわよ」

積み上げられた収穫を見せつけ、ふんと胸を張って見せる。

「あっちにもいっぱい魔術書があったわ。究極の魔法だったけ？ あなたが探してる魔法って言うのもここにあるんじゃないかしら」

どうせ、意地を張ったせいで、私達の話に入ってこれなくていじけているくらいだ。ちよつと悩んでから、ありがとうとでも言つて私に感謝するだろう——そう思つていたのだけど。

幽香は日傘をくるくる回しながら、つかつかと私の前に歩いてくると、私を見降ろすようにぴたりと脚を

止めた。

「……な、なによ」

こうして見ると、こいつは随分私より背が高い。光のない深い碧の眼でじつと見降ろされると、わけもなく心の中を見透かされているような気分がしてくる。

そのままじつと、私の顔を失礼にもじろじろと覗き込んで、

「ふうん」

幽香はくすりと口元を緩める。ちろりと覗く紅い舌が、艶めかしく妙に印象に残った。

笑われたことにむつとする私が抗議を叫ぼうとするよりも先に幽香はふんつと鼻を鳴らして見せる

「魅魔も、面白いことをするのね」

ぼそりと興味なげにそれだけ言うのと、幽香は唐突に私に背中を向けて歩き出した。もう、このことなんでもうでも良くなつたといわんばかりの態度。私の疑問にはひとつも答えず、お礼も言わないままだった。

「なによ、あいっ……」

ぞんざいな扱いを受けた事にむかついて、ばんばん

と床を蹴る。

けれど――胸の中にはちくりと、妙な不安の茨の棘が残っているような気がした。



それからしばらくして。

「出てきなさい！ ひきよう者！」

お屋敷の前で騒ぐ甲高い声に、私はのろのろとベッドから這い出した。

魔界から戻って二週間余り。ようやく荷物をほどいて平凡な日々に戻ったところだ。

魅魔様がちょうど留守ということもあって、私はこれ幸いと夜更かしをしていたところだったので、実に虫の居所は悪かった。

「もう、なに……？」

不機嫌にまだ眠い目を擦りながらそつとカーテンを押し開け、窓の外を窺う。

「――あら」

ドアの前で腰に手を当て、ふんぞり返って叫ぶのは、見覚えのある金髪に青いリボン姿。

魔界で会った小さな魔法使い、アリスだ。

前回こてんぱんにやられた事は都合よく忘れたのだろうか。威勢良く叫ぶアリスの手にはどこから持ち出したのか、嚴重にベルトで封印された大きな魔術書があった。隣では二体の完全武装の人形が、護衛よろしく剣を構え、アリスを守るように宙に浮かんでいた。

「この前はよくも馬鹿にしてくれたわね！ 今度こそ負けたりしないわ、さあ、出てきなさい、勝負よ、魔理沙！」

挨拶もせずいきなり勝負だなんて、やっぱり礼儀のなっていない子だ。

主人の意に応じるように人形達が構えた剣を振り上げる。このままだとドアを破つてでも突っ込んできそうだったので、私はしぶしぶ顔を出すことにした。ぺたぺたとスリッパを引きずり、寝巻のままドアを押し開ける。

おひさまの光がまぶしく照りつける。寝不足の頭に

はやつぱりきつかった。しよぼしよぼする目を擦り、ふわあと大欠伸。

「なによもう……うるさいじゃない」

「のこのこ出てくるなんていい覚悟ね魔理沙。とうとう見つけたわよ！ こんな森の中に隠れ潜んでるなんて、やつぱりあなたは悪い魔法使いなのね！」

自信たつぷりに指を突き付けてくるアリス。人形たちがそうだと声を上げる。

「さあ、勝負しなさい！ 言っとくけど今回は本気よ。」

この〈アリスの魔道書〉があるんだからね！」

「わかった、わかったから、ちよつと待って……」

きんきんと高い声がぼんやりする頭の中で跳ねまわる。痛む頭をすつきりさせるため、私はテーブルに置きっぱなしにしていた魔女香に火を付けて、その煙を胸一杯に吸い込む。すぐに立ち昇る香りにふわりと心が高ぶり、意識がすつと覚醒した。

ふうと顔を拭い、あらためてアリスに対峙する。彼女はまるでスタート地点に着いた競走馬みたいに、いまかいまかと開始の合図を待っているみたい。いまに

も飛びかかってきそうにこちらを睨むその様子は、この前余裕ぶっていた時とは別人のよう。

「アリスの魔道書ねえ。……自分の名前を付けるなんて、ずいぶんカッコつけるのね」

「ちがうわ。そんなお子様の本と一緒にしないで！ いいこと、これはね、魔界の至宝なのよ!! 虚空に存在するヴール書庫から無限の蔵書を転送できる魔神経巻と並び称される、大法規則で禁呪と封印指定の魔法ばかりを集めた魔界最高の魔術書なんだからね。これがあればあなたなんか、十秒でバラバラにしてあげるわ！ トーストを焼くよりもつと簡単にね！」

「ふうん」

ちらりと片目をつぶり、思案しているふりをして額の『眼』を開き、観察する。

確かに、アリスの持っている魔術書から、そこいらのものとはケタ違いの魔力を感じる。まだ広げるところか封印の分厚いベルトも解かれていないのに、私のコレクションである魔術書数百冊から、一番力のあるページだけを切り抜いて全部重ねてしまったような気

配と言えはいいのだろうか。魔界最高というのもあながち嘘じゃないかもしれない。

「いいわ、やりましょう」

でも、魔界の神にすら勝った私に、もはやそんなものが通じるとは到底思えなかった。

手早く身支度を済ませ、黒のローブに着替えた私は愛用の箒に跨って、アリスに応じる。決闘の場はいつものようにお屋敷の裏庭だ。

お互いに決闘の条件となる符数と残機を競り合い、勝負は二死七符の大一番となった。

「――魔界の神の名において、死の少女」アリスが地上の魔法使いに挑む！」

「……あらあら。そんなに強がっちゃって」

「魔術決闘の名乗りくらい応じなさいよ、これだから外界の魔法使いは……！」

アリスの憤りと共に、彼女が魔道書の封印を解くと、手にした本から七色の魔法が溢れ出した。輝きとともに地上には不足する魔素を滝のように吐き出し、虹を模した七種類の魔法光を励起させて顕現する。

赤、橙、黄。暖色の魔法は堅牢無比な防御の魔法。茨の壁を誇る城砦や盾を構えたトランプの兵隊、白馬にまたがる騎士を模してアリスを護るように布陣する。触れたものを容赦なく焼き焦がす攻勢防壁だ。

青、藍、紫の寒色の魔法は鎧袖一触の攻撃の魔法。竜やグリフォン、バンダースナッチといった怪物の姿を取って顕現し、全てを蹂躪せんと私へ一斉に突撃してくる。

それらを統括する緑の魔法に身を包み、アリスはまるで遍く不思議、お伽の魔法の女王様だ。

「さあ、もう容赦しないわ！ 地平の果てまで吹っ飛ばしてあげる！」

「へえ。少しは楽しめそうね」

「減らず口も今のうちよ！」

先陣を切るのは、彼女の忠実な部下である人形たち。七色の魔法が私を取り囲むように布陣し、逃げ場なく取り囲んでくる。

私は箒の上でパイプから紫煙をくゆらせ、ハルシゲシの煙を一杯に胸に吸い込んだ。ぎゅんと世界が極彩

色に染まり、意識が加速する。

ふうと大きく息を吐き、箒の柄を掴んで体重を傾け、落下の速度に身を任せた。

空を急降下するグリフォン、炎を吐くドラゴン、時計の針を構え跳ねる白ウサギ。次々に怪物が飛びかかってくる。後ろではトランプの兵隊が紅白のバラの垣根を構えて堅固に防御を固め、物陰から暗殺者バンダースナッチが爪を閃かせる。

全てを踏み潰さんと咆哮を上げ、進軍するジャバウオックの巨体を見上げ、私の口元は自然にほころんでいた。

「うふ。うふ。……あははははは！」

アリスの魔道書から溢れ出したのは、確かに一つの異界だった。これを魔道書一冊が生み出しているというのなら、確かに破格の力だろう。

けれど、足りない。こんなものじゃ全然足りない。

いまや私は弾幕の布陣全てを、雨粒のような一つ一つまではっきりと見て取れる。視界がいくつにも分かれたれ、私は箒の上から対峙するアリスの手の内を全て見

通すことが出来た。

箒を加速させ、空を奔る。何よりも自由に、何よりも速く、この空全てが私のものだ。

「——なッ!？」

アリスが驚愕に目を見開く。

空を駆けた私の手から放たれた魔力の鏃が怪物の群れを打ち抜き、激突の衝撃が森を揺るがしたのだ。

星の弓矢に脳天を撃ち抜かれたグリフォンが墜落して地面に激突。ドラゴンは魔界の炎に巻かれて黒焦げになり、飛び散る火花がトランプの兵隊を残らず焼きつくし、茨の垣根ごと薙ぎ払う。

ジャバウオックの首を切り落として掲げ、バンダースナッチは鋭い穂先に追い詰めて串刺しに、白ウサギはいまや捕虜となつて籠の中。

全天の眼を手にし、もはや私に敵は無かった。

「うふ。相手が悪かったわね、アリス」

そうだ。勝てるはずがない。魔界の公子だろうとなんだろうと、最強の魔道書を手にしていようと、お姫さまが魔女に敵う訳がないのだ。繰り出した魔法全て

を無様に破られ、魔道書のページは灰になって燃え落ちてゆく。

地面にぺたんと尻餅をつき、泣きべそをかくアリスのみつともないことといったら、おかしくって笑いだしたくなるくらい。

まったく、挑んでくるなら少しは強くなってるのかと思つたのに、前と全然変わりやしない。

「うう……なんでよ!! ママの魔道書まで持つてきたのに、どうしてこんな奴に、勝てないのよおっ」

「ご挨拶ね。それだけあなたの魔法が未熟つてことでしょ」

勝者の余裕とともに手を差し伸べ、何気なく口にしたことだったけれど——それはアリスの気分を酷く害したらしかった。

ばちんと私の手を払いのけ、きつと私を見上げて彼女は叫ぶ。

「うるさい! きちんと魔道書のスペルの綴りも読めてない癖に! なんなのよ、あなたのデタラメ、インチキにもほどがあるわ!」

「負け惜しみはみつともないわよ。よつぽど悔しかったんだろうけどね。約束通り、言うことは聞いてもらうわよ?」

「ううううー……っ!」

癇癪を起こすアリスだが、どうあれ私の勝ち揺るがない。

それからアリスはしばらく、私の元で使用人として働くことになった。自分以外の魔法使いを、召使いとして好きに従えるというのは一度やってみたかったことでもある。

ちようと魅魔様もしばらく留守にしていたので、私はこれ幸いと普段の仕事のほとんどをアリスに押し付けて、しばらく楽をするつもりだった。

けれどそれは大きな誤算だった。なにしろ、アリスは自分でも言うように魔界のお姫様。それまでほとんど家の手伝いもしたことのないような生粋のお嬢様らしく、掃除をすれば床を水浸し、洗濯をすれば一張羅をびりびりに破り、ご飯を作れば見事に黒焦げと、家事はなにからなにまでまるつきり下手くそだったのだ。



片付けさせてもいつまでかかっても終わらないので、結局私も手伝う羽目になって、かえって仕事が増えてしまったくらいだった。

最終的に、根性無しのアリスは、一週間のはずの約束を破り、三日目の晩に身代わりの人形を遺してどこかへ逃げ出したのである。ご丁寧に再戦の挑戦状まで残して。

「……ま、いつでもいらつしやい」

追いかければ簡単に連れ戻すこともできたらうけど、私は寛大に見逃してやることにした。

——結局。この時の私と、この時のアリスが再会することは、もう二度となかったのだけだ。



## 【六】

お屋敷に、突然幽香がやってきたのは、良く晴れた夕方の、もう日も沈もうとする時間だった。

人の家を訪ねてくるのにこんなタイミングを選ぶあたり、どうなのかと思うけれど——挨拶もそこそこにならずかと玄関に上がり込み、私を捕まえて言うには、  
「夢幻館がなくなるのよ」

……と、実に、胡乱な話。

「……？」

言っていることの意味がよく分からず、私は首を傾げる。あの大きな館が？ まあ、夢や幻が凝つてできた場所らしいから、あまり頑丈にも思えないし、仲良く一緒にやつていけるとはとも思えない顔ぶれの妖怪達がひしめいているし、そういうこともあるのかもしれない。

「だから、私もそろそろお別れ。そのご挨拶に参りましたの」

「ふうん。大変ね」

言われたところで、大した感慨は無かった。

そもそも私とこいつは別段親しいという訳ではない。そもそも普段から何を言っているのかよく分からない性格だったけど、ひとたび暴れ始めればそこら中のものを根こそぎ吹き飛ばすまでやめられないような傍若無人なやつだ。夢幻館の騒動で顔を合わせて以来、魅魔様も私も、こいつに割り込まれて不快な気分になった事は一度や二度ではない。

「魅魔はどこ？」

「お出かけよ。いつ戻るかも分からないわ」

私はその間の留守番という訳だ。魔界から戻って以来、魅魔様は一人で物想いに沈んでいる事が多くなつた。自分の部屋に閉じこもって何日も出てこなかったり、今日みたいにふらりと出掛けて、しばらく帰って来なかったりということがしょっちゅうだ。

前のように魔女香を欲しがったり、突然思い立った

みたいにご飯やお風呂を用意しなさいと命令を申しつけることもなくなっていた。最初のうちは一人の時間を持って余していたけれど、いまは私も自由な時間を使って新しい魔法の研究や魔法薬の調合をするようにしていた。

ずうずうしくも上がり込んで要求してきたお茶なのに、幽香はカップに口もつけず、ふうんとそれを聞いて、一人何かを頷く。

ちようどいいわ、と呟くのだけが聞こえた。

「ねえ、魔理沙。あなたはなあに？」

そうして、いきなり前触れもなく、夢と幻の妖怪はそんな事を聞いてきた。

「おしえて頂戴。あなたは、なあに？」

わけもなく、どきりとした。

「……な、何言ってるの、幽香」

思わず上擦るを押さえて、努めて慎重に、訊き返す。幽香が見せているのは、いつもと同じ笑顔。その裏側に何を知っているのかも、何を考えているのかも窺わせない、底知れない笑顔。

わからない。急に足元が無くなってしまったかのような、理由のない不安に駆られる。

前に夢幻館で会ったときと、その次に魔界で会ったときと、この幽香は、ほんとうにおなじ妖怪なのだろうか。だって、こいつは――

（……違う、何考えてるのよ、私）

動揺を押し隠そうとカップを口に運ぶ。震えるカップの縁が歯にあたって、みっともなくかちやりと音を立てる。

お茶の味なんてしなかった。

「――クオラ天讃議、序文第七節」

「……………」

「十大四則原論におけるラヴニカ排他原理三則」

「……なんのこと？」

不安はどんどん増していった。聞き返す私に答えは返さず、幽香は淡々と質問を繰り返す。

まるで、私を試しているかのように。私を図っているかのように。

「ヴィヴォニッチ手稿、四編の対比におけるエメリラ

学派の二大解釈」

「ねえ、幽香！ なんのことよ!!」

なんだろう。分からない。分からないことが私を不安に駆りたてる。

幽香のことばのひとつひとつがやけに耳に障った。

嫌なのは言っていることの内容ではなくて、それを質す口調そのものだ。錆びついた蝶つがいがきしむみたいに、不快な音で心をさか撫でる。それに気づいてはいけないのだと、誰かが叫んでいる。

けれど幽香は私には答えずに、くすくすと笑うばかりだ。幽香は腕を組んで、うんと背中を反らせた。豊かな胸を強調するように、ぎしりと傾けた椅子に体重を預け、今日の天気の話をするかのような気軽さで私を無視する。

「この前、魔界に行った時にね。あのアリスって子と戦って、勝ったから、魔界に居る間にあの子に魔法を教えて貰うことにしたのよ。ちょうど貴方達が暢気に観光をしてた頃ね」

そう言つて、幽香はばさりと、テーブルの上に何冊

も魔道書を広げた。ばらばらと風にあおられて、難しい字のいっぱい書かれた本の頁がめくられる。

そこには綺麗な字でたくさんの赤ペンの書き込みと、びっしり書き取られた複雑なスペル、何千行にも及ぶ構文の試行錯誤の跡があった。

幽香はテーブルの上に積み重なった本の山の上に、乱暴に肘を乗せて、手の甲の上に細い顎を置く。

くしゃりと、貴重な魔道書の頁の一枚が無惨に千切れてゆく。

「あの子が、——アリスがね。さんざこれが究極の魔法だなんて煽るからちよつとは期待してたんだけど、全然つまらなかったわね。すぐに覚えられたし、こんな魔法、使わないだろうし。なんだか凄いことみたいと言つてたけど、世界の創生なんて、私には興味がないもの」

「ねえ、幽香。あなたは何を言つてるのかしら」

「分からない？」

夢幻館の主はくすくすと笑う。

そこでは、かつての姿を捨て、成りたいものになれ

るという、夢と幻の世界の支配者が、私を見降ろして愉快そうに口元を歪めた。

「そうね、あなたには分からないはずね」  
そうして、こいつは――

「ろくに字も読めない、あなたにはね」

私がずっと隠し続けていた、誰にも内緒にしていた秘密を、口にした。

「さっきのはね、どれも魔法を学ぶための初級教本。魔法使いならね、どんなに駆け出しの見習いでも、答えられなきゃいけない基礎知識よ。九九やひらがなの読み方みたいなもの」

くすりと、殊更に嗜虐的な表情で笑みを浮かべ、幽香はテーブルの上の本の山を無造作に押しやった。貴重な魔道書がばさばさと床に散らばる。

貴重な、はずだ。そのはずだ。大丈夫だ。私はそれを知っている。きちんとそれが分かる。読めなくなつて、ちゃんと、分かる。

「欲しければあげるわ。もう全部覚えちゃったし。あなたのところにあつても枕になるか、埃をかぶつて積み木になるくらいでしょうけど。」

……ねえ、魔理沙。あなた、この一年でとっても力を付けたって言うてるけど」

気づけば。幽香の顔が、鼻の触れそうなくらい目の前に迫っていた。さらりと流れる緑の前髪に隠れて、その表情を伺うことができない、夢と幻の妖怪の顔が私を見下ろす。

私は答えられない。唇をかみしめたまま、うつむいて、何も言い返すことができなかった。

女に学問は要らないんだ。賢しらに男の仕事に口を出すな。

だから、こんなものは読まなくていい。

「あなた、字が書けないんでしょう」

そうだ。私が読めるのはせいぜいが平仮名と、数字くらい。書けるものと言えば、自分の名前くらいだ。後は全部、見よう見まねの、でたらめだ。

「……あなたの使つて魔法、それはいったい、誰の力なのかしらね」

駄目だ。

耳を貸すな。

でたらめだ。全部こいつの嘘だ。私を惑わす甘言だ。

これ以上この妖怪を喋らせるなと、私の頭の中で警鐘が響く。

——でも。

そう叫んでるのは、本当に私なのだろうか？

「アリスに二回も勝ったって言うから、あなたも少しはマシになつてゐるのかと思つたけど、全然駄目そうね。魔法使いとしてなら、アリスのほうが断然有望」

「……るさい」

囁くような幽香の声が、無性に耳に障った。

こいつは敵だ。私を脅かす天敵だ。得体の知れないばけものだ。

私から偉大なる魔法を奪おうとする、怪物なのだ。

「ねえ、魅魔はあなたを魔神や悪魔と契約させてくれないでしよう？ どうしてか疑問に思つたことはない？」

「……うる、さいつ」

「契約なんてできないからよ。魅魔の使い魔でしかない、あなたにはね」

「うるさい！ 黙れ、ばけものっ！」

「あら、あなたがそれを言うの？」

とん、と、幽香の指が私の胸を指す。あの森の悪霊と同じものになった、私の胸を。

「ねえ、魅魔はあなたの師匠なのよね？ その魅魔は、あなたに何を教えてくれたのかしら？ 魔術書の読み方？ 印章の刻み方？ ハンドサインの順番？ 天宮語の読み方？ 構文は？ 天文の計算方法は？ 七耀の扱い方？ 五行の操作は？

……そのどれも違うわよね？ 当たり前よ。だってあいつは悪霊。魔法使いなんかじゃないもの。悪霊は魔法なんか使わない。あなたを弟子にしたって、魔法なんて教えられないのよ、魅魔は」

幽香は言った。

私の魂は。

とうに、あの悪霊のものであるのだと――



夜に、星の輝きが満ちていた。月の無い空、満天の星々が最もその輝きを増す日。流れる銀河に、大三角に、北極星が空を占める。

全身に満ち溢れる万能の力とは対照的に、私の心を

強く、焦燥が満ちていた。

「魅魔様を復活させるのよ！ 霊夢、おとなしく陰陽玉を渡しなさい！」

博麗神社の上空。ありったけの魔法を空に広げ、高らかに宣言する私にも、霊夢は面倒そうにちらりとこちらを見上げるだけだった。

最後通告のつもりで突き付けた言葉をまるっと無視されて、私はぎりりと歯を軋ませる。

こいつはいつもそうだ。私にとって命を賭けた重大事すら、こいつにはまるでどうでもいいことなのだ。

「私は本気よ霊夢！ 今日のごっこ遊びなんかじゃないわ。本気であなたと戦いに来たのよ！」

魅魔様が霊夢に魔界行をさせたのは、陰陽玉の封印を解く為だった。こつそりと魔界に渡りを付け、神社の後ろにある〔門〕を開いて、否応なしに霊夢が解決をしなければならぬように仕向けたのだ。

夢幻館なんかとは違って、魔界を統べる神綺は本物の造物主、偉大な力をもつ神様である。彼女を慕う魔界の兵团や魔界人たちと本気になって競えば、霊夢も



陰陽玉を使わざるを得ず、残された封印の許容量を押し飛ばすこともできたはずだったという。

けれど――それを事前に察知した幽香が邪魔をしたのだ。霊夢に巻き込まれる形で私達もその異変に関わり、結果的に私も、魔界の門番やアリス達を倒すことで、魅魔様の目論見を妨げてしまった。

それが、魅魔様に残された最後のチャンス、最後の賭けだったとも知らずに。

「いいわ、無視するって言うなら、嫌でもその気にさせてあげる！」

天に掲げた指先から、火花が流星となって降り注ぐ。手加減抜きで神社に叩きつけた魔法が空を焦がし、博麗の社を押し包む。天より堕ちた星の力は、やすやすと石畳の地面を砕き、神域の林に火を付けた。

素早く本殿の屋根に飛び上がり、境界を張って魔法を防いだ霊夢が、じろりとこちらを睨む。

「……魔理沙、本気なの？」

「うふふ。最初からそう言ってるじゃない。今日は出し惜しみなしよ」

悪霊は、怨嗟と憎悪の力を根源にする。

憎しみは、恨みというのは、保つことがひどく難しい力だ。時の流れは記憶をぼやけさせ、かつてあった出来事を風化させてゆく。歴史に残ろうとも当時を知る者が失われ、記録すら転記を繰り返されれば劣化するのだ。

恨みも、憎しみも、誰かに向けられるものだ。仮にその目的を果たしたとしても、そうでなかったとしても、その相手が居なくなれば、恨みはその理由を失ってしまふ。それで怨恨が晴ればいいが、多くの場合はそうならない。

もういない相手を恨み続けるうち、やがて憎悪や恨みは最初の意味を見失い、ただ憎むために憎み、恨むために恨むようになって、最初にどこを向いていたのかも分からなくなる。

「見なさい、霊夢！」

あははと声をあげて、私は箒を投げ捨て、背中の羽根を誇示するように広げた。

純白の翼が羽毛を散らして夜空を裂く。魔力を使っ

て織り上げた霊巢、天使の翼。この満天の星空を飛翔する、私の翼。昔、霊夢が倒したというサリエルの翼にも勝るとも劣らない、私の力だ。

私は強い。空を飛ぶのにもうあんな古臭い筈なんて必要ないのだ。

私は一人で空を飛べる。一人で、戦える。誰の助けなんかなくたって、私は強い。

私は、自由だ。

——私は、魅魔様の奴隷なんかじゃない！

声にならない絶叫を飲み込み、力に変えて魔法を撃ち込む。練り上げた魔力の光が星のきらめきとなり、夜空から降り落ちる流星になって霊夢を押し潰す。

連なる轟音とともに、博麗神社の周辺が粉々に押し砕かれてゆく。

「うふ」

引きつった口元がつり上がり、自分でも知らないうちに笑みがこぼれる。莫大な魔素を食ったことで、空

間に歪が生じる。それを強引に魔力で補って、私はさらに星の魔法を撃ち放った。この夜空は、星空は、無尽蔵な私の魔法。地に群れる愚昧な者たちを好き放題に蹂躪する、私の奇跡の力だ。

背中の白い翼を打ち下ろし、飛翔とともに星の魔法を連発する。頭が焼き切れそうに熱い。胸が張り裂けそうに痛い。ずきりとこめかみに強い疼痛が走る。

魔女香が足りない。もっとあれを吸わないと、力が出ない。もっと強く、もっと高みへ。震える手で袖からヒビロカネの煙管を掴みだし、火打石の魔法で火を付けて、濃縮五〇〇倍ハルシゲシの煙を胸一杯に吸い込んだ。ずきずきと疼く胸の痛みがずっとやわらぎ、頭に鮮明な意識が戻ってゆく。

ああ、素敵。たまらない。もっと欲しい。そうまだ足りない。もっともつと力を。もっともつと魔法をこの手に。この身体に。

身体はさらなる魔法薬を欲していた。ちかちかと脳裏を瞬く鮮烈な輝きを北極星に重ね、紫の煙をゆつくりと吐きだした。

指の震えが収まり、背中の汗が引いてゆく。

視界が広がり、全天に瞬く星座が、欠けることなく思考を巡る。天宮を鮮やかに彩る特一等から六等星までの満点の輝きが、私の力だ。この空こそが私の、魔法の支配領域。

虚空を掴むように指を曲げ、地面へと叩きつける。空間を歪ませ、空を無数の光が走る。ひとつひとつが、太陽よりもお輝く恒星の瞬き。銀河の開闢すら己のものとする、私の魔法。

全天を満たす億千万の星々が、滝のごとく地上を打ち据える。傲慢で不遜な巫女を粉々に砕き、その輝きの中に消し去ってしまう至高の輝きだ。

「うふ、うふふ、あはは、あははははは！」

私は笑う。閃光と轟音、輝く星々の堕ちるこの莊嚴なる戦場で、魔女香の煙の中、天球儀の七つの輝きを従え、光と熱とにその身を焦がし、純白なる天使の翼を背中に、叫ぶ。

「どうかしら霊夢！ 思い知った!? これでも、これでも、私が弱いって言うの!？」

「——良く分からないけど」

視界を埋め尽くす銀河の弾幕の向こうから。ぼそりと声が聞こえた。

蟻どころか、微小な塵すら這い出る隙間もない、無限の銀河の弾幕を、まったく意に介さずに擦り抜けて。博麗の巫女の姿は、私の眼前にあった。

「避けるのはそんなに大変じゃないわね」  
そう言う霊夢の姿もまた、

何の支えすらなく、空の上にあった。

こいつは、羽根すらもたずに、ふわりと——空を飛んでいるのだ。ただの人の姿のまま、ただの少女の姿のまま、重力の鎖など初めから存在しないかのように、やすやすと地を離れて。

空を飛ぶ、不思議な少女。

これが、霊夢。

これが——博麗の巫女。

「——ッ、この、……ばけものめ！」

親友に向けられた汚い罵声は、遮二無二引き絞った弾幕の轟音にかき消された。魔素を吐き散らし、高めに高めた火力に任せて火花を散らして、至近距離のバツクファイアも考えず、ありったけの魔力を弾幕に変えて霊夢に撃ち込む。反動が腕を痺れさせ、指が火傷してずきずき痛む。

駄目だ。駄目だ駄目だ駄目だ。こいつをこれ以上生かしてはいけない。こいつはなにもかもを危うくする。こいつがただ生きているだけで、私は二度と起き上がれないくらいにズタズタにされてしまう。

[5]

勝たなきゃ。駄目だ。負けていられない。どんな手を使ったっていい。あいつには絶対勝たなくちやいけない。あいつは私を脅かす。あいつは私を辱める。あいつは私を害する。あいつは私を凌辱する。

霊夢を、

博麗の巫女を――せ。

あいつを、殺せ。

腹を裂いて殺せ。頭を砕いて殺せ。背骨を折つて殺せ。眼を抉つて殺せ。喉を搔き切つて殺せ。胸を貫いて殺せ。心臓を握り潰して殺せ。

殺せ。殺せ。殺せ。

殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。

[illegible]



と、元素の一粒も残さずに消し去る力を。

私の喚起に、魔法が応える。私の身体が、願いを叶える悪霊と同じものに成ったこの身体が、私自身の要請に基づいて、願いを叶える。

吐き散らした魔素は火花の尾を引いて、弾けるようにくるくると踊り狂い、私の胸の中に全天の銀河が降り注ぐ。私は閃光、私は流星。天を統べる億千万の星をもつて、塞がる全てを消却する。

握り込んだ指を軸に、ありったけの魔力が集束してゆく。もつと明確に、もつと直接、あの巫女を、博麗の巫女を叩き潰す。それに相応しい力のイメージが、脳裏をよぎる。幽香の使っていた、あの魔法。立ち向かってくる相手を残らず薙ぎ払い、焼きつくす消滅の魔法。閃光の支配者。

解き放たれた閃光が、紅白の巫女をその輝きの中に飲み込んだ。極太のレーザーが、轟音を立て天から大地を穿ち貫く。光、この光だ。まばゆいばかりの輝きに、少女は輪郭すら失って消えた。

まだだ。影さえ残さず焼きつくしてやる。全身から

ごっそり魔力が引き抜かれていく。もう魔法薬でも魔女香の濃縮液でも足りやしない。ぶちりと、額が裂ける感触があつた。それでもレーザーを途切れさせず、強引に振り回した。

そうだ、巫女だけじゃない。この神社も。屑みたいな大結界も、忌々しい幻想郷も、全部、全部。全部、呪つて、犯して、ぶち壊す。

「……ああもう、いい加減にしないで」  
突然。有り得ない声が聞こえた。

巫女が。霊夢が。するりと――虚空に開いた亜空穴を通り抜けて、私のすぐ傍に居たのだ。

「ツッ！」

なんなんだ、

なんなんだ、こいつは！

額の傷からぬるりと血が流れる。溢れた血が眼に入つたか、視界が赤く染まる。ずきずき痛むおでこを擦ると、びくびくとのたうつ生々しい肉の感触があつた。ああ、力だ。魅魔様の力だ。

額に『眼』が開く。そうだ、これも魅魔様のくれた

力だ。あの、赤い右目の邪眼。

支配の魔眼。蠢く邪悪、ひしめく悪意、  
幽幻魔眼。

そうだ。力だ。わたしの力だ。

「——ああ、そういうこと」

したり顔をする霊夢に、腸が煮え繰り返る。特大の魔法をお見舞いしてやろうと、光と熱に同化した指を、その喉元に向けて突きこんだ。

「面倒だから」

ほんとうに。

庭の掃除が億劫だとか。お茶菓子を用意しに戻るのが面倒臭いのだとか、そんなのと同じような口ぶりで。

「これでお終いにするわね」

霊夢は、私に向けて符を叩き付けた。



外は、夜更けから激しい雨になった。魔女帽子が水を吸って、重い。ひさしから垂れる水

滴が跳ね、黒いローブの裾を湿らせる。箒をほとんど引きずるようにして居たため、魔界屈指の箒匠による名品、〈焰矢〉は無惨に泥にまみれ、穂をぐちゃぐちゃに潰してしまっている。

魔法の森の濃い瘴気は、雨に溶けて地面を流れ、低い場所にミアズマとなつて溜まる。腐敗から毒が生まれるように、濃縮された瘴気の毒素は凄まじく、そこに踏み込めば、耐性のあるものだってすぐに死んでしまうくらいだ。

そんなおぞましいミアズマの吹き溜まりに、魅魔様の姿はあった。

「——魅魔様」

三日三晩を森の中をさまよい歩き、ようやく突き止めたその場所は、私と魅魔様が初めて出会った、あの古ぼけた石碑の建つ広場だった。

掠れた声で。私は私の師匠である、悪霊に訊ねる。

どうしても、その顔を見る事が出来ない。魅魔様がどんな顔をしているのか、確かめるのが、怖かったのだ。おでこにずきりと痛みが走る。埋め込まれていた

紅い邪眼が砕かれた痕だ。

私の魔法は、なにひとつ霊夢には通じなかった。

魔界の炎も、天の星の輝きも、なにひとつ、博麗の巫女を傷つけることはできなかった。

それは、

私の使う魔法が、すべて、森の悪霊に根差す力をもっているからだ。

「わたしは、どうなったの」

違う。本当は。

確認するまでもなく、もう私だって気付いていた。

あれだけたくさんある魔道書を、私は一冊も読む事が出来ない。

私の使う魔法には、呪文も、触媒も、発動体も、収束具も、封印具も、あらゆる代償の必要がない。

私が自由にする、天の星々、炎や光、遍く世界に満ちる力は、ただ、そうと意識すればまるで手足のように使うことが出来た。そんなものが、そんな理不尽なものが、魔法であるはずがあり得ない。

魔法の基本原則は、等価交換だ。侵すことのできな

い、絶対的な規則。覆せない大原則。

では私は、あの膨大な魔法を使うのにふさわしい代償を、いつ支払ったのだというのだろう。それに見合うだけの対価を、いつ捧げたというのだろう。

そんなはずが、ない。

それは全て、私の魔法ではなく——私に貸し与えられていた、森の悪霊の助力でしかなかったのだ。

私は、魅魔様の力を使って、偉大な魔法使いになりきっていただけだった。

私は魅魔様のからだを作る霊体を取り込み、魅魔様の支配下に置かれた、使い魔のようなもの。私は私の身体を通じて、魅魔様の力を振るっていただけだったのだ。

「私は、霊夢を殺したいなんて、思ってたかった」  
実際には、叶わなかったことだけだ。

霊夢がもし人並みに勘の鈍い、普通の女の子であったなら。今頃私は嬉々として、血塗れの手に陰陽玉と、彼女の首を抱えて、魅魔様に捧げていた事だろう。

「私とあの子は、友達なのに」



ずきりずきりと頭が疼く。傷の痛みだけじゃない。もつともつと頭の奥のところで、なにか別の生き物が苦しがり、うねって暴れている。私の心を好き放題に食い荒らして、空っぽにしてしまったおぞましい何者かだ。

雨はなおしつこく、いつまでも降り続く。深い泥濘の中にずぶりと埋まった靴が、じわじわ気持ち悪く冷たい泥を染み込ませてくる。けれど私の纏うローブは、深い黒の中に全ての汚れを飲み込んでしまう。

それが魔女だ。呪詛と汚辱と嫉妬と穢れをその身に集めて、陽の下に生きる者達を憎むものだ。

「簡単なことさ、真理沙」

ああ。

わたしの本当の名前。捨てたはずの本当の名前を。私を自由に出来る筈の、本当の名前を。

どうしてこの悪霊は、知っているんだ

悪霊は嗤う。高らかに、傲慢に、陰湿に。憎悪を、この世界全てへの憎悪を込めて。右目にひしめく紅い眼球——幽幻魔眼ともよばれた、邪悪な魔物の力。視

線だけであらゆるものを支配し、思い通りにその心を在り方を捻じ曲げてしまう邪視。

魅魔様を取り込んだ、力だ。

「お前と初めて会った時に、名前を聞いたね」

ああ。

そうだ。私は迂闊にも、この悪霊の前で。幻想郷を呪い穢した、並ぶもののない大悪霊の前で。迂闊にも、自分の名前を名乗ってしまった。

霧雨、真理沙と。

真名を知る者は、その相手を服従させ、支配し、好きに操ることができる。だから魔法使いは本名を容易く明かさない。悪魔や魔神と取引するときには、それが何よりの基本だ。

「霧雨の家のことは、よく知っているのさ。……だから、お前が嘘を言っているのもすぐ分かったよ」

そんなことで？

そんなことで、私は？

「お前の、ここの中のね」

とんとん、と。わたしの心臓のあるところを指で叩き、魅魔様は言う。

「おまえの恋心を、切除したのさ。……そんなものは復讐するのに邪魔だからね」

復讐。

森の悪霊は――

かつて自分を滅ぼし、封印した、博麗神社を、博麗の巫女を、憎んでいる。

「魔女のお前が恋だなんて、おかしいだろう？ そんなものはお前には不要だよ、真理沙」

魔女は、生あるものを呪い、憎み、妬み、嘆き、傍若無人に暴れまわる害悪だ。そんなものに恋は要らないと、悪霊は言う。博麗の巫女を殺すために、恋なんて必要ないと、悪霊は言う。

遠く稲光が走る。空を駆け落ちる落雷が、どこかで古木を打ち倒し、ぱちぱちと煙と炎を上げていた。

「それを人間の世界じゃ、去勢って言っただろう？」  
私は絶叫した。

【断章】

——ねえ。あんたさ。

前に会った時、もう、そんな気は無くなったって言  
ってなかったっけ。

別にいいけどね。あんたが悪さをするなら、退治す  
るのが私の役目だし。

呆れた。まだ動くの？

それ以上やるってんなら、命の保証はしないわよ？

……ああ、もともともう死んでるんだっけ、あんた。

まあ、どっちだっていいけど。

……。

……………。

そろそろ気は済んだ？ いい加減くたびれるのよ。  
あんたに付き合うのも。こっちはただの人間なんだか  
ら。

あつそう。……勝手にして。

……。

………。

……ねえ。

あんたが消えるのは勝手だけどさ。その前に。

——あの子に、人間の心を返しなさい。

あの子を使い魔にするのも、あんたがそうやってあの子を騙すのも、知ったことじゃないけど。

---

あの子があんたと繋がって、その力と一緒にあんたの憎しみを引き受けたから、あんたは正気に戻れたんでしょ。

……その責任は、取るべきよ。わかった？

——いいわね、魅魔？



それからの事は——じつは、もうあまりはつきりと、覚えていない。

私が気付いた時、もうとつくに夜は明けかけていて、薄暗い雲間から差し込む、白む空からの光が、霧深くたちこめる森の中に指し込んでいた。穏やかな灯りの中、数年ぶりに空を拝むであろう森の木々が、朽ち折れた大樹の下から芽を伸ばし、葉を広げる。

ようやく静まった騒乱のなかから、逃げ遅れて木々の下敷きになった小さな虫たちが、次々に逃げ出していく。

私はボロボロになったローブの脚を押さえ、息も途切れ途切れに、その場を見降ろしていた。

魅魔様は、右手以外の手足を失い、身体も千切れて、苔の絨毯の上に身を横たえていた。

「……ッは」

魅魔様は激しい咳の間に、啞えたヒイロカネの煙

管から、紫の煙を胸に吸い込む。

げほげほと咳き込むその姿を、けれど魅魔様は氣にもしていない。

「ザマあないねえ……。あの、神綺と、魔道書を相手にして、少しばかりは消耗してるんじゃないかと思っただけ。思ってた以上のわけものだっただけだね。博麗の巫女サマってのは」

毒づく声は、いつもと同じ、あの優しい声。

魔理沙魔理沙と私を怒鳴りつけ、あれこれ用事を命じる、気難しくて我儘な、お師匠様の声音だった。

ぼろぼろに崩れた魅魔様の姿を見て、私はようやく自分の愚かさに気付く。

これまで自分のものとしていた魔力も、神秘の階梯も、儀式も、様式も全て失って。ただの女の子と大差ない私が、どうして、真名を知る主に背き、抗い、勝つことが出来たのか——

簡単だ。魅魔様は、とつくに力のほとんどを使い果たしていたんだ。

魔界での連戦？ 霊夢との決闘？

違う。そんな訳ない。

悪霊の本質は誰かを害し呪うことだ。悪霊は悪いからこそ悪霊なんだ。それを止めてしまったら、魅魔様は悪霊ではなくなってしまう。

人間で言うなら、死ぬということだ。

あの日。私を弟子にした時から、森の悪霊は少しずつ、その力の源を失っていった。悪魔や魔神にとって、契約は絶対だ。悪意によって条文を読み変え、意図的に解釈を変えることでしか、それに抗う術はない。それが出来ないのなら、たとえ命の危険があるとしても、従僕は主を守らなくてはいけない。

魅魔様が私を使い魔にするよりも前。私は、師弟の契約によって魅魔様を従えていたのだ。

契約により本来の形を歪められ、できるはずもないことをさせられ、魅魔様は酷く衰弱し、実体化するための力すら失くしていた。

私という弟子をもつて以来、魅魔様の力は失われる一方だった。無差別に悪意をばらまくことで、危険な悪霊としての自分を保っていた魅魔様が、私という庇

護対象を得て、その悪意の行き場を失ってしまったからだ。

霊夢が倒した幽幻魔眼の残骸を吸収して、邪視の力を取り込んでいたものの、そんなものでは焼け石に水だった。

そうだ。

私が、殺したんだ。

「——なんて顔してんだい、せつかくの可愛いお化粧が台無しじゃないか」

帽子のつばが隠す視界の外から、とても懐かしくて優しい声がかかる。

違う。こいつは私を弄んだ魔女で。

私の心と身体を、おぞましい悪意で、取り返しがつかないほどに蹂躪した悪霊で。

女の子の大事な気持ち、無慈悲な魔法の刃で残らず切り刻んだ、ばけものだ。

それなのに。

……それなのに。

「大丈夫さ、魔理沙」

まりさ。私の名前を呼んでくれる、懐かしくてあたたい声。大嫌いだっただけの自分の名前を——霧雨の家では、怒鳴られ、怒られ、叱責される時だけにしか呼ばれなかった名前を。

真理沙から、魔理沙に変えてくれた、優しい声。

わたしの、せんせい。

「もう、お前は自由だよ、真理沙」

うそだ。だって、だって、私は、魅魔様の。

この悪霊は、卑怯にも私を騙して従僕にし、命尽きるまでこき使うことができるはずだった。

このひとは、私が立派な魔法使いになるまで、私を教え導く先生であるはずだった。

それなのに。どうして、そんなことを言うの。

喉が震える。胸の奥にまで熱く湿った砂が詰まって、息をするのも難しいくらいに、重い。唇が痛み、頬が腫れて、ただ意味もない慟哭だけをこぼすばかりだ。

あれだけすらすらと出てきた神秘の叡智も、空を焦

がすほどの魔法の呪文も。

この人に、伝えるべき、大切な言葉も。

私は、口にできずにいた。

「お前の強さと一緒に、お前の恋を奪ってしまった事を、許しておくれ」

私に酷いことをして、虐げて、自分の復讐の道具にした、憎い悪霊。

私は憧れた。憎んだ。そして焦がれた。惹かれた。

あの博麗の巫女に。幻想郷の中心、ただひたすらに弾幕ごっこが上手く、だからこそどんな妖怪も彼女の前には矛を収める。幻想郷の少女を体現したような彼女に。

「ほら、もっとこっちに来て——顔を上げな」

あとからあとから溢れてくる涙を、私は留めることができなかった。だって。だって！

「みま、さま」

「やっぱりあんたは、あの子と一緒に、その金髪がよく似合うね」

「魅魔様っ！」

嘘だ。でたらめだ。

だって、魅魔様、もう、

……もう、目が。

「——魔理沙」

しゃくり上げる喉が応えられず、私は何度も、頷き返すだけだった。ぽたぽたと、情けないほどに涙が、足元に散らばる。

「どうしたんだい、魔理沙」

そっと大きな手が、優しく帽子の上から、頭に乗せられる。

「いつまでもそんなところに居ないで、はやくいきな、まりさ」

もういいだろうと、先生は言う。出来の悪い弟子の背中を優しく押し、ひとり闇の中に留まって。

あんたは一人でも歩けるだろうと。夕闇や黄昏の暗がりではなく、共にあの子と陽の下を進んでいけるのだろう、と言う。

今日までお前は魔女であった。そして、明日からは魔法使いだろうと。駄々をこねる私を送りだす。

「いきな、まりさ」

「……だいじょうぶ。あたしや、ここにいますよ」

「魅魔様っ！」

限界だった。押し出すように、涙と鼻水にまみれて、ありったけの声で叫んだ名前は——

もう、どこにも届く相手をもたず。

臉にその面影と、確かなぬくもりだけを残して。森の悪霊は、この日、私の前から姿を消した。



## 【終章】

「よう」

「……なんだ、あんたか」

代わり映えのしない博麗神社。ぼんやりと境内の石畳を掃いていたそいつは、手を止めていつものように興味なげな視線を向けてくる。

「しばらく見ないうちに変な格好するようになったのね。魔法使いは廃業したの？」

「馬鹿言え。どこからどう見ても立派な魔法使いじゃないか」

「白黒になつてゐるじゃない。縁起でもない」

口を尖らせる霊夢だが、そこまで劇的な変化じゃないのだ。

これまでの魔女服の上着をやめ、春らしくフリルのあるブラウスにベストに取り換え、エプロンドレスを

付けて、帽子にも白のリボンでワンポイント。ちよつと髪も饅で巻いてみた。魔女らしさと女の子らしい可愛さを兼ね備えた、自分でもなかなかのコーディネートだと思う。

「心境の変化だぜ。お前が紅白なんだから吊り合い取れて結構だろ」

にっと笑みを見せてやると、霊夢は「へんなの」と実に素直な感想をぶつけてくれた。齒に衣着せぬ物言いは有り難いけれど、実際まだこのスタイルには、いまいち自分でも馴染めていないのだ。あまり突っ込まれないのは有り難かった。

「神社でお葬式なんか、遠慮願いたいもんね」

そういう霊夢の服も、前まで野暮ったい白衣に緋袴のとは随分違っている。袖に切れ込みを入れて紅の飾り糸、下は縫い取りのあるスカートだ。すっかり垢抜けた様子で、髪も大分弄ってリボンも取り換え、うっすらと紅も引いているようだった。

香霖のところで新しく仕立てたとか言ってたけど、そのせいかもしれない。あいつはどういう具合か下着

にドロワーズばかり押しつけてくるので（女の子が丸見えじゃはしたくないなどとよくお説教も付いてくる）あまりお洒落じゃないと思つていたけれど、霊夢ばかりじゃ不公平なので、今度私もあそこで新しい一張羅をいただくことにしよう。

「なんだ、茶でも出せよ、せっかく来てやったんだぜ？」

「……ま、いいけど」

どうせ、霊夢も退屈していたのには違いないのだ。

裏庭に回り、縁側から台所に入つてお煎餅と急須に湯呑みをもつてくるまでに、私も靴を脱いで靴下を風に晒した。

「で」

ばりばりと遠慮なく煎餅を齧り、霊夢は聞いてくる。

「今日は何の用？」

別段そんな素振りを見せたつもりはなかったけれど、やっぱりこいつはお見通しのようだった。博麗の巫女の特性的なかもしれないが、この勘の良さは大概どうなのかと思う。

「ふふん、聞いて驚け」

「ごそごそとスカートからエプロンのポケットを漁り、取り出したのは一枚のチラシ。」

霧雨魔法店・本日開店と大書きされたチラシを、霊夢は実に胡散臭そうに眺めてくれた。

「よろず魔法に関わることで取り扱います、つてな」

魔法の森、三本杉斜め入ると住所に地図まで付けて、完璧だ。そのままだとぼいと丸めて捨てられかねなかったので、霊夢に説明してやると、ようやくこいつも頷いてチラシに目を落とした。

「ふうん……」

結局、それ以上のことをこいつは聞いてこなかった。万事こういう奴なのだ。

「引越したのね」

「ああ」

魅魔様のお屋敷には鍵をかけ、しっかり封印してきた。大切な思い出の詰まった場所だけど、もうあそこには戻らない。その覚悟を決めて、森の木々達に念入りに迷宮の呪文まで施したから、術者である私自身、もうあそこには入り込めない。

これで二度目の家出かと思うと、少しおかしかった。胸の奥に感じる苦みを噛み締め、吐息。

「ということで、何か困ったことはないか？ いまなら開店記念の格安料金でお得だぜ？」

「そうねえ。最近神社に得体の知れない魔法使いがいついて困ってるんだけど」

「ふむん。そりや大変だな。美味いごちそうとお酒を用意して振舞ってやるといい。週に一度くらい定期的にもてなしてやると、貧乏神社にも運が向いてくるな」

「へえ、そりやすごいわね」

まるつきりどうでもよさそうな様子で、ずずつとお茶を啜る霊夢。

「そんなご大層な事を言うのは、どこのどちらさんかしらね」

その隣で、私は苦笑しつつ、最近持ち歩いている初級魔法使い向けの教本にそつと触れる。

決まってる。

様式は垣根の魔女、ハンドシンボルは星、専門は恋の魔法。目下売り出し中の期待の星。

「――霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ」

これは、私の物語だ。

私だけの、物語だ。

誰も知らなくても良い。誰も覚えていなくても良い。  
歴史とも言えない、時の流れの中に、埋もれて消えて  
いった、魔法使いの物語だ。

霧雨の魔女と呼ばれた、一人の魔法使いの物語だ、

---

※本作品の表紙には  
「東方影絵体」をお借りしました。

【奥付】

「霧雨の魔女を恋ふ」

平成25年8月12日

コミックマーケット84

オルハザカサンパンチ  
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅 おりは  
あかがね

印刷所 コミックモール様

※本作は「上海アリス幻楽団」様の  
「東方 project」の二次創作です。





折葉坂三番地

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>